

この章では、新入居者の適応過程について、その特徴や課題を考察する。新入居者は、新しい環境に慣れる必要がある。この過程には、時間と努力が必要である。また、周囲の人々との交流も重要な要素である。新入居者は、積極的にコミュニケーションを図ることが、適応を促進する。また、地域のルールや習慣を理解することも必要である。新入居者は、積極的に参加し、地域の一員として活動することが、適応を促進する。また、地域のルールや習慣を理解することも必要である。新入居者は、積極的に参加し、地域の一員として活動することが、適応を促進する。

新入居者の適応過程に関する研究は、近年増加している。これは、都市化の進展や人口移動の増加によるものである。新入居者の適応過程は、個人の特性や環境の要因によって異なる。したがって、新入居者の適応過程を支援するための施策の開発が重要である。新入居者の適応過程を支援するための施策の開発が重要である。

### 第6章 適応過程

新入居者のケーススタディ

この章では、新入居者の適応過程に関するケーススタディを紹介する。新入居者は、新しい環境に慣れる必要がある。この過程には、時間と努力が必要である。また、周囲の人々との交流も重要な要素である。新入居者は、積極的にコミュニケーションを図ることが、適応を促進する。また、地域のルールや習慣を理解することも必要である。新入居者は、積極的に参加し、地域の一員として活動することが、適応を促進する。

新入居者の適応過程に関する研究は、近年増加している。これは、都市化の進展や人口移動の増加によるものである。新入居者の適応過程は、個人の特性や環境の要因によって異なる。したがって、新入居者の適応過程を支援するための施策の開発が重要である。新入居者の適応過程を支援するための施策の開発が重要である。

## 第6章 適応過程

—新入居者のケーススタディ

これまで第3章～第5章において、居室の環境形成・施設全体空間の場の形成・入居者による評価をそれぞれ別の視点として取り出し、分析を加えてきた。しかし、実際に施設への入居者が環境に適応していくプロセスは、これまで見てきたことがすべて総合され、しかもそこには個々によって異なるさまざまな状況が加わってくる。環境適応プロセスはいくつかのいくつかの決まった要素から構成され、初期条件を与えれば自動的に定まるというものではない。それは日常生活の一つひとつの小さなできごととの積み重ねであり、しかもその一つひとつのできごとはすべて状況に応じたその場での問題解決手続きによってなりたっている (J.Lave, 1988)。すなわち10人の入居者がいればそこには10通りの適応プロセスがあり、それらはこれまでに慣れ親しんだ環境と大きなギャップのある施設環境に対するの培調の痕跡であるという意味で、すべて価値を持ったものとして捉えられるのである。

この章では、その中から3人の入居者を選び、具体的な環境への適応プロセスのケーススタディを行う。この3例はすべて94年11月に入居した人たちであり、それは施設開所後4ヶ月目にあたる。その4ヶ月の間に形成されてきた既存の「コミュニティ」に対し、新入居者がどのように関係を変化させていくのか、という視点を、施設空間に対する物理的な環境形成に対する視点と同等に重要なものとして扱う。

このケーススタディは、施設入居から4ヶ月後・15ヶ月後・19ヶ月後（部屋替え後）の3回の時点における入居者と施設環境との関わり方を記述することによって行っていく。時間軸の上で、各入居者がどのように環境と関わり、環境から影響を受け、環境に働きかけることによって自らの行動環境を形成していくのか、その変化の過程に注目する。（なお、15ヶ月後～19ヶ月後の変化は、この間に入居者全員が部屋位置をすっきり移動させるという大規模な部屋替えがあり、その影響が現れていると思われる部分である。）

具体的な手順としては、まず、各時点における施設空間・居室空間における過ごし方と環境形成の様子、交流の様子を入



居者のコメントを含めながら記述し、施設の物理的環境の中で入居者の作り上げてきた行動環境を描き出す。また、施設の制度的環境・社会的環境に対する入居者の評価をやはり入居者のコメントを含めながら記述し、それらを時間軸の上にもう一度パラレルに位置づけていくことから、各個人の適応プロセスを描き出すことを試みる。

施設の物理的環境に対する行動環境の時間的な変化を表すために、表6-1にあげたマトリクス上で、すなわち居室空間・居室以外の施設空間の各空間に対して、主体性・関係性の両側面より各時点の評価を行った。これは第3章で用いた概念であるが、それを居室だけでなく施設全体空間にまで広げて用い、以下の視点からそれぞれ色の濃淡で評価を表したものである。

- 主体性：** 人が働きかけることによってどれだけ主体的に環境を構築したか。もしくは、その環境で人がどれだけ主体的な活動を行っているか。
- 関係性：** 人がその環境においてどのような社会的関係を作り出しているか。

この3例の入居者はいずれも、特養入居者としては身体的自立度が高く、また痴呆もほとんど認められない事例となった。これは病院などから入居して身体的自立度が低下していたり、痴呆がひどく家族の手に負えなくなって入居してくるような入居者が主流を占める特養では、一般的な例とは言えないだろう。しかし、ここであげる事例はまきれもなく特養の入居者であり、そういった心身状況の低下しつつある人たちのコミュニティにおける適応プロセスを表したものである。またここでは施設に対する適応プロセスを、心身状況の低下している特養入居者の固有の問題として特殊化して扱うことを目的としていない。施設入居者と言っても、たとえ身体的自立度が低かったり、痴呆が進行していたとしても、普通の人が普通にコミュニティに溶け込んでいくことの延長上に捉えられるべきだろうとの観点から、あえてこの3例を事例とすることとした。

(表6-1) 入居者の行動環境評価のマトリクス

	主体性	関係性
居室空間		
施設空間		

## (事例1) No.47 AK

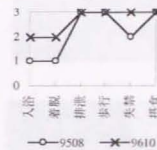
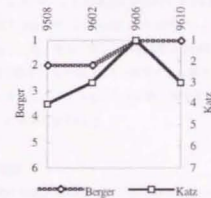
属性： 71歳・男性  
 入居： 94年11月・自宅（一人暮らし）より入居  
 自宅： 残っている（無人）

## 1) 背景

家は浦山。東京で長いこと土建業をやっていた。こちらでは農協の重役で、市長ともつながりがある。「家内と別れてからは一人暮らし。ここに転がり込んだ。」家は親が苦労して建てたもので今もそのまま残してある。入居の際、家具は施設の人に家に来てもらって運んでもらった。施設を生活の根拠にすることを明確に意識して入居してきている。「日常の服は全部持ってきている。向こうは別荘。」

## 2) 身体状況

痴呆はほとんどない。入居当初から96年2月頃まではBerger2と評価されていたが、それ以降はBerger1もしくは全く痴呆なしと評価が上昇している。身体的には片側麻痺で、杖がないと歩けないが、杖を使用しながらまったく自分の意志で移動可能。Katzでは、95年8月では入浴・着脱が全介助、失禁コントロールがときときあることで、D評価だったが、その後自立度が上がり96年6月ではすべて自立のA評価になった。その後96年10月調査では、入浴・着脱が一部介助ということでC評価となっている。職員の話では、身体的能力の問題ではなく、心理的に職員への依存度が高まったことによる。

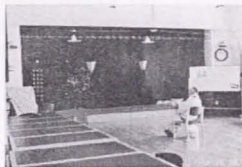


## 3) 施設における行動環境

## ・入居後4ヶ月

(95年3月)

3月3日は施設の雛祭りの日なので、この日のためにモモの花を自宅の庭から枝ごときって持ってきた。むかしから園芸が好きでやっていたので、3月3日にちょうど咲くように風呂場に入れたり外に出したりしながら温度と湿度を調整して、見事に雛祭り当日にモモの花を咲かせることができた。モモの花は雛祭りで食堂のステージに飾られるまでは、玄関入ってすぐのところに飾られていたため、本人もそこにあるベンチに座ってタバコをすいながらモモの花を見て過ごす。雛祭りの準備のためにモモの花がステージに運ばれていくと、今度は食堂に来て職員の飾り付けに対していろいろ指図をしながら、飾り付け終わった花をじっと眺めていた。



## 施設空間での過ごし方

自室にはあまり戻らず、玄関のベンチ、浴室前のベンチ、廊下の突き当たり、電話コーナーなど、一か所にじっとしておらず、semi-private ~ publicのさまざまな場所を転々としながら喫煙する。

「私はね、ヘビースモーカーなものですから。部屋じゃあ吸えないんで、こうしていろんな場所で吸ってるんですよ。部屋にいるとなんだか皆死んだ感じがします。まるで四次元の世界にいるようだ。ホールではばあちゃんたちが怒鳴っている。TVもううるさい。耳が聞こえないもんだから。私はね、もっというい補聴器にしながら言っただんですよ。あんな雑音たてるようなんじゃ聞こえるものも聞こえなくなっちゃうって。」

「(浴室前のベンチは)ここにいるのが落ちつきますね。(中庭の)眺めがいいですよ。一人で部屋にいるより、ここでぼーっとしてる方がいい。外の噴水とか四角い小さい庭を見ていると落ちつきます。わずらわしくないですよ。音楽もかかってますしね。空も一部分しか見えないのがいい。部屋にいてあの紺色の空が映っているのを見てると寒々としてくるんですよ。ここでしんと雪の降るのを見ると、ふるさとのいる気がしますね。」



## 居室空間

部屋の一番奥の窓際に、テーブルと椅子を持ち込んで、洋風らしく椅子座の空間を作っている。

「ここは洋間なんだから、皆にもそのままスリッパで入ってきなさいって言うてるんですよ。みんな農家のばあちゃんだから、部屋の外でスリッパを脱いだりしてますけどね、誰も洋間の使い方を知らないんじゃないかって思いますね。」



外国なんかでは、部屋に入るときに靴を脱ぐっていうことは、バンティ脱ぐのと同じようにとられても仕方がないですから」

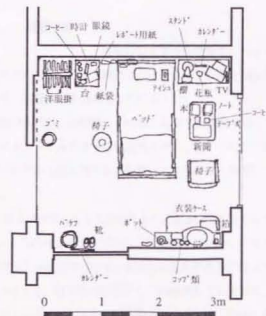
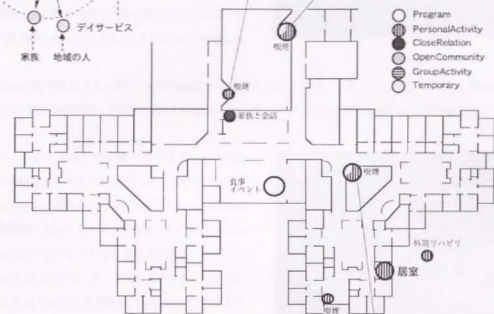
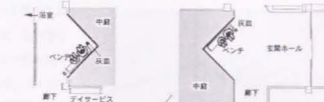
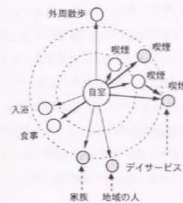
#### 交流

施設の生活は退屈なので、入居前から仲のよかった人たちがデイサービスで来るときを楽しみにしている。デイサービスのスペースで囲碁や将棋などをする。娘や孫が来たときにも、自室ではなく食堂やデイサービスなどsemi-public・publicの空間で会う。施設の中に友人はいない。「誰かの部屋に上がり込むようなことはほとんどしません。男同士で親しくなるということもありません。女の人みたいにね、べちゃべちゃ喋らないです。(男の人は) 皆ベッドにいる人が多いですから。」

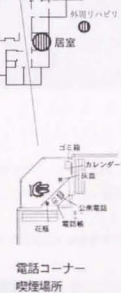
95年3月

浴室前のベンチ  
喫煙場所。デイの人と  
話しもする。

玄関ホールのベンチ  
喫煙場所



居室の環境形成

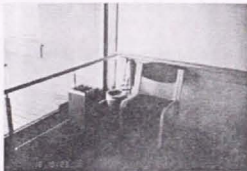


電話コーナー  
喫煙場所

## ・入居後 15ヶ月

## 施設空間での過ごし方

semi-privateの廊下の突き当たり、椅子と灰皿・ゴミ箱・TVを置いてもらい、自分専用の喫煙場所を整えてもらった。自分のライターやTVのリモコンも置いておき、自分の居場所としての占有性を高めている。他の場所でタバコを吸うことはほとんどなく、頻繁にこの席を利用して、TVを見たり外の景色を見ながらタバコを吸っている。「私が施設長に言ったんですよ。ここに(私の)喫煙場所を作ってくれて。そしたら他の場所では吸わないからって。そしたら職員の人が椅子を持ってきて作ってくれたんですよ。だから他の場所では吸いません。いつもここで吸います。」



施設の外周を杖をつきながら、毎日10周まわることを自分のリハビリのノルマとしている。1周40分くらいかかるので、朝は4時頃からまわり、昼に何かあって回れないときは夜も7時か8時くらいまでまわることもある。

「室内でやったこともあるんですが、どうも歩くときの抵抗がないんで運動量としては半減してしまうんです。雪の日も10~15cmくらいの雪なら出ます。自分でスコップを持っていて道を開けておくんです。夜に備えて、昼のうちに滑りそうなる場所をチェックしておくんです。」

「一緒に外をまわっているのは、YTくんとKSくんくらいかな。彼(KS)もちゃんと理学療法士がいてリハビリすれば、すぐ歩けるようになるのって思います。」



## 居室空間

部屋のレイアウトを変え、ベッドを奥にして手前側に椅子とテーブルを配置し、椅子も自分用だけでなくもう1脚置くことによって、人を招いたときの接客が可能にすづらえた。家族もデイの友人も、直接部屋を訪ねるようになった。

部屋の家具は、娘が新しく靴棚と簡単な食器棚を買ってくれた。また、ベッドのところには自分で特注して手すりにもちようど入るような机を作らせた。ベッドの上で胡座をくんで本を読んだりものを書いたりするのに利用している。

「これはベッドにもちようどあうように友達に作らせたんですよ。その普通のテーブルは、もの読んだり書いたりするにはちょっと低すぎます。舟見の木工所の息子に作ってもらいました。材料費だけだから、3000円していません。冗談でしょうこれじゃあ儲けが出ないと言っていたが、なにいてやがんだ、それならデザイン料よこせて言って





やっつんです。]

#### 交流

毎日施設外周をリハビリでまわっているうちに、一緒にまわっているYTさんと親しくなり、外をまわりながら話をしたり、部屋に行って話すこともある。

「彼の部屋へ行って話しますが、彼んところはお茶もタバコもダメなので、10分くらいで退散してきます。」

デイの友人との付き合いは以前から引き継いでいる。

「F君でもOさんでも、デイにはあんたに会えるのが楽しみで来ているんだって言ってくれます。この間私が密をはずしていたときにはずいぶん探してくれたようです。」



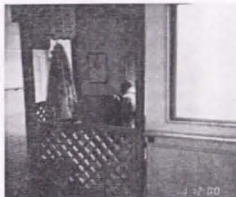
## ・部屋替え後

96年4月に全員の居室を替える大規模な部屋替えがあり、居室が東棟から西棟へ移動となり、また専用喫煙所のしつらえもそのまま西棟の廊下突き当たりに移された。

## 施設空間での過ごし方

専用の喫煙スペースはあまり使われなくなり、電話コーナーや玄関のベンチなどで喫煙することが再び多くなった。

「[西に移ってから]窓からの景色がすっかり変わりましたね。たったこれだけの移動でもずいぶん違います。こっちは山の陰になってよく見えません。」「今は入院しますが、あそこにOっていうのがいて、私は老人性結核だと思ってるんですが、施設の人に言っても誰も結核というものを知らんのですかね、それと背中合わせの場所になるんで、(喫煙スペースには)行きたくもないですね。」



## 居室空間

部屋のレイアウトは、再びベッドが手前側に来て、奥にテーブルが置かれるようになり、以前にやや近いものになった。以前よりもベッドをより手前側に寄せたため、テーブルと椅子のスペースが広がっている。自分の椅子の他に2脚の椅子が置かれており、人を招く接客空間としての意味は維持していると思われる。また、部屋替えによって、部屋からの眺めがずいぶん変わったことを感じている。

「前の部屋は公道が見えましたから、バスなど通るのが見えてよかったですよ。この部屋は山が見えるんですが、自然ですからね、昔を思い出します。」



## 交流

自治会の委員はみな比較的元気な人が集まっている。月に1回会議室を借りて会議を開くが、そのほかに自治会の連絡をまわす際にそれぞれの人のところへ行って直接話をするところがある。とくにYTさんの部屋ではしばらくとどまって、連絡がいろいろな話をする。YTさんとは、とくに部屋に行かなくても毎日施設外周をまわっているときに会っているので、その時に話をする人が多い。





## 4) 施設環境に対する評価

## ・施設であること

## ・規制

施設の規則によって、実際に行動の自由が制限されていると感じている。その一方で自治会を組織し、一方的に施設側から規定された生活ではなく、施設側に対して入居者側の要求を通させようとしている。

「ここは一般浴が週2回しかないんです。ここに来てから間もなくのときでしたが、裏の老人センターでひとつ風呂浴びようと思って出たら、職員が飛び出でてきて腕つかまれて引き戻されてね。なにしゃがんだって言いましたよ。自由に外にも出られません。家に帰るのにも許可がいるんです。」

「言うべきことは言いますよ、施設長に対しても。AKさん、勘弁してよっていうくらい。」

## ・役割

施設の入居者による自治会を自ら施設に働きかけて組織し、その自治会長となるなど、施設内の主導的な役割を目指している。

「老人ホームは20世紀で終わる事業ではないですからね。人間の生ある限り続く事業ですから。はじめに入った者としては、後から入ってくる人が入りやすいようにしていく義務があると思っています。」

## ・共同生活であること

## ・交流

施設の中では親しく話をする人は、頭の本当しにしっかりしたごく特定の人だけに限られている。他には同じレベルで話のできる人がいないと感じている。それよりも入所以前からの友人との付き合いが継続しており、彼らが来るのを楽しみにしている。あるいは、施設職員とより同等に話をしている。

「野球は毎日見ますよ。日本シリーズは事務所行って見るんですよ。大の巨人ファンがいますから。いろいろ言い合いながら見るんですよ。」

## 5) 行動環境の時間的変化

	94.11	95.03	95.08	96.02	96.06	96.10
制度的環境	入居	暮らし モモの花を咲かせる		自治会結成 会長へ	部屋替え	
private				レイアウト変更 ベッド・テーブル・接客が→構築	PersonalActivity CloseRelation	
物理的環境	s-pri	各所で喫煙		喫煙が→構築	喫煙スペース分設	
s-pub			Program			
public	各所で喫煙 CloseRelation		CloseRelation	デイの人を部屋に招く	Oは結核じゃないか?	
社会的環境	デイの人が楽しみ		散歩中にYTと話 すように	デイの人を部屋に招く		
身体状況	Katz Berger		D 2	C 2	A 1	C 1

## 95年3月

	主体性	関係性
居室空間	自家外で過ごすことが多い	自家には他人はあまり呼ばない
施設空間	semi-private~publicの各所を転々としながら喫煙	家族・デイ某人等 semi-publicで会う

この事例の行動環境の変化は、施設環境の制度的環境・社会的環境・物理的環境の各側面に対して自分自身で働きかけることによって構築していったことによるものが多い。

## 96年2月

	主体性	関係性
居室空間	運動用のベッド テーブル作成	接客用のしつらえ で人を呼ぶ
施設空間	semi-privateに喫煙スペースを構築	入居者友人と publicで活動中に話す

制度的環境に対しては、自治会を結成し自治会長という役割を担うことにより、さらに施設の制度的環境を自ら手を加えていこうと言うものである。

社会的環境に対しては、(居室の物理的環境も整えることによって) 以前からの交流を継続させている。施設入居者の中では、自ら交流の相手を選択し、自分と同じレベルで話すことのできるその特定の相手とのみ、積極的に関わっている。

## 96年10月

	主体性	関係性
居室空間	レイアウトの変更	接客用のしつらえ で人を呼ぶ
施設空間	喫煙スペースが semi-privateに 再び分設	入居者友人と publicで活動中に話す

物理的環境に対しては、居室内のレイアウトを替え接客に対応したり、自分の活動の場を創り出している。また共用空間に対しても自分占有的スペースを(施設の制度的環境にも働きかけることによって)構築している。(ただし、その後の部屋替えという環境移行によって、その安定した場は失われてしまうが。)

## (事例2) No.46 FI

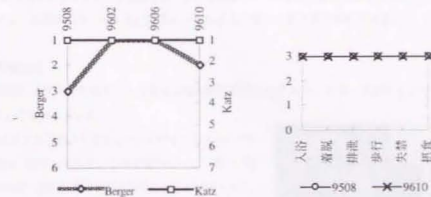
属性： 75歳・女性  
 入居： 94年11月・自宅（一人暮らし）より入居  
 自宅： 退去

## 1) 背景

宇奈月町の町営住宅より入居。宇奈月に来てからは10何年。入居直前まで数億の手伝いをして働いていた。身よりは特にいないが、町営住宅の同じ階段の人には一人の人もずいぶんいて、みな旅館に勤めていたので親しかった。引っ越しの時の荷造りはみな近所の人がしてくれた。洗濯機やタンスなど、欲しいという人にみなあげてしまった。「回りの人にも、特養っていうのはあまり荷物持ってもんではないといわれたし、あーたらこーたらいわれて面倒くさいので、皆捨ててきたり人にあげたり。」施設にはまだ身体の動くうちに、入所できるものならば入所したいと自分で希望し、できれば寒くならないうちに11月に入居した。施設にすでに入居しているICさんも宇奈月出身で、そのときから親子のように親しくつきあっていた。

## 2) 身体状況

痴呆はほとんどない。95年8月にはBerger3と評価されているが、その後はBerger1と評価が上昇し、96年10月には再びBerger2と下がっている。これは、当人の痴呆度合いの変化というよりは、おそらく施設職員の違いによる評価の違いの現れであり、日常生活の上での積極性などを考慮に入れた場合に、評価がやや落ちたものと思われる。身体的には今のところすべて自立しておりA評価である。



## 3) 施設における行動環境

## ・入居当初

(11月1・2日)

11月1日の引越しの作業は、職員と民生委員、ボランティア等によってどんだん進められ、家具配置などについても、まかせたままになっている。布団・掃除機・食器・鍋類などいろいろ持ってきたものの、ほとんどは捨てられたりまた持って帰られてしまう。夕方、宇奈月に行ったときから親しくしていたICさんに連れられて、それまでの仲良し4人組に加わって、すぐに5人組が結成され、夕食の時には皆で手をつないでいく。

翌日、昼食時に寝た悪いNHさんを抱えるようにして運んで来てあげたり、お茶くみを手伝ったり、またうろうろしていた車椅子のYMさんを（ゆめだと知らずに）後ろから押してあげたりと、自分から世話をしなければいけないという義務感に後押しされるように役割を探していた。



## 施設空間での過ごし方

semi-publicでの朝の体操や、洗濯物量みのお手伝いなどのプログラムには参加しているが、それ以外に、これといった趣味や活動は特にない。

「とくになんと言うこともない。年寄りのすることとして過ごしてる。片づけものしてりゃそれで一日過ぎて行くし。」

「部屋ではTVを見ていたり、とくに趣味はない。頭のいい人は俳句でもやるが、外で畑作って何か作っている人もあるが、私は旅館で働いていたから、そういうことは何もしない。」

「洗濯は遠に入れとけばやってくれるけど、少ししかないから、自分でした方が早いし良い。おむつや洗濯物量みが午前中10:30頃からやっている。昔さんでやるから、あつと言う間に終わります。」

## 居室空間

部屋には自宅から持ち込んできた仏壇や鏡台が持ち込まれているが、本当はもっといろいろな持ち込みたかったという気がしている。

「持ち物は半分以上捨ててきた。いらんがなったから。でも来てみたら（物を）入れるところが全然ないし。新しい箆笥を買ったが、桐の箆笥で2段に分けられるのがあったし、持ってくれば良かった。回りの人にも、特売っていうのはあまり荷物持ってもんではないといわれたし、あーたらこーたらいわれて面倒くさいので、替替てきたり人にあげたり。」





部屋では自宅で前から倒っていて、持ち込んできた金魚を倒っている。

「金魚は2カ月くらい生きている。ちょっと入れ物小さいが。何か倒うてないと、気遣いになっちゃう。」

#### 交流

はじめ部屋の隣同士だった人と喧嘩をして仲が悪くなり、部屋も替えてもらった。また、宇奈月にいたときに親しくしていたICさんとも、ほとんど付き合いがなくなった。

「岩田さんとは近くに住んでいたが、ずーっと昔。あの人は子供も孫もいっぱいいる。私は一人。私にも誰か来てくれたらどれだけ嬉しかろうと思うが…」

あまり親しくしている人もおらず、以前から件のよかった施設の職員に話しかけたいが、忙しそうなので気兼ねしている。

「お友達になるのは難しい。一人でぼさーとしていたいものから、お茶のみが好きな人から。私は孤独やから、兄弟も親もないし、一人。他の人とあまりしゃべらないし。あまり親しくするのは好きでない。養母さんは忙しすぎて、もの頼むのも悪くなるほど。あまりべちゃべちゃ喋るのも。」



・入居後15ヶ月

#### 施設空間での過ごし方

施設プログラムの合間の自由時間を semi-private のテーブルで過ごす時間がかなり多くなった。に行き、新聞を見たりテレビを見たり、居合わせた人たちとちょっと会話をして過ごしている。広間のテーブルに対して背を向ける形で、TVの最前列に椅子が並ぶようになると、ここに座るメンバーはだいたい決まってきたっており、そこで隣の人と話をしながらTVを見ている。

朝の体操と洗濯物たみには、たいてい参加している。ときおり semi-publicあるいは semi-private で開かれる書道教室のようなプログラムにも参加する。



#### 居室空間

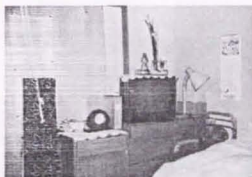
隣の居室が空いたので、施設の人に言って、部屋を替えてもらった。部屋が明るくなり、また前にその部屋にいた人がしていたように、ベッドの位置を壁に寄せるようにしたため、部屋が広く使えるようになった。

共用空間で過ごす時間が長くなったため、自室で過ごす時間は少なくなった。

「部屋にもおるよ。でも今日始めて部屋に座るんよ。部屋にいるときは何もしとらん。」

入口の窓をタオルで目隠ししているほか、外に面している窓にもレースのカーテンを付けたほかティッシュの箱を下から積み上げている。雪見障子も下げたまま。

「[窓のティッシュは] 置くところないからね。目隠しにもなるが、外を誰か通ることがあるんよ。ちょうど目の高さになる。雪見障子は下手したらすぐ外れてしまう。人に頼むのも嫌だし、自分で始末できん。」

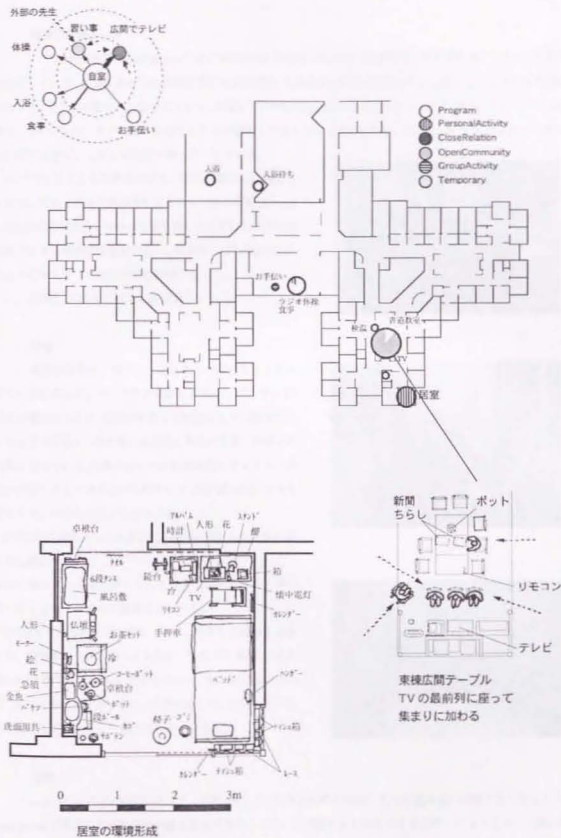


#### 交流

semi-private の、とくにTVの最前列に座るメンバーは固定化してきたため、TVを一緒に見ながら軽いコミュニケーションをとっている。ただしその場での会話以上に付き合いが深くなるようなことはない。

「他の部屋に行ったり来たりせんもん。お互いのプライベートあるから。自分一人で楽しよう思います。寂しいことは少しもない。本来一人やもん。とくに仲良しはおらん。僕らん方が一番利口だ。」

96年2月



## ・引越後

96年4月の部屋替えによって、居室が東棟から西棟へと移動した。

## 施設での過ごし方

相変わらずsemi-privateで過ごす時間は比較的長いものの、居室で過ごす時間も長くなり、相対的には減少している。自室に近い方の共用広間にもTVは置いてあるが、そこには行かずに西棟のもう片方の共用広間に行き、そこでの集まりに参加している。以前にTVの最前列に席を占めていたメンバーがたいていこちら側に集まっているため、そこに加わる形でときおり話をしたりしながらTVを見る。ただし、ずっとTVの前に居続けるわけではなく、しばしば居室へ戻ったりしている。

「一人でTV見てたら不経済やから、向こう側の人の集まるところと行く。こっち側は誰も見とらん（から行かない。）」  
 入居以前から付き合いがあって最も親しくしているのが在宅介護センターの訪問看護婦であり、日中はしばしばpublicにあるそのセンターで過ごすことが多くなった。

「ここ（部屋）にばかり居ても退屈でしょう。」



## 居室

部屋が変わり、再びベッドを真ん中にするようなレイアウトになった。ベッドの手前側に卓袱台・ポット・TVなどが置かれており、普段の生活では部屋の入り口側を向いて座ることが多い。扉の窓には目隠しが付けられ、外からの視線を遮っている。外側の窓には以前と同様にティッシュの箱が目隠しとして積み上げられている。外に買い物に行くときとかは、外から紐で戸を縛っておく。

「(外の紐は) 誰も入ってくるわけではないが、入ってきた言う話し聞いてから。」

前から飼っている金魚がちゃんと生きて泳いでおり、モーターなど付けてこまめに世話をしている。

「これでもなかなか忙しいですっちゃ。生きもん飼ってるからね。今までいろいろ飼ってみたが、金魚が一番楽。(金魚飼っているのは) 私くらいじゃないの。他の人にはいろいろ(家族とか友達とか) 来て、にぎやかしい。私は一人やから金魚でも見とらんと、気が狂いそうになる。」



## 交流

semi-privateのTVの前にはソファが置かれ、TVを見るための場所としての意味合いが強くなったことと、semi-privateに滞在する時間がやや短くなってきたことで、この場でとられるコミュニケーションはさらに薄いも

のようになってきた。洗濯物たみみがsemi-privateの裏のところで行われるようになったので、お手伝いをしながら会話する。他の入居者の部屋に遊びに行くようなことはやはりない。

「他の人とお喋りしたりとか」 せんせん。他の部屋見たことないもん。」





## 4) 評価

## ・施設であること

**規制** 入居してまったくこれまでとは違う環境に入ったことで、施設からさまざまな規制があることを感じている。とくに本人はまだ身体的にはまったく自立しているので、自由に外に出ていけないことに対してはギャップを感じているようである。

「買い物も行かれなんちゃ。行こうと思えばどこでもいけるが。なかなか自由にならんもんで。規則ちゅうのがあるがや。連れてってやる言わんとどこも行けませんっや。」

また、自分でいろいろと気遣いをして自制してしまうことがある。

「親母さんは忙しすぎて、もの頼むのも悪くなるほど。あまりべちゃべちゃ喋るのも。」「育児陣子は下手したらすぐ外れる。人に頼むのも嫌だし、自分で始末できん。」「冷房嫌いで、でもいちいち言うのもいややし、まあようさん着ればいいが、思ってる。」

**役割**

入居当初は自分から施設の中での役割を見つけだそうとしていたが、その後さまざまなギャップを感じたりトラブルがあったりしている中で、積極的に役割を果たそうと言うことはなくなった。選別などの自分のことは自分でしているが、お手伝いは皆のする洗濯物たみに参加している程度である。

「洗濯物畳みはする。体の動く人はやらないといかんし。」

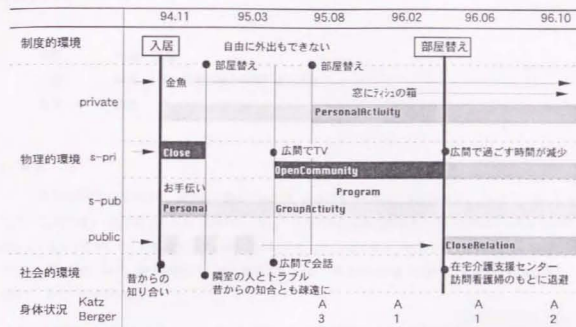
## ・共同生活であること

**交流**

入居者の中に、入居以前に親しくつき合っていた人がおり、はじめこそ一緒に行動していたが、しばらくして付き合いがなくなった。また、隣室の人とのトラブルもあり、あまり人と親しくすることは少なくなってしまった。semi-privateでTVを見ながら、あるいはお手伝いをしながら、居合わせた人と話をするが、お互いの部屋に行くようなことはない。入居以前に町営住宅でそうであったように、もっと若い人と話したいという意識がある。最も親しいのは（おそらく）在宅介護支援センターの訪問看護婦であり、職員の実現を借りるとセンターに「送って込んでしまう」ことが多くなった。



## 5) 行動環境の時間的変化



この事例の行動環境は、施設環境の制度的環境・社会的環境によってさまざまな側面で規制を受けながら、周辺のに参加することで何とかバランスをとっている、その過程である。

施設という制度的環境は、入居以前の一人暮らしの生活との間に大きなギャップを与えている。実際に行動の自由を規制されたり、みずから自制してしまうことによって、これまでの生活とはまったく違う生活を強いられていることを、施設なので仕方がないというあきらめている。(完全にあきらめていない部分があは不満として表明されているのだが)

社会的環境もまた、大きなギャップを与えている。実際のトラブルなどもあって施設職員以外との関わりが急速になり、入居者とは深い付き合いはしなくなった。人の集まる場所へ行って周辺の集まりに加わることで、深くはないが、その場での交流が持続されるようになった。時には在宅介護支援センターに行き、最も親しい職員と過ごすことによって、バランスを維持しようとしている。

個室という物理的環境は、上記の制度的環境や社会的環境から物理的に距離を置くことを可能にしておき、またそこで金魚を飼うことで関係の完結した空間を作りだしている。ただしこの空間に閉じこもって過ごしているわけではなく、なるべく制度的環境・社会的環境に身をさらしながらも、この個室あるいはpublicの在宅介護支援センターに避難することで、バランスを維持している。

## 95年3月

	主体性	関係性
居室空間	片づけのやら年寄りすること	自家には他人は来ない
施設空間	お手伝いには参加する程度	施設職員との会話が多い

## 96年2月

	主体性	関係性
居室空間	部屋替え レイアウト変更	他人は来ない 窓に目隠し
施設空間	semi-privateで多くの時間を過ごす	semi-privateでTV見ながら会話

## 96年10月

	主体性	関係性
居室空間	レイアウト変更 居室で過ごす時間が長くなる	他人は来ない 窓に目隠し
施設空間	semi-privateで過ごす時間が減少	semi-privateでTV見ながら会話 publicに逃げ込む

## (事例3) No.49 TM

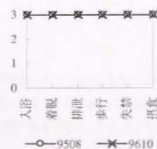
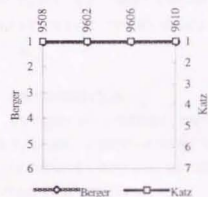
属性： 71歳・女性  
 入居： 94年11月・自宅（妹と同居）より入居  
 自宅： 退去

## 1) 背景

家は宇奈月の山手のほう。新大阪で勤めていたが、山が好きで6年前に宇奈月へ来て、妹と二人暮らしをしていた。水で滑って頭を打って以来、視力がなくなってきたために施設入居を考えた。「仕事は好きなんです、出来なくなってきました。いま69ですが、体の方は80～90です。」足も悪く、杖をついて歩いている。施設にはテニス2棟、鏡台、椅子、棚その他いろいろと持参してきた。これまで引越しが多く、家具はその都度処分したので、新しい物が多い。

## 2) 身体状況

痴呆はまったくない。職員の評価でも、入居時からその後にいたるまですべてBergrl（もしくは0）の評価である。身体的な自立度も高く、すべて人評価となっている。膝が悪いので歩くときには杖をついていたが、次第に杖なしで歩けるようになった。



## 3) 施設における行動環境

## ・入居後4ヶ月まで

(94年11月)

11月1日引越当日、妹と一緒にトラックで家具とともに到着する。はじめは持ってきたすべての家具は入らないと思ひ、持って帰られそうになる。

妹「係の人は何でも持ってきていいと言っていたが、何でも付いているからいらぬ。また持って帰るか。枕は変わった寝れんと言うから、ほな、枕と… 鏡台いらんやろ、鏡ついとるし」本人「いらん」職員「でも鏡台欲しいやろ？」本人「うん。タンスここに置いて、鏡台ここに置くか」妹「タンス2本入れたら、鏡台いらんやろ」本人「入ったらその方がいい」

無事にすべての家具を入れることができてほっとする。

昼食時、重度痴呆の人と同じテーブルで食事となり、手探みで食事するのを見て、かなり表情が硬くおぼれる。翌日の演芸大会の後、乱れてしまった机を職員が直しているのを見て、手伝おうと思うが勝手によく分からない。昼食時に自分から進んで出ていって、寮母に何かすることないか尋ね、お茶くみを手伝う。おやつ時、皆と一緒に共用スペースに出てくるが、お喋りしながらおやつを食べている集まりには背を向け、TVに近い場所に座って一人TVを見ている。



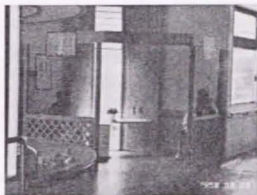
## 施設空間での過ごし方

自分の部屋にいることは少なく、食堂での滞在時間が長くなっている。朝から食事前のお茶配りに後片づけ、他の居室の掃除、洗濯機でみなの洗濯したあと洗濯物たたみ、そしてふたたび昼食の準備などと、休む暇もなく施設のお手伝いをし続けている。自分の部屋に居る時間もあまりなく、一息つくときにも食堂のカウンターで一人でお茶を飲んでいたりする。

「自分の部屋にいることは少ないです。あまり自由になる時間もありません。ほっとしてられない性格なのでつい動いてしまいますな。本当は部屋の家具とか増やしたいんですけど、部屋の掃除したりとか。」

ほとんどが立ち仕事なので、一日終わるとかなり疲れてしまう。

「これまでに倒れたこともあります。でもまたやらせていただいています。できるうちは何でもやります。」



## 居室

ダンス2棒・鏡台・椅子・棚など、入居以前から使っていた家具をいくつも持ち込み、生活スタイルの連続性が維持された環境を形成している。

「鏡台はお嫁入りの時のもの。あと下駄箱もあったんですが、大きいのでやめました。(椅子は)これじゃないと駄目なんです。

ダンスの上に飾られた人形も昔から使っていたもの。棚の中には位牌と写真が供えられている。

「ずいぶん前に、子ども一人死なせてな。」

日中ほとんどsemi-publicで働いているので、部屋にいる時間はほとんどなく、部屋に帰ったときもすぐに寝てしまう。



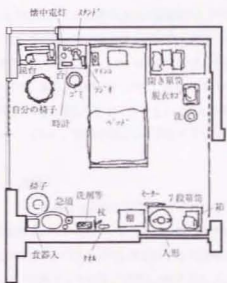
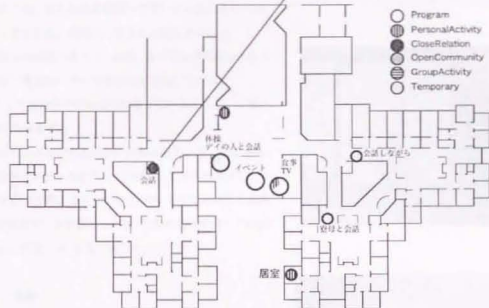
## 交流

入居者の顔はだいたい覚えたが、名前はまだ全員は覚えていない。大阪に長いこといたので、宇奈月の人の付き合い方にうまく溶け込めず、ギャップを感じている。semi-privateの集まりにも加わっていない。

「一つの機頭を分け合って食べるような人も一人くらいはおります。部屋に行っても話したりもしますが、でも深入りはしないようにしています。あまり関わりたくない。怖いです。大阪とは全然考え方が違いますよ、冗談をいつまでも根に持っている人もいます。難しいですねえ。」

95年3月

電話コーナー  
洗濯機が終わるのを待っている。



0 1 2 3m

居室の環境形成

## ・入居後15ヶ月

## 施設空間での過ごし方

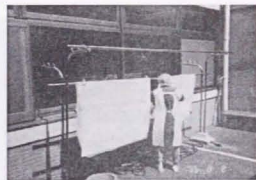
相変わらず自分の部屋にいることは少なく、semi-publicの食堂で仕事をして過ごしている時間が長い。施設の生活にはやや慣れてきた様子で、以前ほど疲れた様子は見せていない。

「ここへ来て、大分元気になりました。慣れたせいか、元気になったせいでしょうか。足も杖なしで歩けるようになりました。毎日毎日お手伝いでずいぶん疲れましたが、慣れてきました。部屋にはほとんど帰りません。」

洗濯物を洗濯機で洗っている間、お手伝い仲間のNSさんと一緒に電話コーナーで待ちながら話している。

「こうして洗濯機が終わるのを待っているとき、一番のんびり出来ます。」

お絞りたたみなどのお手伝い仲間は数人いて、semi-publicの食堂カウンターのところでお喋りしながら仕事をしている。仕事の合間には一人で食堂のTVを見ていることもある。仕事が終わった後、食堂の電気を消してsemi-publicに行き、TVを見て過ごす。



## 居室

居室にいる時間はやはり短い。次第に花などが持ち込まれてディスプレイされるようになり、馴染みの家具にも囲まれたこの空間は、自分の部屋のように落ちつく。

日中の仕事で疲れているので、夜は早く寝てしまう。

「目が覚めたら眠たいんです。7時ごろには、ラジオ付けたまま寝てしまう。食事が早いので、寝るころにはもうおなか空きます。寝しなにおにぎりとかパンとか食べて寝るとちょうどいい。朝は3時には目が覚めます。」



## 交流

いつも決まった人たちでお絞りたたみなどのお手伝いを食堂でしているため、お喋りしながら仕事するようになり一つのグループとなった。毎日決まった時間に決まったメンバーが集まっている。中でもNSさんとは二人で朝からずっと仕事をする仲間であり、話をする機会も多い。洗濯機を待っている間に、その隣の電話コーナーで二人でよ



く話す。semi-privateの集まりにもときおり加わって話をすることもある。







## ・部屋替え後

## 施設空間 の過ごし方

semi-publicで皆で集まってのお手伝い加わること  
 少なくなり、仕事としては各居室をまわって掃除するよ  
 うな一人での仕事をしている。仕事はおよそ午前中で終  
 わるため、午後はsemi-privateの集まりに加わってTVを  
 見たり、居合わせた人と会話したりして過ごすことが多  
 くなった。semi-publicで過ごすのは、programを除くと、  
 お手伝いをするためではなく一人で食堂のTVを見ると  
 きくらいである。

部屋替えに伴い、自立度の低い人のみ昼食をsemi-privateでとるようになり、その準備や片づけなどをするためあ  
 っけか、昼食だけは他の自立度の高い人たちと別れてsemi-privateで食べている。



## 居室

部屋替えによる移動は少なく、隣の部屋に移っただけである。ただし居室内のレイアウトはかなり変化し、  
 ベッドが部屋の真ん中におかれ、ベッドを取り囲むようにタンスや棚・鏡台などの家具が置かれている。鏡台は  
 窓際から部屋の一番奥に移動し、入居以前から使っていた椅子は流しの下にあって、その上にいろいろと物が置  
 かれ、使われているとは思えない状態である。(その後さらにレイアウトが変更され、入口の近くの広いスペースに鏡台と椅子が配置されるようになった。)

入口の窓には目隠しがされるようになった。部屋替えによ  
 って室内のプライバシーを守ろうという意識が高まったよ  
 うである。

「(扉の目隠しは)紙が足りなかったので上が聞いています。  
 背の高い人なら上が見えますな。夜は扉を閉めて(聞かない  
 ように)袋をかませておきます。痴呆の人が入ってこないよ  
 うに。」



## 交流

部屋替えの際に、これまでいつも一緒に仕事をして  
 いたNSさんの近くにないように希望した。部屋の位置  
 もかなり離れ、食堂のお仕事グループにも加わらないよう  
 になり、NSさんとは顔を合わせる機会が少なくなった。ただ  
 し、semi-privateで行われるようになった洗濯物たたみなど  
 には参加している。semi-privateの応問テーブルで過ごす時間  
 が増え、ここでの集まりにも加わるようになった。





## 4) 評価

## ・施設であること

**規制** 入居当初は、これまでの生活と比べて施設での生活に大きなギャップを感じており、まったく異なる環境の中でかなり戸惑っていた。

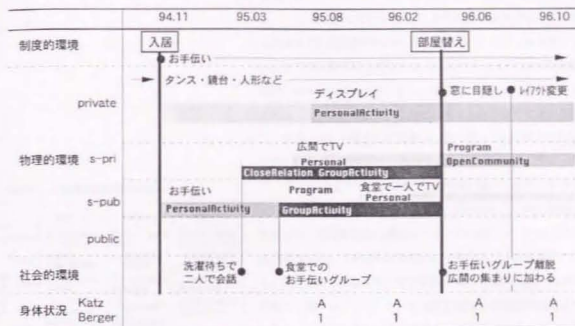
「最初は何か全然分からなかった。入ってきたときは、これが終着駅かいなー、さびしいよな、これで自分も最後かいなー、と思いました。今ではもう慣れてそんなこと思いませんけど。まわりはいい人たちばかりです。」

**役割** 入居したての時から自分の役割を何とか獲得しようと、朝から夕方までほとんど休む暇もなく働いている。職員が見かねてもう少し控えるように言くと、自分の役割がとられてしまうかのように感じる。自分の存在意義を仕事という役割の中に見つけだそうとするかのようなのである。部屋替え後は仕事の質が変わり、また役割に対する意識も変化したのか、休みをもらって過ごすようにもなった。「食事のたぎにお茶くみ、3度3度の食事の後の洗濯で、休む暇もありません。疲れてます。これまでに倒れたこともあります。でもまたやらせていただいています。できるうちは何でもやります。」  
「今日は木曜日でお休みいただきましたから、のんびりしてます。」

## ・共同生活であること

**交流** 地元出身の入居者たちとは考え方が大きく違うということを実感し、あまり深入りした付き合いはしないようにしている。お互いに部屋を行き来するような付き合いはほとんどない。毎日決まった時間に決まったメンバーでお手伝いをしているので、そのようなお手伝いを介してコミュニケーションをとっている。とくにいつも一緒に仕事をしている人とは話す機会が多い。その後、性格の強いこの人との付き合いに疲れたためか、お手伝いのグループをかえて避けるようになり、semi-privateの集まりに加わるようになる。

## 5) 行動環境の時間的変化



この事例の行動環境の特長は、施設環境のとくに制度的環境の中に自分を位置づけ、自分の仕事という役割を遂行することに重点が置かれていることである。

入居早々、心身ともにまだ健康である自分が施設に入居してしまったことで、施設という制度的環境に対して大きなギャップを受けている。この制度的環境に自分を位置づけるために「施設中での自分の役割」を確立することを意図して、自ら働きかけ、お手伝いという形で身を指にして働いている。この役割を失うことは施設における自分の存在意義に関わることで感じている。

したがって社会的環境も制度的環境の影響を大きく受け、この役割を遂行するのに付随した形での交流、つまり一緒にお手伝いして働いている人同士のコミュニケーションに限定されている。ただ、その後の社会的関係の不和が制度的環境に対する働きかけに影響を及ぼし、役割自体を縮小させようという傾向を示している。

物理的環境に対して、入居時にこれらで使用していた家具を持ち込んで自らの環境を形成したが、入居してからは部屋で過ごす時間も少なく、その後はディスプレイなどによって、細かいレベルでの環境形成がなされている。それよりも役割を遂行するための場の方が、まさにその役割があることのために、本人にとって重要な意味を持つ場となっている。

## 95年3月

	主体性	関係性
居室空間	持込家具多数 自室にはほとんど 残らない	行き来するような 付き合いはしない
施設空間	朝から夕方まで semi-publicにいて お手伝いし続ける	洗濯待ちの間に 会話することも

## 96年2月

	主体性	関係性
居室空間	ディスプレイさ れるようになる	行き来するような 付き合いはしない
施設空間	手伝いの合間に 自分の時間を持つ ようになる	お手伝いグルー プでお喋り

## 96年10月

	主体性	関係性
居室空間	レイアウト変更 居室で過ごす時 間が長くなる	他人は来ない 窓に目隠し
施設空間	semi-publicでの 手伝いは減少し semi-privateに課生	semi-privateでTV 見ながら会話

## まとめ

ここで見てきた3事例は、原則的には各人に対して一律であるはずの施設環境に対しての捉え方や、そこに作り出していく自分の位置づけも異なれば、privateからpublicに広がる施設空間に対する意味付けや、そこに展開される社会的関係も大きく異なっている。つまり、それぞれ異なるやり方で環境を認知し、環境に対して働きかけを行い、全く違った形でそれぞれ独自の行動環境を形成しているのである。

ここでもう一度3事例の行動環境の違いを簡単にまとめてみると、次のようになる。事例1は自分からあらゆる環境に働きかけ、環境を統制し構築していくのに対して、事例2は社会的環境に対して周道的な位置づけで参加もしくは離脱していく、また事例3は施設中での役割を軸にして物理的・社会的環境とも関わっていく、という過程を経て行動環境が形成されてきた。それぞれのもっとも特長を一言で表すとすると、事例1「自己統制型」・事例2「周辺参加型」・事例3「役割連行型」の環境形成過程であると言える。

形成された行動環境には、形成されるまでの過程が色濃く反映されている。というよりも、その過程自体が人と環境との相互交渉の反映であり、また現状の行動環境も完成された物ではなく絶えず作り出されていく過程にある。部屋替換のような環境自体を変化させる出来事により、作り出されかけていた関係がまた大きく変わってしまうこともある。実際、事例から見られたように、そのインパクトはかなり大きく、行動環境を変化させてしまうものであった。また個別の変化としても、人間関係が少しずつ変わっていくこともあれば、なにより入居者自体の心身状況が次第に変化していき、長い目で見れば自立度は確実に低下していく。

このような時間軸上の変化・動きの中で個人の環境形成の過程を追っていくことで、環境適応プロセスとは、決して不安定から安定に向かう一つの大きな流れのようなものではなく、無数の小さな出来事—それ自体も人と環境との相互交渉によって成り立つものである—ひとつひとつ積み重ねられたものであることが分かる。そして、その小さな状況一つひとつに入居者が主体的に関わっていること自体を、重要で価値あることとして捉え直していくべきだろう。

表6-1) 3事例の行動環境の違い

	事例1-A型	事例2-B型	事例3-T型
制度的環境	自己統制を構築し、対応する活動の場、交流の場を構築	支配なし、管理を必要とする	施設の中で最大限自分の役割を演ずる
物理的環境	個室の確保スペースを確保	オープンな集まりに慣れる場	【オープンな集りに移行する?】
社会的環境	一人での生活 Programの場	新しい人の居る特設の場	お互いの仕事の場 Programの場
社会的環境	自ら選択した人のみとの深い交流	集団で参加する人との浅い交流	互手合い物理と社会に付随した交流
型	自己統制型	周辺参加型	役割連行型

## 事例1

上野	東武池袋線	上野	東武池袋線
1階	自由通路「ア」	1階	自由通路「ア」
2階	自由通路「ア」	2階	自由通路「ア」
3階	自由通路「ア」	3階	自由通路「ア」
4階	自由通路「ア」	4階	自由通路「ア」
5階	自由通路「ア」	5階	自由通路「ア」
6階	自由通路「ア」	6階	自由通路「ア」
7階	自由通路「ア」	7階	自由通路「ア」
8階	自由通路「ア」	8階	自由通路「ア」
9階	自由通路「ア」	9階	自由通路「ア」
10階	自由通路「ア」	10階	自由通路「ア」
11階	自由通路「ア」	11階	自由通路「ア」
12階	自由通路「ア」	12階	自由通路「ア」
13階	自由通路「ア」	13階	自由通路「ア」
14階	自由通路「ア」	14階	自由通路「ア」
15階	自由通路「ア」	15階	自由通路「ア」
16階	自由通路「ア」	16階	自由通路「ア」
17階	自由通路「ア」	17階	自由通路「ア」
18階	自由通路「ア」	18階	自由通路「ア」
19階	自由通路「ア」	19階	自由通路「ア」
20階	自由通路「ア」	20階	自由通路「ア」
21階	自由通路「ア」	21階	自由通路「ア」
22階	自由通路「ア」	22階	自由通路「ア」
23階	自由通路「ア」	23階	自由通路「ア」
24階	自由通路「ア」	24階	自由通路「ア」
25階	自由通路「ア」	25階	自由通路「ア」
26階	自由通路「ア」	26階	自由通路「ア」
27階	自由通路「ア」	27階	自由通路「ア」
28階	自由通路「ア」	28階	自由通路「ア」
29階	自由通路「ア」	29階	自由通路「ア」
30階	自由通路「ア」	30階	自由通路「ア」
31階	自由通路「ア」	31階	自由通路「ア」
32階	自由通路「ア」	32階	自由通路「ア」
33階	自由通路「ア」	33階	自由通路「ア」
34階	自由通路「ア」	34階	自由通路「ア」
35階	自由通路「ア」	35階	自由通路「ア」
36階	自由通路「ア」	36階	自由通路「ア」
37階	自由通路「ア」	37階	自由通路「ア」
38階	自由通路「ア」	38階	自由通路「ア」
39階	自由通路「ア」	39階	自由通路「ア」
40階	自由通路「ア」	40階	自由通路「ア」
41階	自由通路「ア」	41階	自由通路「ア」
42階	自由通路「ア」	42階	自由通路「ア」
43階	自由通路「ア」	43階	自由通路「ア」
44階	自由通路「ア」	44階	自由通路「ア」
45階	自由通路「ア」	45階	自由通路「ア」
46階	自由通路「ア」	46階	自由通路「ア」
47階	自由通路「ア」	47階	自由通路「ア」
48階	自由通路「ア」	48階	自由通路「ア」
49階	自由通路「ア」	49階	自由通路「ア」
50階	自由通路「ア」	50階	自由通路「ア」
51階	自由通路「ア」	51階	自由通路「ア」
52階	自由通路「ア」	52階	自由通路「ア」
53階	自由通路「ア」	53階	自由通路「ア」
54階	自由通路「ア」	54階	自由通路「ア」
55階	自由通路「ア」	55階	自由通路「ア」
56階	自由通路「ア」	56階	自由通路「ア」
57階	自由通路「ア」	57階	自由通路「ア」
58階	自由通路「ア」	58階	自由通路「ア」
59階	自由通路「ア」	59階	自由通路「ア」
60階	自由通路「ア」	60階	自由通路「ア」
61階	自由通路「ア」	61階	自由通路「ア」
62階	自由通路「ア」	62階	自由通路「ア」
63階	自由通路「ア」	63階	自由通路「ア」
64階	自由通路「ア」	64階	自由通路「ア」
65階	自由通路「ア」	65階	自由通路「ア」
66階	自由通路「ア」	66階	自由通路「ア」
67階	自由通路「ア」	67階	自由通路「ア」
68階	自由通路「ア」	68階	自由通路「ア」
69階	自由通路「ア」	69階	自由通路「ア」
70階	自由通路「ア」	70階	自由通路「ア」
71階	自由通路「ア」	71階	自由通路「ア」
72階	自由通路「ア」	72階	自由通路「ア」
73階	自由通路「ア」	73階	自由通路「ア」
74階	自由通路「ア」	74階	自由通路「ア」
75階	自由通路「ア」	75階	自由通路「ア」
76階	自由通路「ア」	76階	自由通路「ア」
77階	自由通路「ア」	77階	自由通路「ア」
78階	自由通路「ア」	78階	自由通路「ア」
79階	自由通路「ア」	79階	自由通路「ア」
80階	自由通路「ア」	80階	自由通路「ア」
81階	自由通路「ア」	81階	自由通路「ア」
82階	自由通路「ア」	82階	自由通路「ア」
83階	自由通路「ア」	83階	自由通路「ア」
84階	自由通路「ア」	84階	自由通路「ア」
85階	自由通路「ア」	85階	自由通路「ア」
86階	自由通路「ア」	86階	自由通路「ア」
87階	自由通路「ア」	87階	自由通路「ア」
88階	自由通路「ア」	88階	自由通路「ア」
89階	自由通路「ア」	89階	自由通路「ア」
90階	自由通路「ア」	90階	自由通路「ア」
91階	自由通路「ア」	91階	自由通路「ア」
92階	自由通路「ア」	92階	自由通路「ア」
93階	自由通路「ア」	93階	自由通路「ア」
94階	自由通路「ア」	94階	自由通路「ア」
95階	自由通路「ア」	95階	自由通路「ア」
96階	自由通路「ア」	96階	自由通路「ア」
97階	自由通路「ア」	97階	自由通路「ア」
98階	自由通路「ア」	98階	自由通路「ア」
99階	自由通路「ア」	99階	自由通路「ア」
100階	自由通路「ア」	100階	自由通路「ア」

## 事例2

上野	東武池袋線	上野	東武池袋線
1階	自由通路「ア」	1階	自由通路「ア」
2階	自由通路「ア」	2階	自由通路「ア」
3階	自由通路「ア」	3階	自由通路「ア」
4階	自由通路「ア」	4階	自由通路「ア」
5階	自由通路「ア」	5階	自由通路「ア」
6階	自由通路「ア」	6階	自由通路「ア」
7階	自由通路「ア」	7階	自由通路「ア」
8階	自由通路「ア」	8階	自由通路「ア」
9階	自由通路「ア」	9階	自由通路「ア」
10階	自由通路「ア」	10階	自由通路「ア」
11階	自由通路「ア」	11階	自由通路「ア」
12階	自由通路「ア」	12階	自由通路「ア」
13階	自由通路「ア」	13階	自由通路「ア」
14階	自由通路「ア」	14階	自由通路「ア」
15階	自由通路「ア」	15階	自由通路「ア」
16階	自由通路「ア」	16階	自由通路「ア」
17階	自由通路「ア」	17階	自由通路「ア」
18階	自由通路「ア」	18階	自由通路「ア」
19階	自由通路「ア」	19階	自由通路「ア」
20階	自由通路「ア」	20階	自由通路「ア」
21階	自由通路「ア」	21階	自由通路「ア」
22階	自由通路「ア」	22階	自由通路「ア」
23階	自由通路「ア」	23階	自由通路「ア」
24階	自由通路「ア」	24階	自由通路「ア」
25階	自由通路「ア」	25階	自由通路「ア」
26階	自由通路「ア」	26階	自由通路「ア」
27階	自由通路「ア」	27階	自由通路「ア」
28階	自由通路「ア」	28階	自由通路「ア」
29階	自由通路「ア」	29階	自由通路「ア」
30階	自由通路「ア」	30階	自由通路「ア」
31階	自由通路「ア」	31階	自由通路「ア」
32階	自由通路「ア」	32階	自由通路「ア」
33階	自由通路「ア」	33階	自由通路「ア」
34階	自由通路「ア」	34階	自由通路「ア」
35階	自由通路「ア」	35階	自由通路「ア」
36階	自由通路「ア」	36階	自由通路「ア」
37階	自由通路「ア」	37階	自由通路「ア」
38階	自由通路「ア」	38階	自由通路「ア」
39階	自由通路「ア」	39階	自由通路「ア」
40階	自由通路「ア」	40階	自由通路「ア」
41階	自由通路「ア」	41階	自由通路「ア」
42階	自由通路「ア」	42階	自由通路「ア」
43階	自由通路「ア」	43階	自由通路「ア」
44階	自由通路「ア」	44階	自由通路「ア」
45階	自由通路「ア」	45階	自由通路「ア」
46階	自由通路「ア」	46階	自由通路「ア」
47階	自由通路「ア」	47階	自由通路「ア」
48階	自由通路「ア」	48階	自由通路「ア」
49階	自由通路「ア」	49階	自由通路「ア」
50階	自由通路「ア」	50階	自由通路「ア」
51階	自由通路「ア」	51階	自由通路「ア」
52階	自由通路「ア」	52階	自由通路「ア」
53階	自由通路「ア」	53階	自由通路「ア」
54階	自由通路「ア」	54階	自由通路「ア」
55階	自由通路「ア」	55階	自由通路「ア」
56階	自由通路「ア」	56階	自由通路「ア」
57階	自由通路「ア」	57階	自由通路「ア」
58階	自由通路「ア」	58階	自由通路「ア」
59階	自由通路「ア」	59階	自由通路「ア」
60階	自由通路「ア」	60階	自由通路「ア」
61階	自由通路「ア」	61階	自由通路「ア」
62階	自由通路「ア」	62階	自由通路「ア」
63階	自由通路「ア」	63階	自由通路「ア」
64階	自由通路「ア」	64階	自由通路「ア」
65階	自由通路「ア」	65階	自由通路「ア」
66階	自由通路「ア」	66階	自由通路「ア」
67階	自由通路「ア」	67階	自由通路「ア」
68階	自由通路「ア」	68階	自由通路「ア」
69階	自由通路「ア」	69階	自由通路「ア」
70階	自由通路「ア」	70階	自由通路「ア」
71階	自由通路「ア」	71階	自由通路「ア」
72階	自由通路「ア」	72階	自由通路「ア」
73階	自由通路「ア」	73階	自由通路「ア」
74階	自由通路「ア」	74階	自由通路「ア」
75階	自由通路「ア」	75階	自由通路「ア」
76階	自由通路「ア」	76階	自由通路「ア」
77階	自由通路「ア」	77階	自由通路「ア」
78階	自由通路「ア」	78階	自由通路「ア」
79階	自由通路「ア」	79階	自由通路「ア」
80階	自由通路「ア」	80階	自由通路「ア」
81階	自由通路「ア」	81階	自由通路「ア」
82階	自由通路「ア」	82階	自由通路「ア」
83階	自由通路「ア」	83階	自由通路「ア」
84階	自由通路「ア」	84階	自由通路「ア」
85階	自由通路「ア」	85階	自由通路「ア」
86階	自由通路「ア」	86階	自由通路「ア」
87階	自由通路「ア」	87階	自由通路「ア」
88階	自由通路「ア」	88階	自由通路「ア」
89階	自由通路「ア」	89階	自由通路「ア」
90階	自由通路「ア」	90階	自由通路「ア」
91階	自由通路「ア」	91階	自由通路「ア」
92階	自由通路「ア」	92階	自由通路「ア」
93階	自由通路「ア」	93階	自由通路「ア」
94階	自由通路「ア」	94階	自由通路「ア」
95階	自由通路「ア」	95階	自由通路「ア」
96階	自由通路「ア」	96階	自由通路「ア」
97階	自由通路「ア」	97階	自由通路「ア」
98階	自由通路「ア」	98階	自由通路「ア」
99階	自由通路「ア」	99階	自由通路「ア」
100階	自由通路「ア」	100階	自由通路「ア」

## 事例3

上野	東武池袋線	上野	東武池袋線
1階	自由通路「ア」	1階	自由通路「ア」
2階	自由通路「ア」	2階	自由通路「ア」
3階	自由通路「ア」	3階	自由通路「ア」
4階	自由通路「ア」	4階	自由通路「ア」
5階	自由通路「ア」	5階	自由通路「ア」
6階	自由通路「ア」	6階	自由通路「ア」
7階	自由通路「ア」	7階	自由通路「ア」
8階	自由通路「ア」	8階	自由通路「ア」
9階	自由通路「ア」	9階	自由通路「ア」
10階	自由通路「ア」	10階	自由通路「ア」
11階	自由通路「ア」	11階	自由通路「ア」
12階	自由通路「ア」	12階	自由通路「ア」
13階	自由通路「ア」	13階	自由通路「ア」
14階	自由通路「ア」	14階	自由通路「ア」
15階	自由通路「ア」	15階	自由通路「ア」
16階	自由通路「ア」	16階	自由通路「ア」
17階	自由通路「ア」	17階	自由通路「ア」
18階	自由通路「ア」	18階	自由通路「ア」
19階	自由通路「ア」	19階	自由通路「ア」
20階	自由通路「ア」	20階	自由通路「ア」
21階	自由通路「ア」	21階	自由通路「ア」
22階	自由通路「ア」	22階	自由通路「ア」
23階	自由通路「ア」	23階	自由通路「ア」
24階	自由通路「ア」	24階	自由通路「ア」
25階	自由通路「ア」	25階	自由通路「ア」
26階	自由通路「ア」	26階	自由通路「ア」
27階	自由通路「ア」	27階	自由通路「ア」
28階	自由通路「ア」	28階	自由通路「ア」
29階	自由通路「ア」	29階	自由通路「ア」
30階	自由通路「ア」	30階	自由通路「ア」
31階	自由通路「ア」	31階	自由通路「ア」
32階	自由通路「ア」	32階	自由通路「ア」
33階	自由通路「ア」	33階	自由通路「ア」

環境適応とは、生物が環境の変化に対応して形態や生理機能を変化させる能力を指す。これは、生存と繁殖に不可欠な能力であり、進化の重要なメカニズムの一つである。環境適応は、遺伝的変異と自然選択によって生じ、個体や集団の環境に適合した形質が選択されることで起こる。例えば、極寒の地域に生息する動物は、厚い毛皮や脂肪層を有し、寒さをしのぐ能力を有している。また、乾燥した地域に生息する植物は、葉の厚さを増やしたり、根を深く伸ばしたりして水分を保持する能力を有している。環境適応は、生物の生存と繁殖に不可欠な能力であり、進化の重要なメカニズムの一つである。

環境適応は、生物が環境の変化に対応して形態や生理機能を変化させる能力を指す。これは、生存と繁殖に不可欠な能力であり、進化の重要なメカニズムの一つである。環境適応は、遺伝的変異と自然選択によって生じ、個体や集団の環境に適合した形質が選択されることで起こる。例えば、極寒の地域に生息する動物は、厚い毛皮や脂肪層を有し、寒さをしのぐ能力を有している。また、乾燥した地域に生息する植物は、葉の厚さを増やしたり、根を深く伸ばしたりして水分を保持する能力を有している。環境適応は、生物の生存と繁殖に不可欠な能力であり、進化の重要なメカニズムの一つである。

## 第7章 まとめ

---

1. 適応過程を支える要素
2. 環境に対する期待モデル
3. 人間と環境との媒介

## 第7章 まとめ

## 1. 適応過程を支える要素

## 1) 施設への適応

これまで議論の中心としてきた施設環境への移行とそれにとまなう適応過程について、最後にもう一度まとめておく。

Wapner (1983) によると、環境の急激な変化による危機的移行とは、これまでに安定していた人間-環境システムの崩壊であり、それに対する適応過程とはつまり、人間-環境システムの再構築ということになる。単純に新しい状況に自分を合わせていくだけでなく、新旧両世界を含めた生活世界の全体布置を組み直すことが、移行主体にとって必要なプロセス(南、1995)である。

本論では、高齢者居住施設への入居という、「建物・施設の変化」「組織・集団の変化」「場所・地理の変化」がすべて同時に起こる危機的移行(高橋、1991)を対象にしている。それぞれの变化によって、自分の価値観、社会的関係、生活スタイルなどがすべて失われ、いわば自己のアイデンティティの基盤が失われることになる。その状況に対し、施設という新しい環境の中で新しい関係を作り出すことによって自己アイデンティティを再確立していく過程を適応過程として捉えてきた。その中でも、とくに物理的環境との関係を個人的領域の形成として捉え、注目してきた。第3章-第5章において、適応過程(あるいは個人的領域形成過程)を次のように扱っている。

- ・第3章：入居者が空間に働きかけることで、空間を意味付けアイデンティティを確立し、空間が自分自身の安定した身の置き所となる過程。
- ・第4章：入居者が空間を利用し、そこで人と関わったり自分にとって意味のある活動をすることで、場所の意味や価値を自分なりに構築していき、安定した生活環境を作り上げていく過程。
- ・第5章：物理的環境・社会的環境・制度的環境との相互交渉をおこないつつ、評価→働きかけ→環境形成→評価……の循環プロセスによって、行動環境を作り上げるとともに自己アイデンティティを確立していく過程。

つまり、空間への働きかけによって空間を自ら意味づけ、その空間を媒介として、施設の社会的環境や制度的環境と新しい関係を作り出す、あるいはこれまでの生活に伴う結び付きをその中に位置づけていくプロセスとして捉えてきた。

## 2) 家という意識

第3章では、施設への入居に対してその新しい環境を自分の「住処」として認識しているかどうか、その他に帰るべき「家」を持っているかどうか、入居後の居室の環境形成に大きく影響していることを述べた。また第5章でも、これまでに住んでいた家の現状、つまり処分してしまったのか、そのまま残してあるのか、ということが、その後の適応過程に影響を及ぼしていることを考察した。

ここに見られた影響は、自宅を残したままでは新環境に適応できない(あるいはその逆)、というような単純なものではなく、かなり微妙な感情を含んだものである。自宅を処分した人の場合、ここを終の棲家とするという覚悟と、そうせざるを得ないと言う切迫感がある。同時に、施設と自宅との生活にあまりのギャップを感じても、もはや帰る家はないという追い詰められた気持ちになったり、なくなってしまった自宅に対する思い入れが捨てきれない場合がある。自宅を残してきた人の場合でも、帰る場所があるという思いが、ここはあくまで仮の宿であり積極的に環境を整えていく必要はないと認識してしまうこともあれば、たとえ自宅には帰らなくてもそれが存在するということが心支えとなっていることもある。また、実際に家に帰ったときに、逆に自分の居場所がないなどの大きなギャップを感じてしまい、帰る場所が物にないことを痛感する場合もある。これもまた、心理的な決別と喪失という、複雑な感情を生み出すことになる。

新しい環境へ適応することは、その環境を自分の住処(Home)として経験することに他ならない(Toyama, 1988)。それは、これまでに住んでいた家に対する思いを完全に切り捨てて新しい環境に移行することではないだろう。それを何らかの形で意味づけ、新しい環境における自分の生活世界に位置づける(南, 1991) ことによって、新旧の両環境の折り合いを付けていくことが重要である。



## 3) 物の役割

第3章で見たように、自分の個室に持ち込まれる物は、入居者がその空間を自分のものとして意識する際に、非常に重要な役割を果たしている。Rubinstein (1989) は、物によって意味づけられた環境を、社会的秩序付け・個人的ライフコース・身体的快適性、のそれぞれが反映されたものとして捉えている。たとえば、自宅から持ち込まれた物は、現在自分をとりまく重要な人々との結び付きを確認させてくれ(社会的)、また、生活の連続性を維持したり(身体的)、過去との結び付きを思い起こさせてくれる(ライフコース)。そういった、自分を社会や空間、あるいは時間の流れの中に位置づけることによって、現在の新しい環境の中で過去との折り合いをつけていく手段となっている。

物のもう一つの重要な役割は、自分で物を持ち込み、並べ、それを使って何らかの活動をすることで、今現在自分がここで活動し、物理的・社会的環境に対して働きかけている主体としての自分を映し出していることである。

入居当初にほとんど家具や私物を持ち込んでいない人であっても、そしてその後持ち込まれた物が使い慣れた家具や思い出の品のような本当にその人にとって重要な物ではなかったとしても、自分がそこに物を持ち込み、飾り付けたり、それを使って何か活動をすることによって、その空間を意味付けていくという働きかけこそが、自分と環境との関係を変化させていく大きな要因となる。

物を通して環境に働きかけるという自分の主体性、物によって自分が社会的・時間的に位置づけられるという関係性、この両者によって居室の環境が入居者本人にとって重要な意味を持つようになる過程を見てきた。

## 4) 個室の意義

個室は、共用空間の社会的・制度的環境から身を防衛するシェルター、つまり引きこもりのための空間として捉えるだけでは、その全体としての意味を捉えたことにはならない。Ei-Sharkawy (1979) がテリトリーの機能としてあげた、アイデンティティ・判断・安全・参照系への対応という、すべての側面において重要な役割を果たしている。

第3章では、物を媒介とした個人的領域形成が行われるにあたり、個室という自らコントロールしうる空間の重要性を述べた。そこでは自らの働きかけとそのフィードバックというサイクルを通じて、環境が意味づけられるとともに、入居者本人のアイデンティティが確立されるプロセスが行われ、それによって自分の空間としての意識が高まっていく。

また、第4章でみたように、個室は施設空間の中で、個人的活動personal activityおよび親密な関係close relationが行われる場として、重要な役割を果たしている。自己実現に結びつくような真に個人的な活動は、誰からの干渉も受けず、自分でコントロールできる空間が必要である。個室は、施設の社会的・制度的環境から距離をとって自分だけに向き合える空間であり、それだからこそ同時に施設内の空間に行動を広げていくための拠点ともなる。

第5章では、個室が入居者による主体的なコントロールの確保を支えていることを述べた。そこでは自分の時間の使い方や行動について、入居者の自己決定に基づいて行われている。他者との関係についても、第三者を防衛しつつ自分の親しい人のみが選別されており、それ以外の他者の目を気にすることなく感情を解放できる空間となっている。

Heltzerger (1991) は次のように言う。「『安全な巣』が個人にも集団にも必要なのだ。これがなくては他人との協調もあり得ない。『自分自身の場所』と呼べるところがなければ、自分自身を見失ってしまうだろう。帰る家があってこそ、冒険もあり得る。最後の頼りとなる何か―『巣』のようなものが、誰にとっても必要なのだ。」

## 5) 場の展開

高齢者居住施設は、たとえ個室が確保されていてもその内部だけで生活が完結することはなく、個室の外側に広がる共用空間を利用することは、多かれ少なかれ他者の存在や施設における自分の役割を意識せざるを得ない。施設の人たちとの社会的関係は、施設で生活する以上重要な意味を持つことになり、共用空間は、施設の社会的環境の中に自分が位置づけられる場所となる。

その時に大きな役割をするのが、第4章で詳しく述べた場の概念である。入居者は、施設内のさまざまな空間で複数あるいは一人で活動したりコミュニケーションを行ったりしながら、空間を多様な場として体験し、意味付けする。そのように場を形成していくことにより、入居者は行動環境を広げていき、次第に安定した環境との関係が形作られていく。形成される場の性質は、そこで体験される社会的関係を強く反映する。

どこで、誰と、どのように関わるかということは、そこでどのような場を自ら形成し、あるいは選択するかということである。逆に言うと、入居者は場を介して施設の社会的環境と関わりとともに、場によって物理的空間を意味付けていく。そして、その意味付け方は人によって全く異なるものであった。そのようにして場が展開され空間が意味付けされていく過程を個人的領域形成として捉えてきた。

Edward Relph (1976) は、意味づけられたさまざまな場所こそがわれわれの世界体験を秩序づけるための要素だとしている。施設への入居前に人が生活を行い体験していた場所には、その人によってさまざまな意味が込められ、その場所と人との間には深い結びつきがあったはずである。その結び付きを断ち切れ施設へ入居してきた人たちにとって、新たな施設環境の中で場によって空間を意味付け、ふたたび結び付きを得ることができかどうか、環境への適応の重要な鍵である。

## 6) 共用空間

第4章で見たように、施設空間の中でもとくにsemi-privateには多様な場が展開しており、施設の社会生活において重要な意味を持つ空間であった。そこには親しい仲間内だけの集まりもあれば、自由に参加・離脱できる開放的集まりもある、一方でそのような集まりから一歩引いた場所に身をおいてみることもできる。一方、semi-publicは施設側のプログラムの行われる空間という意味が強いもの、semi-privateの集まりからさらに身を引いた活動が行われたり、目的を共有する人が集まって活動することもある。多様な場が展開されているということは、空間の多様な意味付けが可能であるとともに、入居者によって異なる場の展開が可能であることを意味する。つまり、多様な生活歴を持つ入居者の多様な生活を支えることができるということである。

個室におけるコミュニケーションと、共用空間におけるコミュニケーションとは、その性格が全く異なっている。個室はあくまで親しい人々との密度の高いコミュニケーションに限られている。それに対し、多様な場の展開している共用空間では、コミュニケーションのレベルにもさまざまな選択があり、自分なりの選択が可能となっている。そのようにして選択された場は、施設全体へ関係を広げていく際の、物理的・社会的アンカーポイント (Wapner, 1991) としても機能する。

施設環境への適応は、親しい人だけの閉じた関係に閉じこもるだけではなく、施設の全体像の中での自分の位置・役割などを把握することが重要である。そのためにも共用空間の役割はある意味では個室以上に大事なものと看做される。

## 7) 施設のプログラム

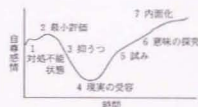
本論では、大筋において施設によって提供されるプログラムについて、あまり肯定的とは言えない文脈で述べてきた。第3章では居室内での一方的に与えられる物、第4章以降では共用空間で提供されるサービス、と視点は異なるものの、若に一方に一方的に提供されるものを共通して「プログラム」として見てきた。

これらのプログラムは、特別養護老人ホームを介護の場として、つまり心身状況が低下し自立して生活できなくなった高齢者を集めて世話する場として認識した場合には、必要不可欠なものであり、その効率性が問題とされる。しかし入居者の生活の場として捉えたときには、第5章で見たように、プログラムが施設側からの規制として働いたり、入居者に参加する／しないの二者択一を強制することがある。

施設が入居者の生活をサポートすることは、特別養護老人ホームという環境では本質的なことである。問題は、プログラムが施設から提供されるということにあるのではなく、誰に対しても画一的に提供されることにある。中にはプログラムを楽しみにして生活の中心にしている入居者もいる。ただしそれは一部の人であって全員ではない。

## 8) 時間軸上の動き

第5章・第6章でみたように、入居者が施設という新しい環境に移行し、そこでさまざまな関係を作り出し、次第に施設空間の中に定着していく様子は、まさに時間軸上で行われるプロセスである。入居者は、はじめの入居時に大きなギャップを感じながら、試行錯誤しつつ自ら働きかけて施設空間に自分の居場所を見つけだしていく。Minami (1987) は移行により生活世界が混乱し、それが再構成されるプロセスを6段階に分けて捉えている。

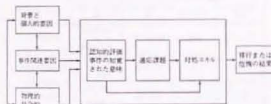


(図7-1) 移行プロセスにおける自尊感情の変化  
(Hopson & Adams, 1976)

1. 移行の予期
2. 新しい状況下での旧い生活世界構造の維持
3. 旧い生活世界の構造の破綻
4. 生活構造の再構造化
5. 新しい生活世界の構造の構築
6. 生活世界構造の強化・充実

旧い生活構造が破綻し移行した環境の現実に直面した後、入居者が生活構造の再構造化を实践していく手段は、日常の小さな状況一つひとつに入居者が主体的に関わっていき、小さなレベルで環境と相互交渉していくことであり、そしてそう入った状況一つひとつを日々の行動によって積み重ねていくことである。

ただし、個々の事例が必ずしもこのプロセス通りに踏んでいくわけではない、また途中段階でプロセスが止まってしまうこともある。とくに特別養護老人ホームへの移行においては、コンピテンスの低下した入居者が多く、その途中段階で身体レベルの悪化や痴呆の進行などによって、さらなる危機的移行に進展してしまうこともある。



(図7-2) 危機への対応の概念モデル  
(Moss & Schaefer, 1986)

## 9) アイデンティティの確立

本論では一貫して、新しい環境への適応過程にとって、アイデンティティを再確立していくことが重要なプロセスであるという立場をとってきた。第3章では、居客が入居者によって構築され、意味付けされることで、まさに入居者にとってアイデンティティの場となる過程をみてきた。第4章では、入居者が施設のさまざまな場所を利用し、意味づけ、他の入居者の集まりの中で自分が関係づけられていくアイデンティティをテーマとしてきた。そして第6章は実際の事例から、具体的に人がどんな状況を選択し、行動の中でアイデンティティを確立させようとしてきたか、その過程を記述したものである。

アイデンティティは人が単独で存在している場合には成立しない概念である。アイデンティティとは周囲の環境との関係の中で捉えられるものであり、人が環境を関係付け、環境に関係づけられる一連の過程こそが、アイデンティティの確立をもたらす。

Erikson (1986) は、人生のそれぞれの段階において社会的関係の中に見出される対立する課題（心理社会的危機）を弁証法的に解決し乗り越えていくことこそが、アイデンティティ感覚確立の過程であり、自我の統合性をより高めていく人生段階のステップとして位置づけている。自宅から施設への転居という環境移行は紛れもない一つの大きな危機であり、そこでは旧環境対新環境という心理的対立を乗り越えることが課題となる。これは二者択一の過程ではなく、両者を受け入れ統合していくこと、つまり自我それ自身が統合性を高めるという仕方であると感じていた物を親和的に感じるようになる（西平、1993）ことにより、アイデンティティが再確立されるのである。それはまさに、生活世界の再構築であり、環境への適応プロセスである。

(表 7-1) Erikson による人生の発達段階 (1982)

発達段階	心身、社会的危機	主要な環境・養育	基本の徳	基本の欠陥
1 乳児期	基本欲求の充足	母親の乳養	信頼	不信
2 幼児前期	自律性 vs. 恥感	母親の乳養	意欲	羞恥
3 幼児後期	自立的性 vs. 罪悪感	基本規範	目的	罪悪
4 学童期	勤勉性 vs. 劣等感	「正業」・学校	義務	劣等
5 青年期	親密性 vs. 孤独感	親密な友人・恋愛	愛情	孤独
6 若成人期	親密性 vs. 孤独感	友誼・恋愛・結婚	愛	孤独
7 成人前期	生産性 vs. 停滞性	子供と労働と	生産	停滞
8 老年期	尊厳 vs. 卑屈	「人生」 「人生の最後」	尊厳	卑屈

## 2. 生活の場としての施設空間

## 1) 個室化に対する批判に対して

第1章では特別養護老人ホームの個室化に対しての批判や問題点について、表の7-2のような6点を述べたが、ここではそれらに対してこれまでの本論から見出された知見をもとに、考察を行う。

## 1. 一人当たり面積の増加

## 2. 個室は贅沢

特別養護老人ホームを個室化すると一人当たり面積は大きくなり、それだけ供給できる人数が少なくなることになる。施設の絶対数が少ない現状では、質の充実よりもまず量を確保すべきという意見がある。しかし個室というプライベート領域の確保は、人が普通に生活する上で、また新環境に人が適応していく上で、重要な役割を果たしている。特養を収容施設ではなく生活の場として捉えるならば、そこで営まれるであろう生活を優先すべきであろう。またこれから建設される施設は今後の社会的ストックとして残していくものであり、社会的スタンダードとしての役割を担っていくべきものでなければならない。とにかく量だけを充実させることを優先させてしまうと、それが標準となり、質を向上させることがより難しくなる。

## 3. ケアする側の負担増

特養の個室化によって、4人部屋などに比べケアする側の負担がかなり増加するという意見がある。職員の数に限られている現状では、負担の増加はケアの質の低下につながるかもしれない問題となる。ただし、4人部屋だからと言って効率的にケアが行われている訳ではなく、個室化が必ずしも職員の負担を増加させるとは限らない。4人部屋の場合には、居室内のすべての管理を職員が行わねばならない。これに対し個室であることによって、部屋の掃除や簡単な洗濯など入居者自身で出来ることは入居者が行うというような、入居者の自己管理の意識が高まることもある。

## 4. 監視の目が行き届かない

入居者が個室に閉じこもってしまうことにより、全員に

(表7-2) 個室化に対する批判

1. 一人当たり面積の増加
2. 個室は贅沢
3. ケアする側の負担増
4. 監視の目が行き届かない
5. 入居者間のコミュニケーションの減退
6. 入居者の意識



眼が行き届きにくくなるという問題である。しかし、特養を生活の場として考えるのであれば、日常生活が監視されるということの是非が問題にされねばならない。とくに入居者同士の相互監視ということとは、入居者間のコミュニケーションよりも、個人の自立した生活に対する規制として強く働くものである。ただし入居者の個室内の生活がまったく外部から切り離されたものとなっていると、職員に見守られているという安心感をも失うことになる。個室のあり方として、外部から内部の様子が見えたとするのではなく、内部の様子が垣間見え外からでも内部の雰囲気をつかむことの出来るような、室内外が緩やかにつながりを持っていることが望ましいと考えられる。また同時に、職員が入居者個人個人の生活スタイルを把握していることも重要である。

#### 5. 入居者間のコミュニケーションの減退

入居者が個室に閉じこもることにより、入居者同士のコミュニケーションが希薄になることを問題視するものである。実際個室があるからと言って入居者全員が個室に閉じこもって生活しているわけではない。これは共用空間の質や、個室と共用空間とのつながり方に大きく関わることであるが、共用空間に充実した居場所があれば入居者はさまざまなやり方で共用空間を積極的に利用し、そこで他の入居者とさまざまなレベルのコミュニケーションをとることが出来る。それは4人部屋などの相互に監視された空間におけるコミュニケーションよりも、自ら選択しているという点で、主体的な関係と言える。また個室があることによって互いの居室を訪問するという、限られた人同士でのより親密なコミュニケーションを可能にしている。居室をあまり充実させると外に出なくなるのではないかという疑問は、ここではほとんど意味を持たない。

#### 6. 入居者の意識

重介護入居者の常時監視室や他の入居者からの隔離室として個室が位置づけられている施設では、入居者は個室を希望しようという意識は低くなる。これはそもそも個室の絶対数の不足と施設側の対応に問題があることである。施設が原則として個室であれば、このような意識ははじめから起こり得ないことである。さまざまな選択肢を用意するという意味で、2・4人部屋があることを否定するものではないが、それらの部屋は原

則的に個室が達成された場合にはじめて、希望者のための選択肢としての意味を持つことになる。

## 2) 入居者の多様性を支える空間計画

第3章・第4章でみたように、入居者の環境との関わり方は一種ではなく、そこにはいくつかの類型が認められた。これは似たような特長の人をまとめ、それらの差違をわかりやすく示そうとしたものであり、統計処理などによる厳密なグルーピングではない。人によってはどちらの類型とも付きかねるものもあり、また、さらに細かく見ていけばより多くの類型が見出されるだろう。

これらの類型は個人による違い、すなわち人の多様性を表すものであるが、これは単に個人のパーソナリティだけに起因するものではなく、人と環境の双方が影響し合う中で現れてくるものである。同じ人であっても環境のさまざまな要素が異なれば、人と環境との関わり方は変化する。つまり新たな施設計画時において、ここで得られた類型をそのまま入居者類型として想定することはできない。環境のさまざまな制約が強ければ、人と環境との関わり方はごく限られたものとなるだろう。それよりも、これらの多様性を許容し得るような、さまざまな人と環境との関わり方を可能にするような計画が必要なのである。

各入居者の居室が個室であることは、多様な環境形成を可能にしていた。積極的に環境に働きかけ、施設環境の中にこれまでの生活とは異なる新しい関わり方を創り出していく人もいれば、一方ではなるべく以前から使用している物を持ち込むことによってこれまでの生活との連続性を維持しようとしていく人もいる。

また、共用空間にさまざまな質の場が展開していることは、やはり人によって多様な使い方を可能にし、個室から外に広がる個人的領域を形成するのに大きな役割を担っている。自室を充実させそこの活動に意味を見出す人もいれば、親しい人たちとの密度の高いコミュニケーションを重視する人もおり、また施設のさまざまな場所で気軽に人と接しながら生活する人もいる。

こういった空間の使い方は、あらかじめ計画段階で想定され設定された通りに行われているものではない。前にも述べ

たように、普段の生活の中での環境との相互作用の結果、つまり人と環境の両方が影響し合いながら形作られたものである。これまで一般的な計画では、人の行為を想定し、その行為を行うのに適した場所を機能として提供しようというアプローチがとられてきた。機能割り当て論と呼ぶべきこのようなアプローチでは、多様な人に対応するためには多様なメニューを取り揃えねばならない。ところがメニューが細分化されるほど特定の機能に特化し、人の行為が想定された枠の中に閉じこめられることになりかねない。人のパターンに対して適用したプログラムが逆に人のパターンを規制することになる。これは、高齢者の身体状況変化などに伴う人間・環境の関係の変化に対して柔軟に対応できないだけでなく、入居者が主体的に環境に関わる事が規制されるという点で、大きな問題を孕んでいる。

環境の豊かな質とは、施設側からプログラムされて出来上がるものではなく、そこで生活している一人一人が主体的に環境と関わっていくことによって創り出されていくものであり、だからこそ、個人にとって自己と密接な関係を持つ環境が意味あるものとなっていくのである。施設環境の計画は、建物が出来上がった時点で完成するものではない。入居者がそこに移り住み生活していく中で徐々に環境が形成されていき、常に継続的・未完成なままであり続ける、そのような時間的変化に対する許容性を含んだ計画である必要がある。入居者に提供するための固定した機能をデザインするのではなく、入居者の働きかけをサポートするような、いわば可能性のデザインが求められることになる。

## 3. 環境に対する期待

## 1) 期待の概念

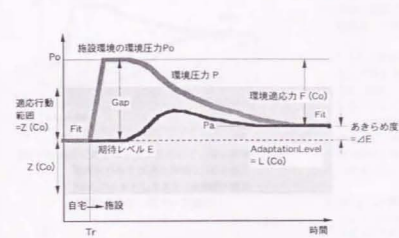
人と環境とが安定した関係を作り出しているとき、その関係は人の意図・目的によって成り立っているわけではない。言い換えると、人の頭の中に完全な地図があり、すべての場所が明確な目的に対応しているような形で結びついているわけではない。人と環境とが安定した関係にあることは、つねに同じ場所で同じ行動が行われることではなく、さまざまな状況に対して、人がある期待に応じて行動した結果がより適合的になるということである。その意味で、人と環境とは状況に対する期待によって結びつけられている。

期待は、人と環境とのトランザクションをそのまま反映する。さまざまな場面に対する期待は、人の頭の中だけに作られるものではなく、環境の場面場面に対峙したときに想起されるものでもある。Lave (1988) によると、期待とは人が場面で経験される活動によって具体化される解決策の形である。人々は何が起こったか、何が起こっているか、何が起こりそうかをめぐる期待によって、創意思考が行われる。そしてこの期待が何が実際に起こるかに影響する (Lave 1988)。

人は期待によって行動し、その期待が実現されるというサイクルによって、場面との間に安定した関係を作り上げていく。期待が実現されなければ、人はそれを修正していき、状況に応じて次第に適合していくものとなる。その結果、人が環境の中で行動環境を築き上げ、それが安定したシステムとなっているとき、期待は行動環境のさまざまな状況にはほぼ一致することになる。

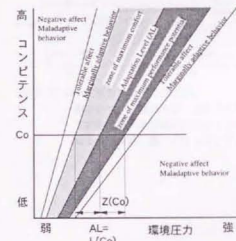
これは Parkes (1972) の想定的世界 (assumptive world) に近い概念とも言える。想定的世界とは、個人がそれまでの人生体験の蓄積の中から、当然そこにあるものと思いこんでいる、そしてこれからもあると暗黙に予期しているような、自分の抱って立つ生活空間の像である (南, 1995)。期待はより状況的であり、人と環境との関係によって変化していく。

2) 期待と適応モデル

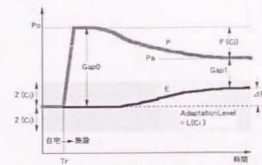


(図7-3) 環境圧力の適応過程モデル - 適応している状態

この期待の概念を、第5章で検討した環境圧力の移行過程モデルに適用してみる。環境圧力とは、人が環境に対処する際に必要とする身体的・心理的負担のレベルであり、人と環境とが安定した関係にある場合、その環境に対して想定される環境圧力の期待レベルは、実際に人が感じる環境圧力と等しくなるとする。



(図7-4) 人間-環境トランザクションモデル (Lawton & Nahemow, 1973) 人のコンピテンスが  $Co$  の場合、環境圧力の適応レベル  $AL$  および適応行動範囲  $Z$  は  $Co$  の関数によって定まる。



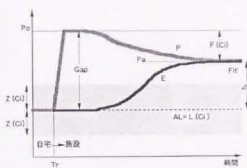
(図7-5) 適応できずギャップを感じている状態  $P_a$  が適応範囲  $Z(Co)$  を超えており、期待レベル  $E$  とギャップがある。

1. 入居者のコンピテンスを  $Co$  とする。環境圧力の適応レベル  $AL$  はコンピテンスによって定まる。  
 $AL = L(Co)$   
 適応行動のなされる範囲 ( $Z(Co)$ ) も同様にコンピテンスにより定まる。人が自宅にいて環境とフィットしているとき、環境圧力  $P$  は  $AL$  に等しいと仮定する。環境圧力に対する期待レベル  $E$  は自宅の環境圧力  $P$  と等しくなる。  
 $P = AL = E$

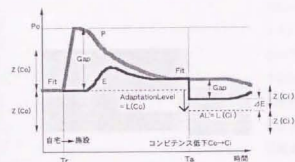
2. 施設入居により環境圧力は急激に高まる ( $P = P_0$ )。入居当初の期待レベルはまだ自宅にいたときの  $E = AL$  のままであり、ここに実際の環境圧力とのギャップを感じるようになる。  
 $Gap = P_0 - E = P_0 - AL$   
 入居者が環境に働きかけ行動環境を形成していくことにより、環境圧力は軽減されていく。この働きかけによりどれだけ環境圧力を軽減することができるか(環境適応力  $F(Co)$ ) は入居者のコンピテンスと施設環境により左右される。この過程で期待レベルも環境圧力に近づいていき、これが環境圧力と等しくなると環境とフィットしたと感じるようになる。  
 $P_a = P_0 - F(Co) = E$

この時のレベルが適応行動の範囲に入っていれば、人は環境と適応した行動をとることになる。  
 $P_a = P_0 - F(Co) < AL + Z(Co)$   
 この時の期待レベル  $E = P_a$  と、もとの期待レベル  $E = AL$  との差  $\Delta E$  は、施設入居に伴い変化させられた期待レベルの差分である。自宅から施設に入居したことによる、あきらめの感情に近いものと思われる。

3. コンピテンスの低い人の場合 ( $C_i$ )、適応レベル  $L(C_i)$ 、適応範囲  $Z(C_i)$ 、適応能力  $F(C_i)$  もともに低い値となる。行動環境の形成により環境圧力が軽減されても、その値  $P_a = P_0 - F(C_i)$  が適応範囲内に入らない場合、適応した行動がとれないことになる。その時、入居者が何とか適応したいと思っているのであれば  $\Delta E$  は適応範



(図7-6) 適応できずギャップも感じていない状態  
期待レベルEが適応範囲Z(C)を超えPaとフィットしており、変動的・無気力的であるが、ギャップはない。



(図7-7) コンピテンス低下に伴う変化  
適応レベル・適応範囲・適応力とも低下するため、適応範囲内でフィットすることが次第に難しくなっていく。

画の中に収まっており、ここで環境圧力Pと期待レベルEとのギャップを感じることになる。この状態がなかなか施設に適応できず、ギャップを感じ続けている状態として捉えられる。

4. しかしこの状態が長く続いたり、あるいは施設入居に対してのあきらが大きすぎると、 $\Delta E$ が適応範囲を超え、期待レベルと環境圧力がフィットすることがある。これが、環境に働きかけることをあきらめ、自分の主体性を失いながらも、ギャップを感じる事が少なく、一見施設に適応しているかのように見える状態である。あきらめ、無力感、変動性などに特長づけられる施設化された状態と言える (Sommer, 1969)。

5. また、人-環境の適応状態から、身体レベルの低下などによって人のコンピテンスが低下した場合、適応レベルALも低下するとともに、期待レベルEも $\Delta E$ を保ったまま低下する。すると、期待レベルEと環境圧力Pとの間にふたたびギャップが生じ、そのギャップに対応するために新たに働きかけを行っていく必要が生ずることになる。しかもコンピテンスが低下したことで適応範囲Z(C)も適応力F(C)も低下していることに注意する必要がある。

## 3) 期待とアイデンティティ

上のモデルでは、期待という概念を環境圧力に対しての想定レベルに適用し、施設環境との関係を表す全体的な指標として用いた。より広い意味で期待とは、それぞれの場において人がその状況に面したときに、行動を通して現れてくるものである。

場に対する期待とは、そこで何が起こるか、誰がいるか、どんなコミュニケーションがとれるか、などに関しての予期である。実際にその場に参加し、その状況を確認することによって、期待はより確かなものになる。その期待は、空間の性質だけによって定まるものではなく、自分がこれまでその場にどのように関わってきたか、そして今後どのように関わっていくか、ということが大きく影響する。人は、自分が働きかけ関わってきた出来事や人間関係などの状況を知るだけでなく、働きかけた主体である自分の状況を知り、その相対関係を把握することによって、自分が参加することによって引き起こされる状況を予期することができるのである。期待とは、このようにある状況における人と環境との両面を映し出す言葉である。人と環境との関係を期待という概念で結びつけることは、人と環境が安定した関係にあるときに、人の行動が主体的であるとともに状況に適合しているという、2つの側面が同時に成立していることを表している。

ここで「主体性」あるいは「主体的」という言葉は、積極性や能動性を表すものとしては用いていない。自分が自分の人生の主人公として、日常生活のさまざまな決定権を持ち、行動や関係が（結果として）自分で選択したものとなっているときに、ここでは「主体的」という言葉で表している。また、場への「適合性」は、人の行動が本質的に社会的なものであり、環境のさまざまな要素の中に関係づけられていることを表している。

これらの、「主体的であること」「状況に適合していること」は、これまでも取り上げてきたように、アイデンティティ確立の重要な二側面である。人の環境に対する期待とは、人が環境の中でアイデンティティを確立することと密接に関係した概念として捉えられる。

人が環境に適合していくことは、環境のさまざまな状況に対しての期待を次第に広げていき、環境の中でアイデンティティを確立していく過程として読み替えられる。

## 4. 人と環境との媒介

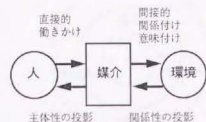
## 1) 媒介の役割

人がある場に対して期待を持っているとき、場は与えられた期待によってその人自身と、その背後にある状況や環境を映し出す。つまり人は、場によってその背後の状況や環境と間接的に関わりを持つことができる。そのときには場は、その場本来の役割を果たすとともに、背後の状況や環境と人とを結びつけるという媒介（インターフェース）ともなっている。

共用空間の場が媒介となっている理由の一つは、そこに他者がいて、集まりを形成していることによる。第4章で人の集まる場を、開放的集まり・親密な関係・目的集まり、に分類した。このうち閉鎖的集まりと目的集まりはメンバーが固定化し、それ以上関係が広がっていくことが少ない。開放的集まりは、自分が参加しやすいとともに、他者も参加しやすいという意味で、関係が広がる可能性を持っている。この関係の広がりには2つの意味が含まれる。一つは自分が参加したときに、居合わせた人の間に関係が広がっていくという意味であり、もう一つは、そこに参加した人たちを通して、さらに多くの人に関係が広がっていくという意味である。この関係の広がりの可能性こそ、その集まりの場が媒介として映し出してくれるものである。

また、居室における環境形成と意味付けのサイクルでみたように、居室内においては持ち込んだ「物」が人と環境とを結びつける媒介となっていた。物は直接人が環境に働きかけ環境を変化させる手段ともなっているために、その関係は二重の意味を伴ったさらに複雑なものとなっている。まず物の機能として、ある物を使って活動する道具として、物自体の機能的役割を果たすという一面と、居室の空間に働きかけ環境自体を構築するという一面がある。そしてそれらの働きかけによって、物の背後にあるさまざまな関係（社会的結び付きや自分の過去など）を映し出すと同時に、自分が働きかけの主体であることも映し出す。

このように、人は直接働きかけている媒介を通して、その背後に広がる環境の意味を間接的に把握することができる。その媒介は、そのもの自体の意味を人に与えるとともに、その背後にある環境の意味を間接的に人に伝えるという、二重の役割を果たしていることになる。



(図7-8) 媒介を通じた人と環境との関係



## 2) 媒介を通じた人間-環境システム

人は媒介を通してその外側に広がる環境を関係づける。そして、その関係づけた環境をさらなる媒介として、より外側の大きな環境を関係づけていく。そのような入れ子状の構造は、自分を中心とした同心円状の関係を形作る。これは必ずしも空間的に同心円状に広がることを意味するものではない。主体としての人が周りの環境との関係を形成していく場合、環境は自己を中心としたヒエラルキーに位置づけられることを示している。



(図7-9) 人を中心とした同心円状のヒエラルキー

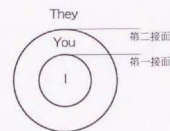
このときの人と環境そして媒介の関係は、佐伯 (1994) の提唱している認識のドーナツ論を参考にするとわかりやすい。

認識のドーナツ論とは、人 (認識主体I) が外界 (They 世界) の認識を広げ、深めていくときに、必然的に You 世界との関わりを経由するとみなすものである。

You とは二人称的に関わる他者のことであり、単に I と親しいだけでなく、I にとって未知な世界である They 世界を垣間みせてくれる存在である。They 世界は一般的他者 (三人称) からなり、規範性のみが際立つ世界であるが、やがて I が関わっていくべき世界である。I は、You を通じて They 世界を垣間みると同時に、You に映し出された自分自身と対面する。その You の二重の役割によって I は、直接的には関与できない They との相対関係を把握し、やがて They を You 化することによって自分の関わる世界を広げていく。このとき、I と You との相互関係 (第一接面) ・You と They との相互関係 (第二接面) の両者ともが、I が世界と関わっていく上で重要である。

人が施設環境と関わっていく上でも、You として機能する媒介が重要な役割を果たす。それは、他の同居者や職員などの人に限らず、居室に持ち込まれた物であったり、人の集まる場であったりする。それらの媒介が You の存在となるということは、単に人と媒介とが明けた関係にあるのではなく、その外側の世界 (すなわちこれから適応すべき They 世界である施設環境) に対して広がりを持つことであり、人が間接的に環境と関わっていくことが可能になることである。人はそこに自分自身を映し出しながら、環境との関係を次第に形作っていく。

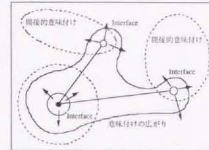
この過程は、見方を変えれば、アイデンティティの内面化・外面化の相互プロセス (Toyama, 1988) として捉えられる。内面化 (internalize) プロセスとは、人が媒介を通して外的環境



(図7-10) 認識のドーナツ論 (佐伯, 1994)

を取り入れ、自分の中で関係付け再体制化していく過程であり、外面化 (externalized) プロセスは媒介を通して環境に働きかけ自己を表現していく過程である。この内面化・外面化プロセスは、媒介 (You) を仲立ちとすることで、それぞれに独立したプロセスとしてではなく、常にセットとして同時に行われる。あるいは、人が環境の中で関係を広げていくときにあらわれてくる両面性として理解される。

このようなプロセスの重ね合わせによって、人は全体の環境を段階的に意味づけていき、やがて人と環境との安定した関係が形成される。それは逆に言うと、環境全体の中に人が間接的に関係づけられることもある。安定した人間-環境システムの中では、人は主体的・自立的に行動しながら、環境全体の中に関係づけられ、環境の中の自分自身を見出すことができるのである。



(図7-11) 全体環境に対する意味付けの広がり

## 3) 媒介としてのコミュニティ

この調査対象施設は、入居者が自分の家として生活できることを目指し、「私の家」という意味の名前を付けている。それでは、入居者は施設を本当に自分の家として認識しているのだろうか。そもそも自分の家として感じるとは、どのようなことだろうか。次の二つのレベルから考えることにする。

ひとつは、空間そのものの性質として、その場所が環境と人との相互作用によって自らの「身の置き処」として安定した居場所となっているかどうか。それは、その空間に自分なりの秩序を持ち込み、また他者との関係や外部からの情報をコントロールできるなど、プライバシー感覚と密接に結びついた空間領域が確保されることであろう。

もうひとつは、周囲環境との相互関係の上で浮かび上がってくる性質として、その居場所から生活範囲を広げていく拠点として、そしていつでもそこへ帰ってこられる拠点として機能しているかどうか。在宅の高齢者を考えた場合、彼らが家の中で完結して生活していることは少なく、人それぞれに自宅周辺の地域やさらに遠くへと足を延ばしながら生活している。そのような周辺環境の質・コンテクストとの相互作用によって、家としての性質は大きく影響を受けている。

高齢者居住施設、とくに特別養護老人ホームでの生活は、基本的に建物内部で閉じている。ときには自宅に帰ったり買い物や旅行に出かけたりといったこともあるが、それはあくまで特別な例外的状況であろう。入居者は生活の完結した施設自体を、安定した居場所としての自分の家と捉えているのではなく、自室を拠点としながら生活領域を広げていくような空間として捉えているのではないだろうか。そのとき個々こそが、自分の身の置き所として、また生活の拠点として、重要な役割を果たしている。

そう考えていくと、共同生活している施設の入居者のまわりは、ひとつの家族として捉えるのではなく、コミュニティとして捉え方が適切だと考えられる。空間を共有し集まって住んでいることによって、入居者は互いに何らかの影響を与え合っており、その意味で居住施設の共同生活は紛れもなく社会的な状況なのである。個人個人は自分の家族・友人などのネットワークを持っているとしても、ある空間を共有しつつ生活していることの重みは無視できない。しかも、その内部空間で生活が完結しているとなればなおさらである。施設内コ

コミュニティを重視するもう一つの理由は、必ずしもすべての人が施設入居後も自分のネットワークを維持していけるわけではないことにある。もともとネットワークの希薄な人もいれば、次第につながりが弱まっていく場合もある。

ここでは「コミュニティ」といった場合には、全員参加の拘束的な共同体を意味するわけではない。そのような規範性の強いコミュニティとは、皆と同じことをすることが求められ、私を見失ってしまう場であるだけでなく、コミュニティ内で関係が完結しそれ以上広がりのない世界である。そうではなく、私はず私として確保されていること、そしてある小さなまとまりだけで完結してしまうのではなく施設内外へと広がりを持っていること、の二点を備えたコミュニティを想定している。それは人と環境との媒介として機能し、それを通して人は次第に施設環境全体に自分を関係づけていくことができる。その際、人によって選択しうるさまざまな段階のコミュニティがあることが重要である。それは、全員で一つのアクティビティに参加するのではなく、そこから身を引いていることができたり、別のグループを形成したり、あえて交流することも何となく同じ場を共有することができるなどといった、多くの場面によって支えられるものである。

さらにコミュニティとは、内部コミュニティだけを重視するものではなく、外部ネットワークをとるに足らないものあるいは補足的なものとして捉えるものでもない。内部コミュニティが硬直化しないためには外部とのネットワークが必要であり、また外部ネットワークだけに頼ることの危うさを回避するためには内部コミュニティが大きな役割を果たすべきであるという、お互いに変え合う関係にあるものとして考えていく必要があるのではないだろうか。そして、施設内の人と環境との媒介としてだけでなく、施設を越えた外側の世界との媒介としても機能していくことが望まれる。地域に関係を広げていく拠点として、そしていつでも帰れる拠点として、施設のコミュニティがその役割を果たすとき、施設自体が家として感じられる場所となるのではないだろうか。

## 参考文献

- Alexander, C. *The timeless way of building*, Oxford University Press, 1979 (平田裕都訳, 「時を超えた建設の道」, 鹿島出版会, 1993)
- Brunswik, E. *The conceptual framework of psychology*, The University of Chicago Press, 1969 (船津孝行訳, 「心理学の枠組み」, 誠信書房, 1974)
- Cohen, U. and Weisman, G. D. *Holding on to home—Designing environments for people with dementia*, The Johns Hopkins University Press, 1991 (岡田成海監訳, 「老人性痴呆症のための環境デザイン—症状緩和と介護をたずける生活空間づくりの指針と手法」, 朝日社, 1995)
- Csikszentmihalyi, M. and Rochberg-Halton, E. *The meaning of things—Domestic symbols and the self*, Cambridge University Press, 1981
- Dovey, K. *Home and homelessness, Home environments, human behavior, and environment vol.8*, Plenum Press, 1985
- Edward Relp, *Place and placelessness*, Pion Limited, 1976 (高野岳彦他訳, 「場所の現象学」, 筑摩書房, 1991)
- Erikson, E. H. *The life cycle completed—A review*, W. W. Norton & Company, 1982 (村瀬孝雄他訳, 「ライフサイクル, その完結」, みすず書房, 1989)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M. and Kivnick, H. Q. *Vital involvement in old age*, W. W. Norton & Company, 1986 (朝長正徳他訳, 「老年期—生き生きとしたかわりあい」, みすず書房, 1990)
- Gibson, J. J. *The ecological approach to visual perception*, Houghton Mifflin Company, 1979 (古崎敬他訳, 「生態学的視覚論—ヒートの知覚世界を探る」, サイエンス社, 1985)
- Goffman, E. *Behavior in public spaces—Notes on the social organization of gatherings*, The Free Press, 1963 (丸木忠尚他訳, 「集まりの構造—新しい日常行動論を求めて」, 誠信書房, 1980)
- Hertzberger, H. *Lessons for students in architecture*, Uitgeverij 010 Publishers, 1991 (森島清太郎訳, 「都市と建築のバリエーション—ヘルツベルガーの建築講義録」, 鹿島出版会, 1995)
- Hoglund, J. D. *Housing for the elderly—Privacy and independence in environments for the aging*, 1985 (藤川利和他訳, 「世界の高齢者住宅—プライバシーと自立の実現」, 鹿島出版会, 1989)
- Howell, S. C. *Designing for aging—Pattern of use*, MIT Press, 1980
- Howell, S. C. *The meaning of place in old age, Aging and milieu: Environmental perspectives on growing old*, Academic Press, 1983
- Intelson, W. H., Proshansky, H. M., Rivlin, L. G., Wurd, G. H., *An introduction to environmental psychology*, Holt, Rinehart and Winston, 1974 (望月新訳, 朝日社, 1977)
- Kahana, E. and Kahana, B. *Environmental continuity, futuring, and adaptation of the aged: Aging and milieu—Environmental perspectives on growing old*, Academic Press, 1983
- Knapat, E. *People in cities—The urban environment and its effects*, Cambridge University Press, 1986 (藤原武弘監訳, 「都市生活の心理学—都市の環境とその影響」, 西村書店, 1994)
- Lang, J. *Creating Architectural Theory—The role of behavioral sciences in environmental design*, Van Nostrand Reinhold Company, 1987 (高橋穂志訳, 「建築理論の創造」, 鹿島出版会, 1992)
- Lave, J. and Wenger, E. *Situated learning—legitimate peripheral participation*, Cambridge University Press, 1991 (佐伯新訳, 「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」, 産業図書, 1993)
- Lave, J. *Cognition in practice—Mind, mathematics and culture in everyday life*, Cambridge University Press, 1988 (熊澤隆他訳, 「日常生活の認知行動—ひととは日常生活でどう計算し, 実践するか」, 新報社, 1995)
- Lawton, M. P. *Time, Space, and Activity, Aging and milieu: Environmental perspectives on growing old*, Academic Press, 1983
- Lawton, M. P., and Nahrenow, L. *Ethology and the aging process, Psychology of Adult Development and Aging*, Washington: American Psychological Association, 1973
- Moss, R. H. *The human context—environmental determinants of behavior*, John Wiley & Sons, 1976 (望月新訳, 「環境の人間性—行動科学的アプローチ」, 朝倉書店, 1979)
- Neisser, U. *Cognition and reality—Principle and implications of cognitive psychology*, W. H. Freeman and Company, 1976 (古崎敬他訳, 「認知の構造—人間は現実をどのようにとらえるか」, サイエンス社, 1978)
- Newman, O. *Defensible space*, Macmillan, 1972 (藤川利和他訳, 「守りやすい住空間」, 鹿島出版会, 1976)
- Pastalar, L. A. *Environmental displacement: A literature reflecting old person-environment transactions, Aging and milieu: Environmental perspectives on growing old*, Academic Press, 1983
- Rapoport, A. *House form and culture*, Prentice-Hall, 1969 (山本正三他訳, 「住まいと文化」, 大明堂, 1987)
- Rapoport, A. *Levels of meaning and types of environments*,

- Rubinstein, R. L. The home environments of older people: A description of the psychosocial processes influencing person to place. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 1989
- Sommer, R. Personal space—The behavioral basis of design. Prentice-Hall, 1969 (磯山貞登訳、「人間の空間—デザインの行動的研究」, 鹿島出版会, 1972)
- Thiberg, S. Housing research and design in Sweden. Swedish Council for Building Research, 1990 (外山義訳、「スウェーデンの住環境計画」, 鹿島出版会, 1996)
- Toyama, T. Identity and milieu, 1988
- Wapner, S. Organismic-developmental systems perspective, 1991 (『有機体発達論的システム論的アプローチ』, 人生移行の発達心理学, 北大路書房, 1991)
- Wicker, A. W. An introduction to ecological psychology, Cambridge University Press, 1984 (安藤延男訳、「生態学的心理学入門」, 九州大学出版会, 1994)
- Zisod, J. Inquiry by design—Tools for environment-behavior research, Cambridge University Press, 1984 (根建金男他監訳、「デザインの心理学—調査・研究からプランニングへ」, 西村書店, 1995)
- 石井敏他, 終生の場に関する考察—特別養護老人ホームの場合, 日本建築学会計画系論文集 477号, 1995
- 伊藤英男他, これからの福祉施設運営, 中央法規出版, 1987
- 今井正次, 余暇的生活行為から見た長期專業生活者の加齢化と生活要求—病院・産業型施設的生活空間の計画に関する研究3, 日本建築学会計画系論文集 479号, 1996
- 大原一興, 高齢者の生活拠点移動に関する建築計画的な研究, 1989
- 大原一興他, 個室のある老人ホーム—高齢者の人権確保のために, 南文社, 1995
- 奥田道夫, 都市と地域の文脈を求めて, 有真堂, 1993
- 小原博之他, 痴呆性老人施設の建築計画に関する基礎的研究—住環境変化を視点とした事例的研究, 日本建築学会計画系論文集 459号, 1994
- 横沢英之, 特別養護老人ホームにおける集まりの構造に関する研究, 1995
- 木下康仁, 老人ケアの社会学, 医学書院, 1989
- 金ワツ他, 障がい型集合住宅における環境と行動との相互浸透関係の考察, 日本建築学会計画系論文集 475号, 1995
- グループなごん編, 日本人の老後, 晶文社, 1995
- 建築思潮研究所編, 建築設計資料 34 老人ホーム—高齢者の集合住宅, 建築資料研究社, 1991
- 建築思潮研究所編, 建築設計資料 3 老人の住環境, 建築資料研究社, 1983
- 児玉桂子他, 居住環境における高齢者のプライバシー欲求とその達成状況, 在宅環境整備のための援助方法に関する研究, 日本社会事業大学, 1994
- 小林秀昭, 集住のなわばり学, 彰国社, 1992
- 小室豊丸編, 明日の老人ホーム像を求めて, 全社協, 1988
- 国民の福祉の動向, 財団法人厚生統計協会, 1996
- 佐伯祥, 「学ぶ」と言うことの意味, 岩波書店, 1998
- 佐伯祥, 認知科学の方法, 東京大学出版会, 1986
- 佐伯祥他, アクティブ・マインド—人は動きのなかで考える, 東京大学出版会, 1990
- 佐々木正人, からだ: 認識の原点, 東京大学出版会, 1987
- 特別養護老人ホーム・老人保健施設整備計画—平成8年度版, 産業タイムズ社, 1996
- 藤崎正彦他, 建築計画における人間—環境系研究の流れに関する試論, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E, 1995
- 鈴木成文他, 「いえ」と「まち」, 鹿島出版会, 1984
- 鈴木成文他, 近傍概念に基づく住居集合計画の研究, 昭和60年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書, 1986
- 須田岳志他, 高齢者福祉施設における住空間形成に関する基礎的研究, 病院管理 32, 1995
- 全国社会福祉協議会, 96 社会福祉の動向, 1996
- 総務庁長官官房老人対策室, 数字で見る高齢社会 95—人生80年代の日本の姿, 大蔵省印刷局, 1995
- 高橋藤忠, 建築—都市環境における移行, 人生以降の発達心理学, 北大路書房, 1991
- 高橋藤忠他, 高齢者居住施設における居住者の生活領域形成に関する研究, 高齢者居住環境に関する環境心理学的研究 (平成3-4年度科学研究費補助金総合研究(A)), 1993

- 田村静子他、高齢者施設における個室化に関するわが国の動向、高齢者・介護者の行動特性に基づく施設環境の整備方法に関する研究、日本社会事業大学、1995
- 東京都老人総合研究所障害研究室老人・障害者研究会、老人・障害者研究2、1984
- 外山義、クワパンの老人たち—スウェーデンの高齢者ケア、ドメス出版、1990
- 中島義明他、すまう一住行動の心理学、朝倉書店、1996
- 中野卓他、ライフヒストリーの社会学、弘文堂、1995
- 西平正、エリクソンの人間学、東京大学出版会、1993
- 日本建築学会建築計画委員会設計方法小委員会、人間—環境系の計画理論の考え方、1991日本建築学会大会協議会資料《建築計画部門》、1991
- 日本建築学会建築計画委員会設計方法小委員会、人間—環境系の計画理論の考え方(続)、1992日本建築学会大会協議会資料《建築計画部門》、1992
- 日本住宅会議、私たちはどこで暮らしているか—高齢化社会と住宅問題、ドメス出版、1992
- 林崎光弘他、痴呆性老人グループホームケアの理念と技術—その人らしく最期まで、バネオパブリック、1996
- 関宮肇他、都市と社会的共通資本—生活の場としての展開、市場・公共・人間、第一書林、1992
- 南博文、都市再開発に伴う高齢期居住者の生活世界の再体制化と心理社会的適応、高齢者居住環境に関する環境心理学的研究(平成3・4年度科学研究費補助金総合研究(A))、1993
- 南博文他、老いることの意味—中年・老年期、金子書房、1995
- ミネルヴァ書房編集部編、社会福祉小六法平成7年版、ミネルヴァ書房、1995
- 森岡清志、都市コミュニティ形成とネットワークキング、都市計画、1993
- 柳澤要、児童の行動場面からみた空間解析に関する研究、1992
- 山下智郎他、「療養型向床群に対応する病棟・病室平面のあり方」に関する研究、平成6年度・社団法人日本病院建築協会・課題研究報告書、1995
- 山井和則、スウェーデン発住んでみた高齢社会、ミネルヴァ書房、1993
- 山本多美司・S.ワップナー、人生移行の発達心理学、北大路書房、1991
- 栗金石他、高齢者療養施設における看護・介護の業務分析—高齢者の療養環境の適正化に関する研究、日本建築学会計画系論文集470号、1995
- 栗金石他、入院・入所の療養生活をおくる高齢者の基本的生活行為からみた類型—高齢者の療養環境の適正化に関する研究、日本建築学会計画系論文集464号、1994
- 栗金石他、療養生活をおくる高齢者の一日の生活実態とその類型化—高齢者の療養環境の適正化に関する研究、日本建築学会計画系論文集466号、1994
- 李京浩、空間適応過程からみた高齢者居住環境の建築計画的考察、1995

## 研究業績

## ○論文

- ・「個室型特別養護老人ホームにおける個室内の個人的領域形成に関する研究」審査中、日本建築学会計画系論文集、高橋篤志、外山義、古賀紀江と共著
- ・「地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究——大規模団地と既成市街地におけるケーススタディ」、1997年6月予定、日本建築学会計画系論文集、高橋篤志と共著
- ・「根津・千駄木・谷中の街並に関する考察」、1990年3月、東京大学卒業論文
- ・「高齢者にとっての地域環境に関する考察——根津・赤羽台におけるケーススタディ」、1992年3月、東京大学修士論文

## ○研究報告

- ・「住居における行動場面に関する研究——一人の居方から住居の公的空間を考察する」、1991年、住宅総合研究財団研究年報、高橋篤志、西出和彦、鈴木毅らと共著
- ・「住み分けを可能にする高齢者居住環境——既成市街地と大規模住宅団地の比較」、1992年、日本建築学会関東支部研究報告集、野村知子、高橋篤志、鈴木毅と共著
- ・「高齢者のひとりぐらし—大塚地区住生活実態」、1991年3月、文京区地域高齢者住宅計画報告書特論、高橋篤志、大原一興、今井ゆりからと共著
- ・「高齢者居住環境に関する環境心理学的研究——高齢者居住施設における居住者の生活領域形成に関する研究」、1993年3月、文部省科学研究費補助金総合研究成果報告書、代表：山本多喜司、高橋篤志、外山義、李京浩と共著
- ・「高齢者の住空間に対する環境行動的研究報告書」、1993年、住宅・都市整備公団住宅都市試験研究所企画調査課、高橋篤志、鈴木毅、野村知子らと共著
- ・「高齢者の住空間意識に関する研究——高齢者向け住宅II型」、1994年、住宅・都市整備公団住宅都市試験研究所企画調査課、(株)市浦都市開発建築コンサルタンツらと共著
- ・「高齢者の自立型の住宅及び団地利便施設の構成に関する研究」、1994年、住宅・都市整備公団住宅都市試験研究所企画調査課、(株)市浦都市開発建築コンサルタンツらと共著
- ・「高齢者の環境移行と快適環境の形成に関する研究」、執筆中、平成6年度文部省科学研究費補助金総合研究、代表：山本多喜司、高橋篤志、外山義、鈴木毅らと共著

## ○学術講演

- ・「根津・千駄木・谷中の街並に関する考察」、1991年9月、日本建築学会大会(仙台)、高橋篤志、菊地成明と共著
- ・「都市木造住宅密集地区におけるひとりぐらし高齢者の生活行為と住空間—その1—調査概要・社会的交流からみた生活スタイル」、1991年9月、日本建築学会大会(仙台)、大原一興、高橋篤志、今井ゆりからと共著(pp.275-276)
- ・「都市木造住宅密集地区におけるひとりぐらし高齢者の生活行為と住空間—その2—生活行為に対応した場の使い分け」、1991年9月、日本建築学会大会(仙台)、木原由起子、高橋篤志、大原一興らと共著(pp.277-278)



- ・「高齢者居住施設における人間と物的環境の関わりに関する考察—その1— 施設内部の領域」, 1992年8月, 日本建築学会大会(新潟), 李京浩, 高橋篤志, 外山義と共著 (pp.277-278)
- ・「高齢者居住施設における人間と物的環境の関わりに関する考察—その2— プライベートゾーン内部の領域」, 1992年8月, 日本建築学会大会(新潟), 李京浩, 高橋篤志, 外山義と共著 (pp.279-280)
- ・「高齢者の生活行動分類に関する研究」, 1992年8月, 日本建築学会大会(新潟), 野村知子, 高橋篤志, 鈴木毅らと共著 (pp.109-110)
- ・「高齢者にとっての地域環境に関する考察—人間-環境系としての地域に関する研究—その3」, 1993年9月, 日本建築学会大会(東京), 高橋篤志, 鈴木毅と共著 (pp.97-98)
- ・「高齢者居住施設における人間と物的環境の関わりに関する考察—その3— 既成市街地-集合住宅との対比」, 1993年9月, 日本建築学会大会(東京), 李京浩, 高橋篤志, 鈴木毅らと共著 (pp.367-368)
- ・「住み分けを可能にする高齢者居住環境—その2—」, 1993年9月, 日本建築学会大会(東京), 野村知子, 高橋篤志, 鈴木毅らと共著 (pp.353-354)
- ・「根津の地域研究—その2— 様々なレベルの関わりをアフォードする地域空間」, 1993年9月, 日本建築学会大会(東京), 西田徹, 森崎正彦, 高橋篤志らと共著 (pp.91-92)
- ・「高齢者居住施設における人間と物的環境の関わりに関する考察—その4— 高齢者住宅における庭の形成」, 1994年9月, 日本建築学会大会(名古屋), 李京浩, 高橋篤志, 鈴木毅と共著 (pp.277-278)
- ・「高齢者居住施設における人間と物的環境の関わりに関する考察—その5— 高齢者住宅における庭の質」, 1994年9月, 日本建築学会大会(名古屋), 李京浩, 高橋篤志, 鈴木毅と共著 (pp.279-280)
- ・「根津の地域研究—その3— 集合住宅居住者と地域環境の関わり」, 1994年9月, 日本建築学会大会(名古屋), 富田裕, 西田徹, 高橋篤志と共著 (pp.161-162)
- ・「個室型特別養護老人ホームの施設内空間と個人的領域形成—高齢者居住施設における個人的領域形成に関する考察(その1)」, 1995年8月, 日本建築学会大会(札幌), 外山義, 井上由起子, 高橋篤志らと共著 (pp.109-110)
- ・「個室型特別養護老人ホームの居室内の個人的領域形成—高齢者居住施設における個人的領域形成に関する考察(その2)」, 1995年8月, 日本建築学会大会(札幌), 外山義, 井上由起子, 高橋篤志らと共著 (pp.111-112)
- ・「個室型特別養護老人ホームの入居者の領域展開シナリオからみた生活スタイル—高齢者居住施設における個人的領域形成に関する考察(その3)」, 1995年8月, 日本建築学会大会(札幌), 外山義, 井上由起子, 高橋篤志らと共著 (pp.113-114)
- ・「個室型特別養護老人ホームにおける居場所の形成と領域化—高齢者居住施設における個人的領域形成に関する考察(その4)」, 1996年9月, 日本建築学会大会(彦根), 外山義, 古賀紀江, 高橋篤志と共著 (pp.285-286)
- ・「個室型特別養護老人ホームにおける居室の環境形成の過程—高齢者居住施設における個人的領域形成に関する考察(その5)」, 1996年9月, 日本建築学会大会(彦根), 外山義, 古賀紀江, 高橋篤志と共著 (pp.287-288)

#### ○論叢

- ・「生活の場と都市コミュニティ—多様な関係を支える都市の仕掛け」, 1996年1月, 「すまいるん」, 財団法人住宅総合研究財団, 鈴木毅, 森崎正彦と共著 (pp.31-37)

筆者が高齢者問題に関心を持ち始めたのは、東京大学大学院の修士に進学した後のことである。修士論文では、地域に暮らす高齢者にとっての地域環境の意味について考察を行った。このときは比較的元気で自立した生活を送っている高齢者が対象であったので、一人一人の個性ある生活状況が浮かび上がってくる一方で、高齢者特有の問題には踏み込んでいないという指摘をずいぶん受けた。その当時から、高齢者を対象にしていながら高齢者を特別の存在としてではなく、普通の生活を行う普通の人として捉えていこうという視点をとっていた。これは現在に至るまで大きくは変わっていない。一方、高齢者が環境の影響を一人ひとりが受けることは確かであり、高齢者の生活を定量的にはなく定性的に見ていった場合、環境の質が生活の質に顕著に現れられていることを、当時おぼろげながら知ることが出来た。定量的にはなく定性的に、ということは、筆者が統計的手法を苦手としているということも大きいのだが、1000人のアンケートを採った結果からよりも、20人でもいいから自らインタビューして得た高齢者個人個人の声の方から、非常に多くのことを学ぶことができたという個人的な経験によるものである。

博士課程に進学してからは、ひとつの特別養護老人ホーム（以下、特養）を開所直後から継続的に調査する機会に恵まれた。修士論文以来、生活と地域との関わりに関心があったため、はじめは特養と周辺地域との関係をいろいろ調べたいと思っていたが、特養では高齢者の生活空間が基本的に施設内で完結する傾向が強いこともあり、入居者にとっての施設空間を（在宅高齢者にとっての）地域空間として見ていこうという視点が変わっていった。施設空間と地域空間でももちろん環境としてはまったく異なるが、たとえ特養の入居者であっても、在宅の人が地域環境をさまざまに選択し利用しながら生活しているその生活の質自体が保証されるべきではないだろうか、と考えるようになった。その後、東京大学から早稲田大学人間科学部の環境心理学の教室に移るようになった。もともと建築計画の分野は環境心理学と接点を多く持つところであるが、実際に理系から文系へと異なる世界に足を踏み入れることは、異なる視点に触れる機会を多く得ることに役立つものであった。そして、居住施設と言えども、物理的・心理的な意味から入居者の生活の質を支えるものとして、その環境を捉えていくべきだという考えは強められることになった。

そういうわけで本論文は、特養を対象にした他の多くの論文、入居者の自立を促す設備・環境、入居者に対するケアのあり方、入居者の生活上のニーズの把握、といったテーマを明確にとりあげた論文とはやや異なる性格のものになったのではないかと思っている。

そもそも建築計画研究室の中で目標を失い次いでいた筆者に高齢者というテーマを与えてくださったのは、東京大学工学部の高橋肇志先生である。人間と環境との相互浸透関係、環境移行の視点など、本論文の非常に重要な概念の多くは、高橋先生より教えていただいたものである。そして論文審査の主査としてさまざまな角度からご指導していただいた。本論文がこのような形を成すことができたのも、第一に高橋先生のおかげである。

東北大学工学部の外山義先生とは、筆者が高齢者問題に足を踏み込んだときからご指導いただいております。現在までこのテーマを続けてこれたのは外山先生に多くを負っている。本論文で全国でも先駆的な個室型の特養を対象として開所時から継続的に調査できたのも実は外山先生のおかげであり、また、ともに調査に赴き常に高齢者の方々から学びを続けられている姿からは、いつもながら本当に多くのものを学ばせて

いただいている。

富山県宇奈月町での調査を続けてこられた背景には、何度となく調査をともにした東京大学を中心とした研究グループの方々がいる。とくに名古屋大学工学部の山下哲郎先生には、調査時のさまざまな思い出とともに数多くの有益な助言をいただいた。そして研究グループの国立医療・病院管理研究所研究員の古賀紀江さん（当時）、東京大学大学院の石井敏さん、西野達也さん（当時）、清水建設の柿沢英之さん、横浜国立大学の井上由起子さんにも大変お世話になった。これらの方々との楽しくしかも有益な調査行がなければ、これだけの質量ともに充実した調査は続けられなかっただろう。

筆者が東京大学より早稲田大学に移ったときにお世話になったのが、山本多喜司先生である。直接ご指導いただいたのは1年間と比較的短い時間であったが、その間に人間・環境関係の捉え方を非常に幅広い視野から教えていただいた。本論文に物理的な視点に関らない環境の捉え方に成功した面があるとすれば、それは山本先生のおかげである。

東京大学の長澤先生・香山先生・藤井先生・岸田先生には、論文審査に携わっていただき、建築的な側面をややもすると解釈してしまいがちな本論文に対し、多方面から適切なご批判・ご助言をいただいた。

そして、調査対象施設においてずいぶんとご迷惑をかけ続けた職員の方々と、何より部屋を訪れては何度となくインタビューに答えていただいた入居者の方々には、本当に感謝の言葉もないほどである。いつまでもお元気でいていただけることを願わずにはいられない。

入居者の方々の長年の人生経験から生み出される言葉はまさに宝の山であり、本論文では、言わば宝の地図のようなものを作ろうと試みた。しかし実際には山の表面だけを通りいっぺんに紹介したすぎなかったのではないだろうかという懸念もつきまとっている。その表面をかき分けていけばまだまだ多くの宝があり、それを探し出し見出していくことこそが、入居者の方々の生活の質をすく上げていくことに繋がるとは思っている。その意味では研究はまだ始まったばかりであり、やるべきことは非常に多く残っていると実感せざるを得ない。

最後に私事で恐縮だが、筆者の論文作成の時期にあたって、育児で非常に大変な時期でありながら細かく環境を整えてくれた妻・育子と娘・咲也子に感謝する。

1997年3月

## 資料

---

- (資料1) 各調査時における入居者の心身状況
- (資料2) 各調査時における入居者の部屋の配置
- (資料3) 入居者個別データ

(資料1) 各調査時における入居者の心身状況

94年11月のADLおよび痴呆程度

痴呆程度の番号は、

1:クリアー、

2:ややクリアーでない、

3:軽度痴呆、4:重度痴呆

	ADL-Katz								計	
	A	B	C	D	E	F	G	O		
9411										
痴呆	1	0	1	0	1	0	0	1	0	3
	2	0	4	1	0	1	0	0	0	6
	3	0	0	4	2	2	3	1	1	13
	4	0	1	1	1	1	5	6	0	15
計	0	6	6	4	4	8	8	1	37	

95年8月のADLおよび痴呆程度

Katzスケール及びBergerスケール

	ADL-Katz								計	
	A	B	C	D	E	F	G	O		
9508										
痴呆 Berger	1	5	0	0	0	0	0	0	0	5
	2	3	2	2	2	0	1	1	0	11
	3	3	3	1	0	0	0	0	0	7
	4	1	0	2	0	1	0	2	1	7
	5	0	0	0	0	4	6	5	2	17
	6	0	0	0	0	0	0	4	0	4
計	12	5	5	2	5	7	12	3	51	

96年6月のADLおよび痴呆程度

Katzスケール及びBergerスケール

	ADL-Katz								計	
	A	B	C	D	E	F	G	O		
9606										
痴呆 Berger	1	14	1	0	0	1	1	0	0	17
	2	3	0	1	0	0	1	0	0	5
	3	1	1	0	0	4	3	1	0	10
	4	1	0	0	0	2	2	6	0	11
	5	0	0	0	0	1	3	1	0	5
	6	0	0	0	0	0	0	2	0	2
計	19	2	1	0	8	10	10	0	50	

96年2月のADLおよび痴呆程度

Katzスケール及びBergerスケール

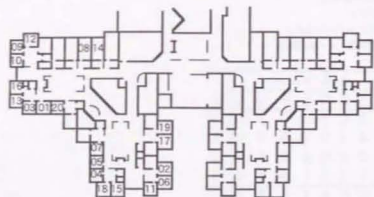
	ADL-Katz								計	
	A	B	C	D	E	F	G	O		
9602										
痴呆 Berger	1	7	1	0	0	0	0	0	0	8
	2	8	2	3	0	0	2	0	0	15
	3	0	1	0	0	1	1	0	1	4
	4	0	0	0	0	1	8	1	1	11
	5	0	0	0	0	2	3	4	1	10
	6	0	0	0	0	0	0	2	0	2
計	15	4	3	0	4	14	7	3	50	

96年10月のADLおよび痴呆程度

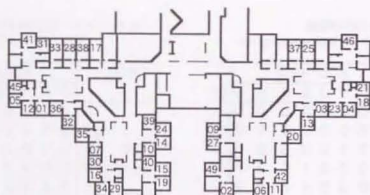
Katzスケール及びBergerスケール

	ADL-Katz								計	
	A	B	C	D	E	F	G	O		
9610										
痴呆 Berger	1	10	1	2	0	1	1	0	0	15
	2	3	0	0	0	0	1	0	0	4
	3	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	4	1	2	0	0	1	4	1	1	10
	5	0	0	0	0	1	2	11	1	15
	6	0	0	0	0	0	0	4	0	4
計	15	3	2	0	3	8	16	2	49	

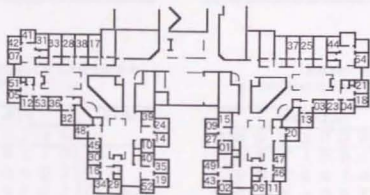
(資料2) 各調査時における入居者の部屋の配置



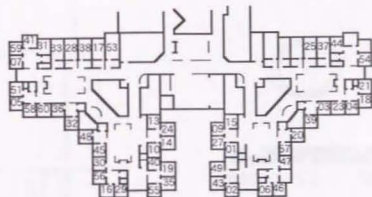
94年8月の部屋割り



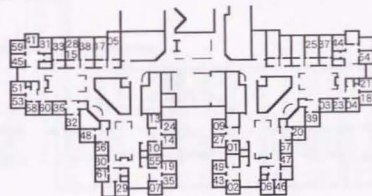
94年11月の部屋割り



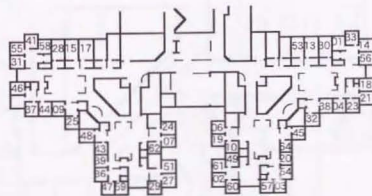
95年3月の部屋割り



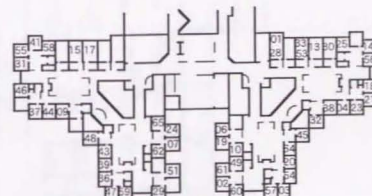
95年8月の部屋割り



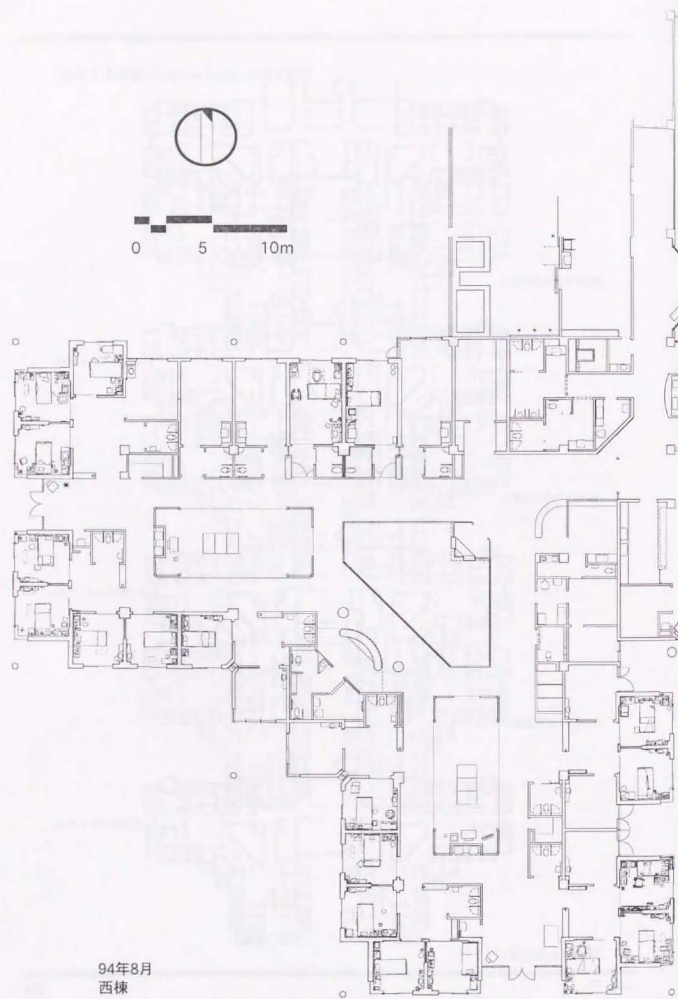
96年2月の部屋割り



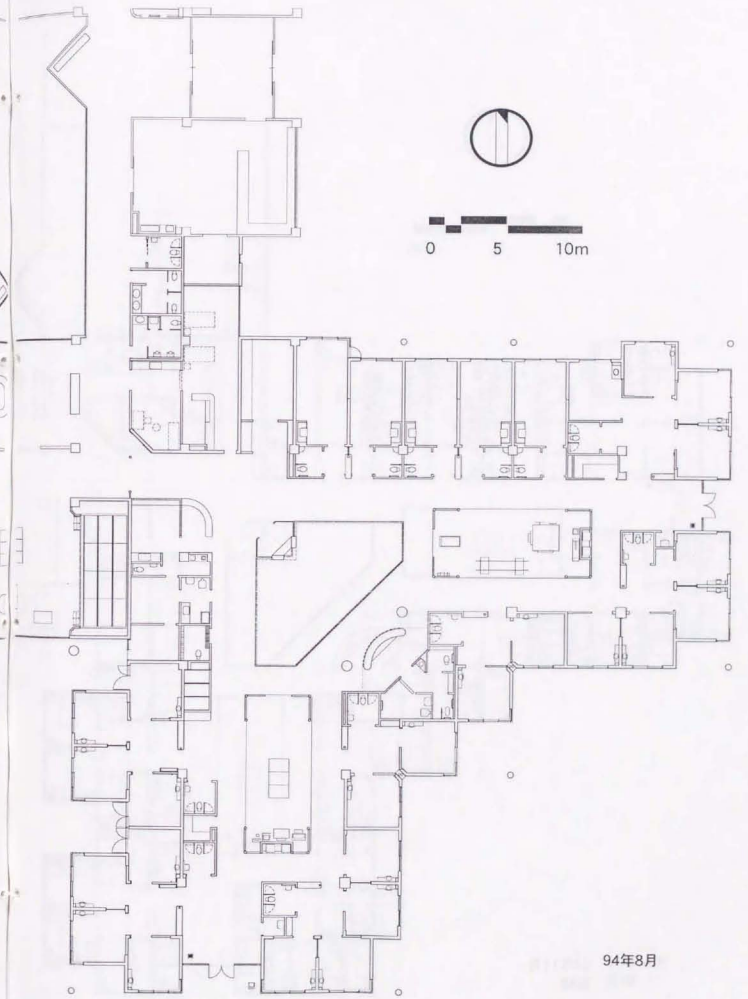
96年6月の部屋割り



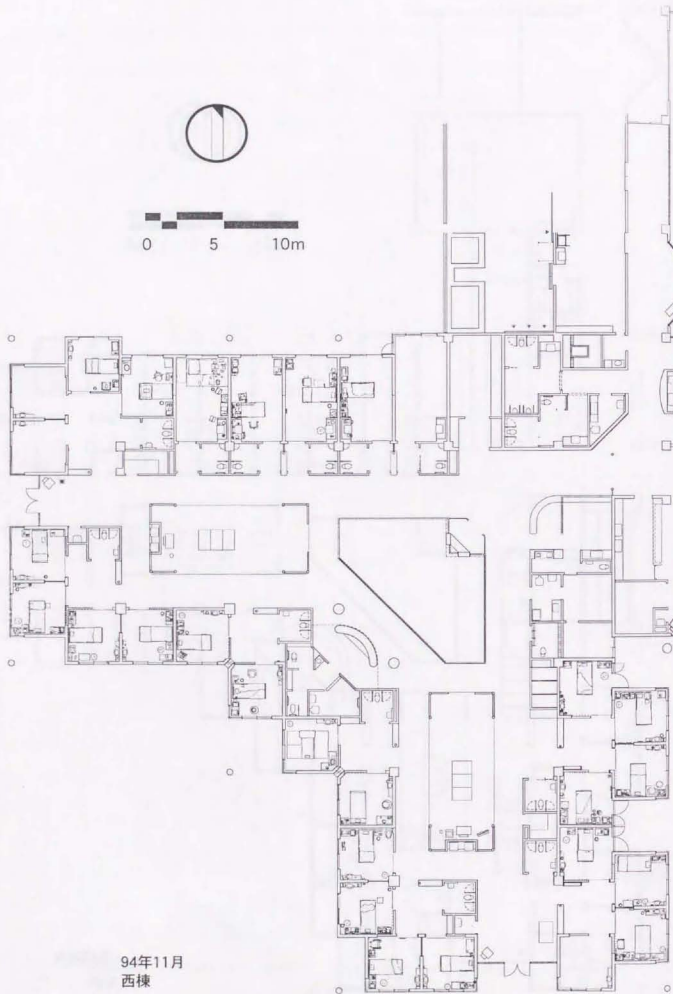
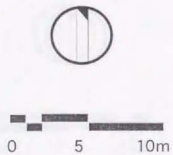
96年10月の部屋割り



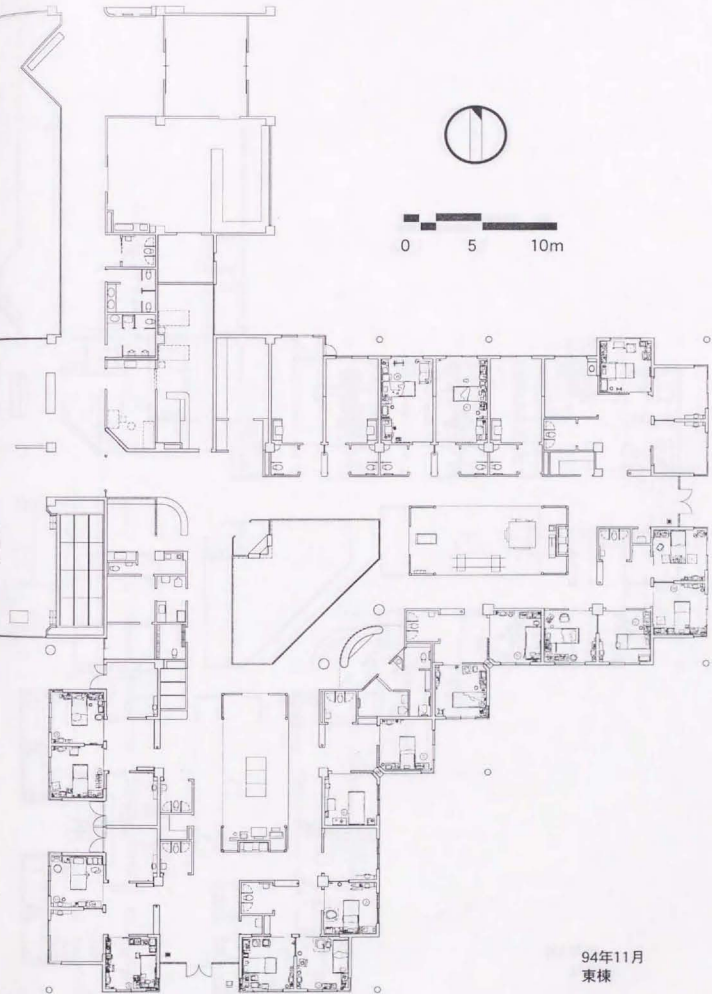
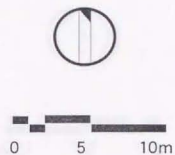
94年8月  
西棟



94年8月

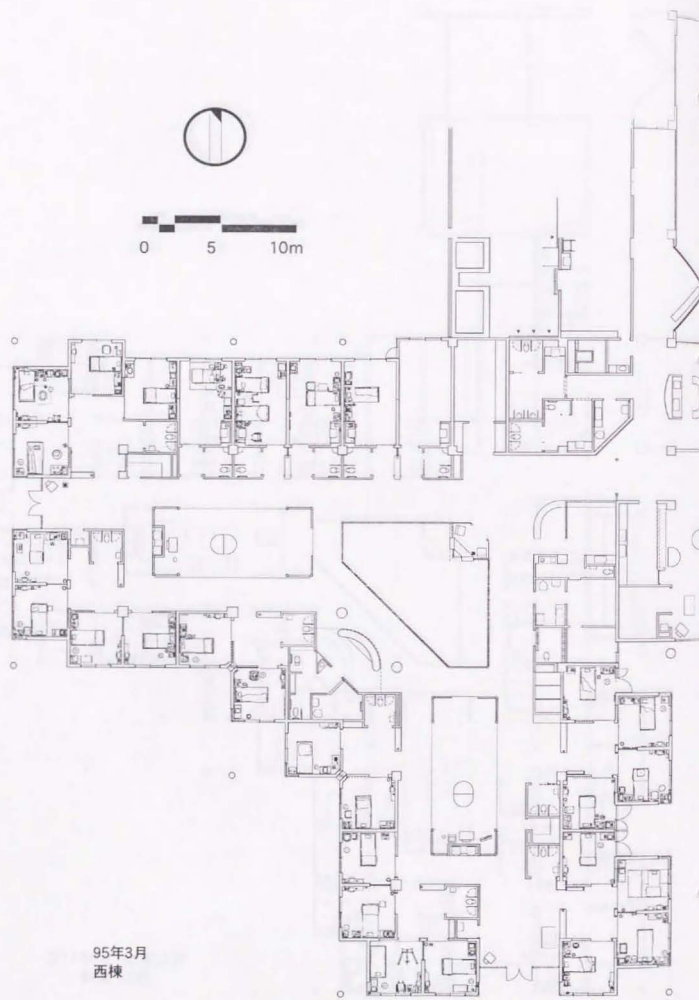


94年11月  
西棟

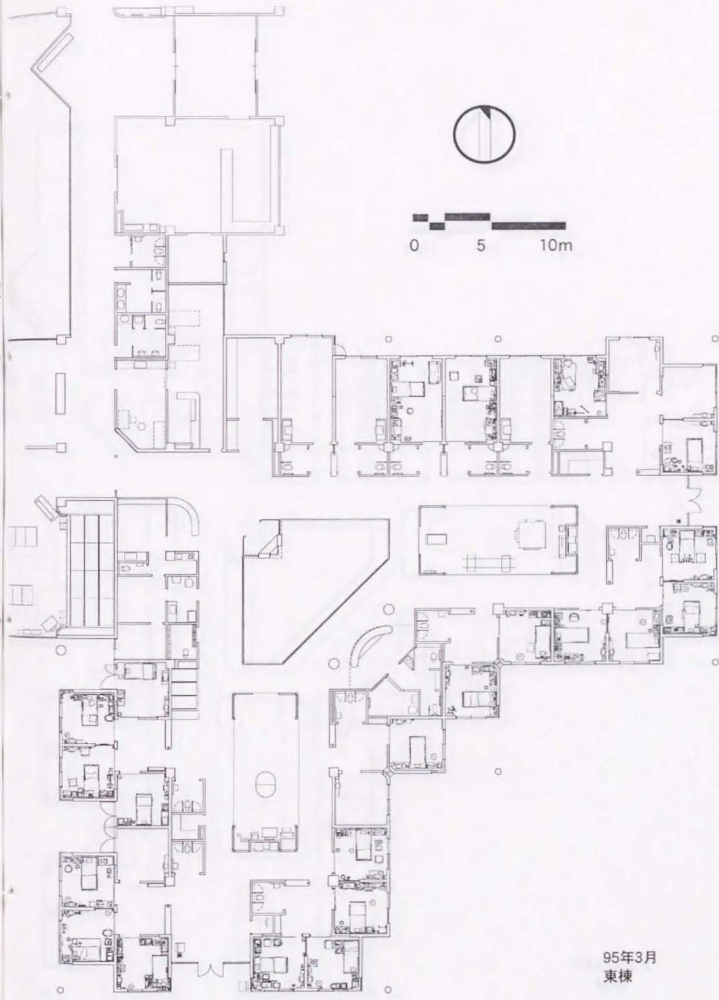


94年11月  
東棟

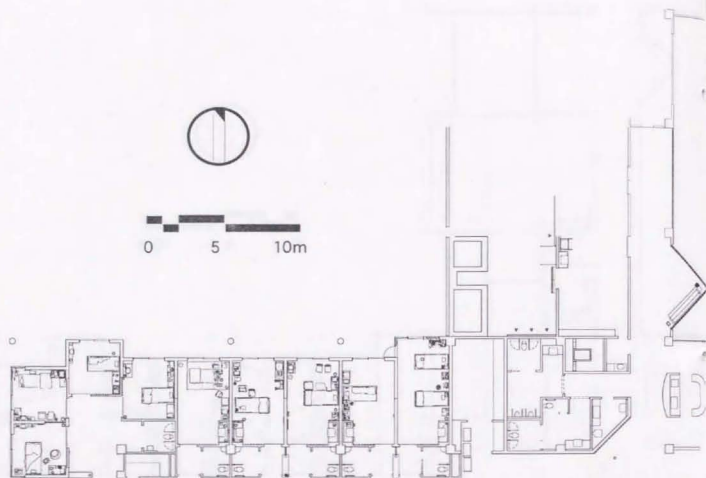




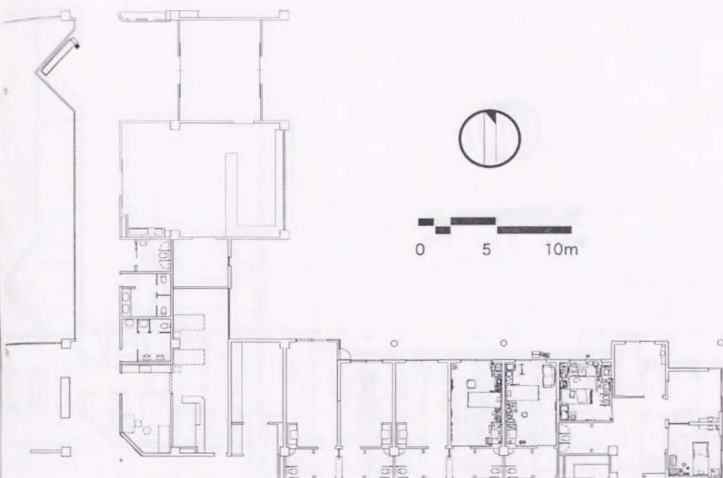
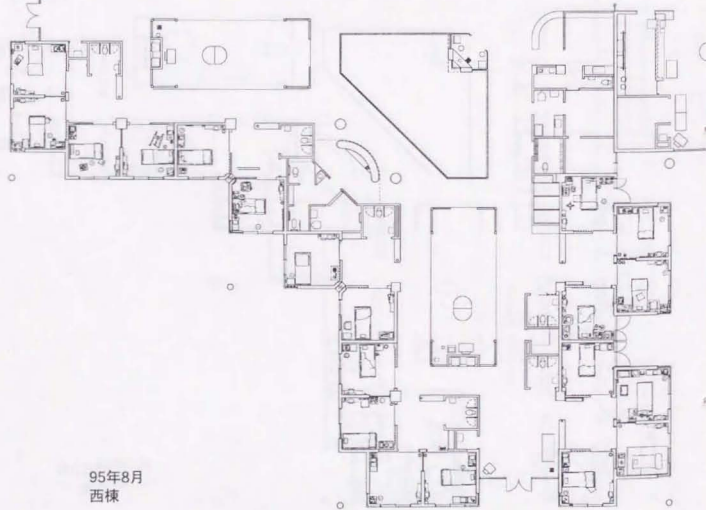
95年3月  
西棟



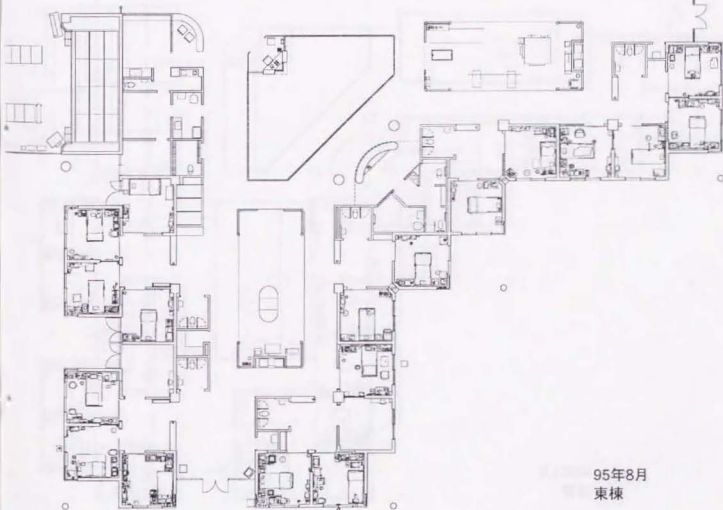
95年3月  
東棟

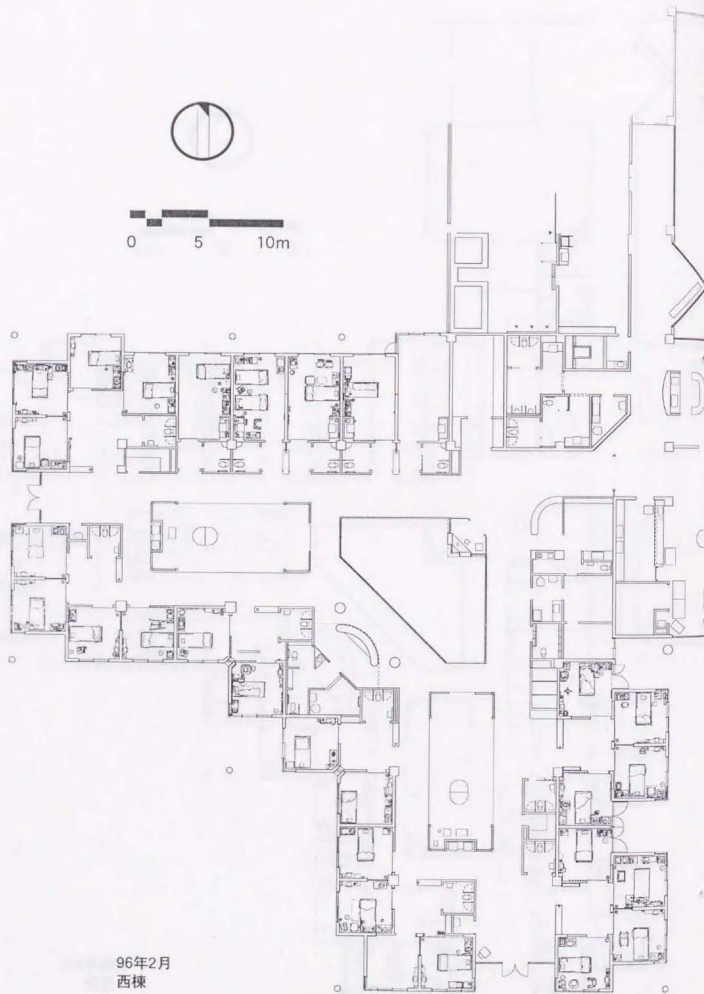


95年8月  
西棟

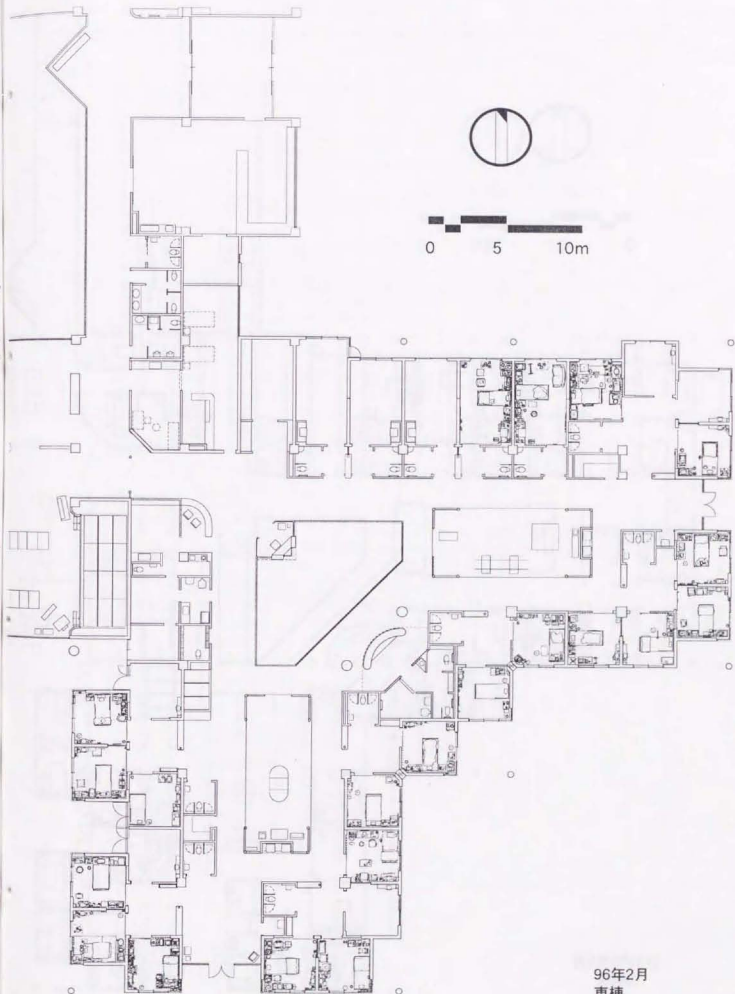


95年8月  
東棟

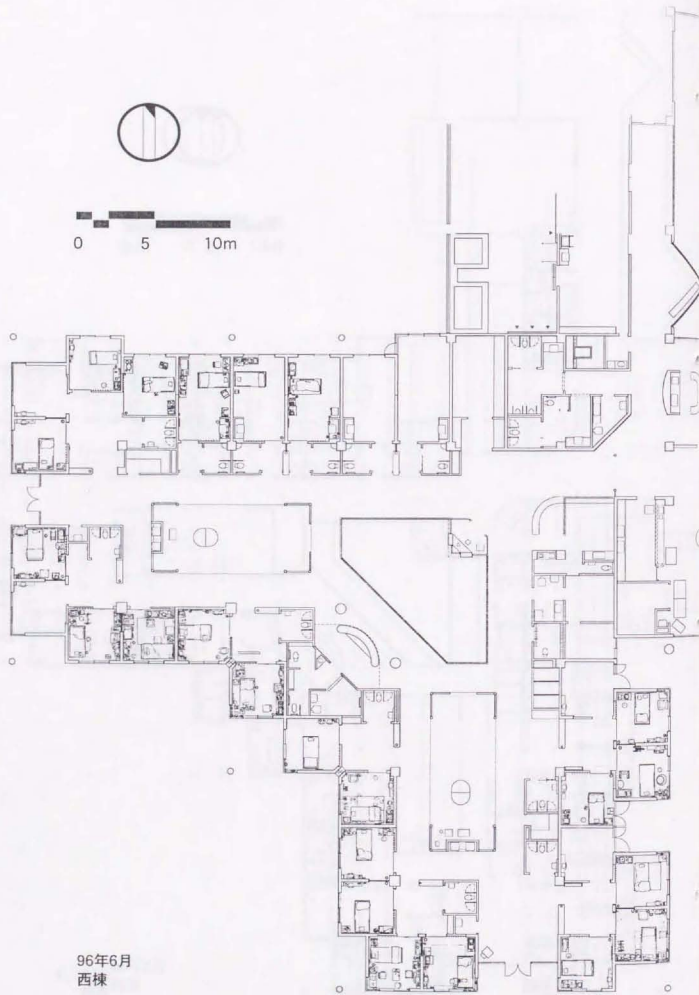




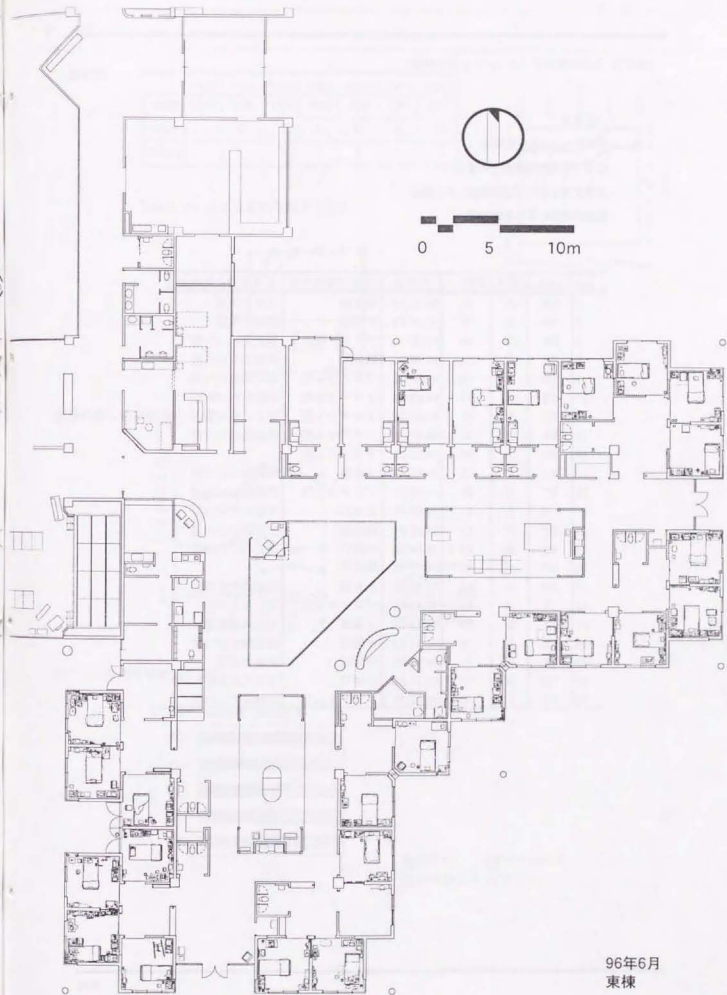
96年2月  
西棟



96年2月  
東棟



96年6月  
西棟



96年6月  
東棟

(資料3) 入居者個別データ (ヒアリング調査)

- ・心身状況
- ・家具持ち込み状況の変化
- ・zoneごと滞在時間割合の変化
- ・共用空間における場の形成とその過程
- ・居室の環境形成とその過程

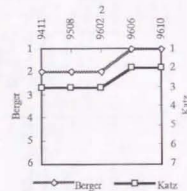
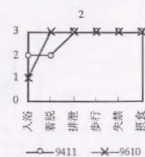
No.	Initial	性別	年齢	入所日	居室の環境形成	施設空間の環境形成
2	SN	女	81	94.07.01	主体型	自室充実型
3	TK	女	74	94.07.01	中間型	自室充実型
4	HK	女	84	94.07.01	プログラム型	閉鎖的コミュニティ型
6	SS	女	86	94.07.01	関係型	開放的コミュニティ型
9	YH	女	90	94.07.01	プログラム型	開放的コミュニティ型
11	SR	女	87	94.07.01	プログラム型	開放的コミュニティ型
13	YS	女	83	94.07.01	プログラム型	閉じこもり型
18	TF	女	77	94.07.01	プログラム型	閉鎖的コミュニティ型
19	YK	男	64	94.07.01	プログラム型	プログラム型
20	YA	女	75	94.08.01	主体型	開放的コミュニティ型
21	IC	女	88	94.09.01	プログラム型	閉鎖的コミュニティ型
23	NH	女	86	94.09.01	主体型	閉鎖的コミュニティ型
25	UY	女	85	94.09.01	関係型	閉鎖的コミュニティ型
27	KI	女	85	94.09.01	中間型	開放的コミュニティ型
32	UF	女	92	94.10.01	関係型	プログラム型
37	TN	女	80	94.10.01	主体型	閉鎖的コミュニティ型
43	TT	女	87	94.11.01	プログラム型	閉じこもり型
44	NI	女	79	94.11.01	主体型	自室外活動型
46	FI	女	75	94.11.01	中間型	開放的コミュニティ型
47	AK	男	71	94.11.01	中間型	自室充実型
49	TM	女	71	94.11.01	中間型	自室外活動型
57	TY	女	89	95.05.01	プログラム型	開放的コミュニティ型

2 SN

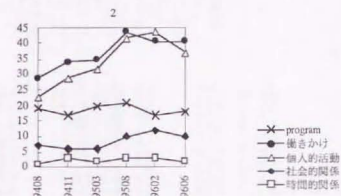
心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W06	E08	E08	E08	E08	E07	E07
Katz		C		C	C	B	B
Berger		2		2	2	1	1

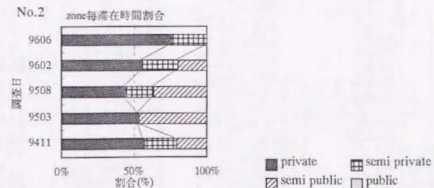
Katzスケールによる動作能力の変化



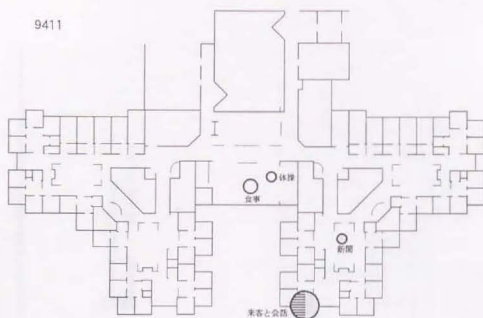
家具の持ち込み状況の変化



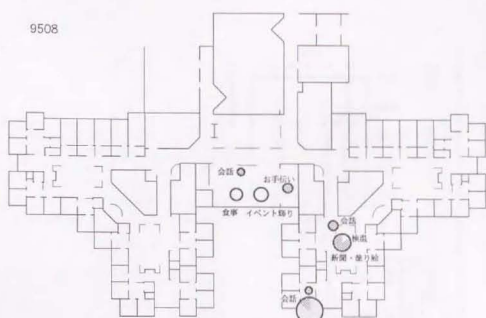
zoneごと滞在時間割合の変化



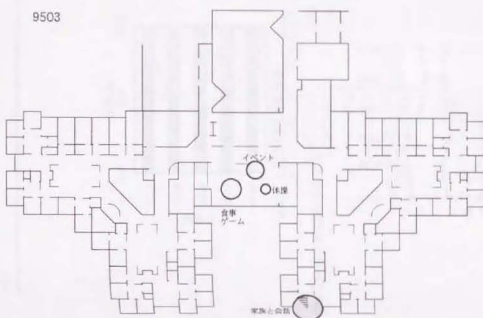
9411



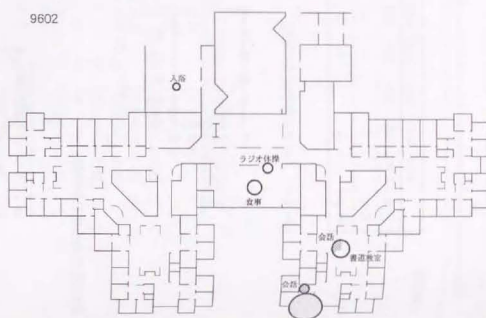
9508



9503



9602



## 2 SN (81歳 女性)

**心身状況** 痴呆はほとんどない。体は右半身不随で、車椅子を使用している。字を書くときも左手で書いている。入浴以外は介助は必要ない。耳がかなり遠く補聴器を使っているが、それでも大声を張り上げないと聞き取れない。

**これまでの生活** 音読地区の出身。自宅では、義理の子供たちも入居する。親戚と世間との関係が難しく、40歳までから宗教へ。「宗教には、苦しいことが多く入らない。」あまり昔のことを語りたがらない。ここに入る前は、他の特養に入っていた。

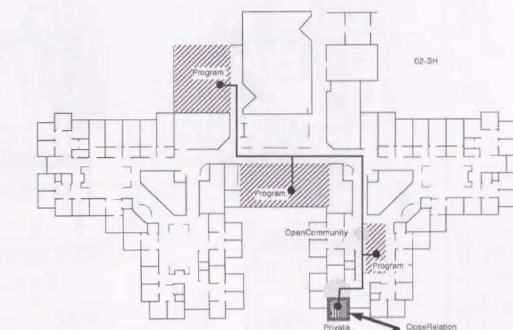
**自分のすること** 共用空間に出てくることもあるが、それよりも自宅で過ごす時間が多し。俳句を趣味にしており、自分で俳句を作ったり、新聞の俳句を書きついたり、仏教の本を読んだり、にじく過ごしている。「時間がもったいなくて、だから部屋に籠まって語をする時間もない。」俳句は若い始めて4年であるが、この家々となっており、「数は増えなくても、俳句をしているのが楽しい」と。部屋には自分の作品を整理してもらって飾っている。俳句の句集に収録して載せることもある。施設で句会を開くときには参加するが、参加者はそんなに多くない。俳句の先生や友人が直接部屋を訪ねてきて、俳句教室のようにすることもある。居客の共用空間では、新聞を読んだり、時にはテレビを見ることもあるが、昔と見たいものが違うので、テレビを見ることは少ない。外からの郵便や施設の手紙、朝の体操やゲーム、俳句教室、書道教室など施設側のプログラムには積極的に参加している。

**社会的関係** 居客の共用空間に出ていったときには居合わせた人と話をする。ただ何となく集まると言うことばかりなく、雑談ややつどで人が集まったときや、出かけついでに居合わせた人に声をかけるということが多い。俳句や宗教などお互いやってる人とは（かなり限られた人だけであるが）、自家に用いたり相手の名前を覚えて語ることがある。趣味が一緒でいて、手紙のやりとりも盛んにしており、帽子を欲しいと言ったり子供たちかかやももらっている。縁の原は戸は開けっ放し。「みんな年寄りだから、見えてもかまわない。」窓の目隠しは、「本当は閉めてはいいんですけど、一晩に隣の人が部屋を覗くので嫌なので。施設の人が覗いてきて見えるようにはは開けてあります。」

**時間的関係** 過去の思い出の音や昔から使っているような家具などは、あまり持ち込まれていない。俳句の資料やノートなど、今現在の自分の活動に関する物、茶碗からの手紙・友達にもらった物・俳句の先生にもらったカレンダーなど、現在の社会的関係に関する物など、今現在から将来へとつながる時間の中で生活を切り上げている。

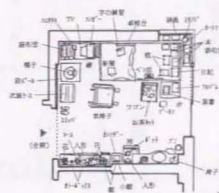
**自宅** 音読地区の出身。

**施設に対する評価** 趣味の俳句をする上で、施設が個室であることは、他の人の生活に左右されることがないという点で、肯定的に捉えられているようである。「俳句のヒントになるのでニュースが見たいが、みんな見ながら、外では見ない」「夜は眠れなくても、俳句をしているので眠い」と他の人に行動を合わせざるを得ない時間を含めざるを得なく、自分らしい活動ができる空間となっている。自家におけるそのような自分だけの世界の広がりに対して、共用空間で行われる施設側のプログラムにもなるべく積極的に参加するようになっているが、ここには「わざわざききに来てはならない」と思っている。物理的にも精神的にも、公と私の間・時間を使い分けている。という意識が働いている。



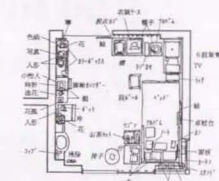
Zone	Where	What	Who	When	How
Private	自室	俳句創作・練習	一人	いつでも、時間がもったいなくて	personal group program
S-Pr	居間	俳句の会	俳句仲間・先生	月1回	居合わせたとき
	広間・1F	会話 雑談 書道教室	雑談の人 書道の人 比較的死気な人	9:30ころ 不定期	program program program
S-Pub	食堂	洗濯物あみ	比較的元気な人	10:30ころ	program
		体操	全員	10:00	program
		食事	全員	7:30, 12:00, 17:00	program
		イベント	全員	不定期	program

940808



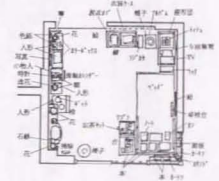
W07

941101



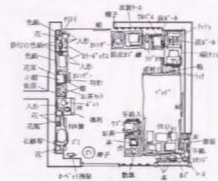
E08

950303



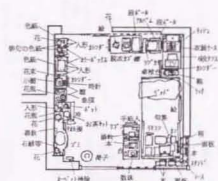
E08

950801



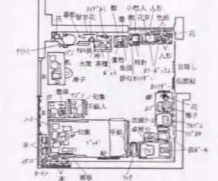
E08

960214



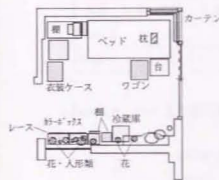
E08

960625

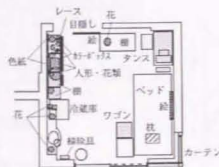


E07

940808 W06



960214 E08



## ■居室環境の形成

様々な収納を待ち込み、窓にはカーテンをつけ、また居室の採光もリリリがてらになる。居室の環境をかなり自分でコントロールしている。入り口には自分で多くの人物や色紙、花束などで飾り付け、自分の部屋の入り口がリリリを出すと共に、他人に対してはディスプレイとなっている。これらの人物や色紙は次第に増加しているばかりでなく、客間に呼ばれて人影を置いてみたり、俳句の色紙を貼ってみたりと、空想への積極的な動きかけであることと、社会とのリリリがてらなつながりを感じている。家具の配置も自分で決めており、ベッドを端に寄せ、ベッドサイドには読書机を置いておく。カラーボックスはディスプレイにも役立つような入り口際に置くこと、自分の生活スタイルに合わせてセッティングを工夫している。

## ■自己の選択

TV・ラジオ・冷蔵庫・ポット・お茶のセット等が待ち込まれ、居室の機能が高められている。雑居のスケジュールとは別に自分の好きなときにお茶を飲んだり、好きなテレビを見たり（実際には見ず見たり）とすることができるようになっている。部屋の掃除や自分の好きなお茶を入れることなども、自分でできることは自分でやっている。お茶のための椅子も子供用に用意してもらった。これらのコントロールの取組を経て、もともと積極的に行っているのが、趣味の俳句活動である。俳句は好きなものを自分で生かしている園としての活動であり、なるべく多くの時間を俳句に費やそうとしている。枕元には俳句関係の本や雑誌、知恵などが並び、俳句をすぐに書き留めるためのノートや消し、筆記用具なども揃えており、ベッド上が俳句の活動場所を形成している。自分で作った俳句を色紙にしてもらって飾っており、活動している自分を確認できるものともなっている。俳句を採集して掲載された雑誌などは、まさに自分が積極的、しかもそれが社会に認められたという証として、自己存在の確認となっている。

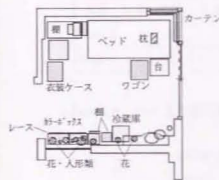
## ■社会的関係形成

入り口の窓には目隠し布が貼られるようになり、自分自身の眼場所としての居室が他者の視線に侵入されることを拒否している。部屋には人影が映り、外からは家屋の顔、俳句関係の先生や友人など、また親類の友人にも顔が見えなくなる。それらの人にお茶を入れたり、冷蔵庫の中身でもてなすこともある。また、入り口際の飾り付けが得意だった他の目の目を意識したともなっている。

## ■関係性の表示

俳句関係の色紙や消しなどは、自分が強固に思いこもっておらず、外部の俳句の人たちとのつながりがあることを示すものともなっている。俳句の先生からカラーペンも贈られており、ワザの腕にかかっているのは、縁のつづけてくれた手紙入れであり、そこには家屋からのつながりを確認できるものとなっている。家長は昔から使っているものというよりもここに来てから贈られたものがほとんどで、家長とのつながりや示すものはあまり見られない。そんな中で贈られた手紙入れが他者の思いこもった贈り物ともなっているのかもしれない。

940808 W06



960214 E08



## ■自己の選択

TV・ラジオ・冷蔵庫・ポット・お茶のセット等が待ち込まれ、居室の機能が高められている。雑居のスケジュールとは別に自分の好きなときにお茶を飲んだり、好きなテレビを見たり（実際には見ず見たり）とすることができるようになっている。部屋の掃除や自分の好きなお茶を入れることなども、自分でできることは自分でやっている。お茶のための椅子も子供用に用意してもらった。これらのコントロールの取組を経て、もともと積極的に行っているのが、趣味の俳句活動である。俳句は好きなものを自分で生かしている園としての活動であり、なるべく多くの時間を俳句に費やそうとしている。枕元には俳句関係の本や雑誌、知恵などが並び、俳句をすぐに書き留めるためのノートや消し、筆記用具なども揃えており、ベッド上が俳句の活動場所を形成している。自分で作った俳句を色紙にしてもらって飾っており、活動している自分を確認できるものともなっている。俳句を採集して掲載された雑誌などは、まさに自分が積極的、しかもそれが社会に認められたという証として、自己存在の確認となっている。

## ■自己の選択

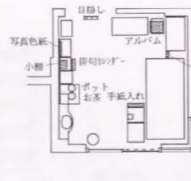
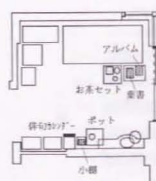
TV・ラジオ・冷蔵庫・ポット・お茶のセット等が待ち込まれ、居室の機能が高められている。雑居のスケジュールとは別に自分の好きなときにお茶を飲んだり、好きなテレビを見たり（実際には見ず見たり）とすることができるようになっている。部屋の掃除や自分の好きなお茶を入れることなども、自分でできることは自分でやっている。お茶のための椅子も子供用に用意してもらった。これらのコントロールの取組を経て、もともと積極的に行っているのが、趣味の俳句活動である。俳句は好きなものを自分で生かしている園としての活動であり、なるべく多くの時間を俳句に費やそうとしている。枕元には俳句関係の本や雑誌、知恵などが並び、俳句をすぐに書き留めるためのノートや消し、筆記用具なども揃えており、ベッド上が俳句の活動場所を形成している。自分で作った俳句を色紙にしてもらって飾っており、活動している自分を確認できるものともなっている。俳句を採集して掲載された雑誌などは、まさに自分が積極的、しかもそれが社会に認められたという証として、自己存在の確認となっている。

## ■社会的関係形成

入り口の窓には目隠し布が貼られるようになり、自分自身の眼場所としての居室が他者の視線に侵入されることを拒否している。部屋には人影が映り、外からは家屋の顔、俳句関係の先生や友人など、また親類の友人にも顔が見えなくなる。それらの人にお茶を入れたり、冷蔵庫の中身でもてなすこともある。また、入り口際の飾り付けが得意だった他の目の目を意識したともなっている。

## ■関係性の表示

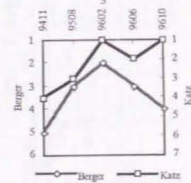
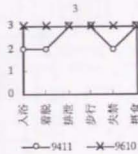
俳句関係の色紙や消しなどは、自分が強固に思いこもっておらず、外部の俳句の人たちとのつながりがあることを示すものともなっている。俳句の先生からカラーペンも贈られており、ワザの腕にかかっているのは、縁のつづけてくれた手紙入れであり、そこには家屋からのつながりを確認できるものとなっている。家長は昔から使っているものというよりもここに来てから贈られたものがほとんどで、家長とのつながりや示すものはあまり見られない。そんな中で贈られた手紙入れが他者の思いこもった贈り物ともなっているのかもしれない。



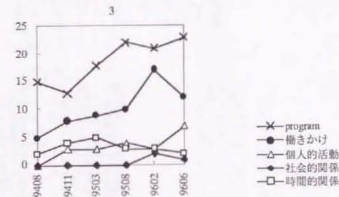
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W18	E16	E16	E16	E16	E10	E10
Katz		D		C	A	B	A
Berger		5		3	2	3	4

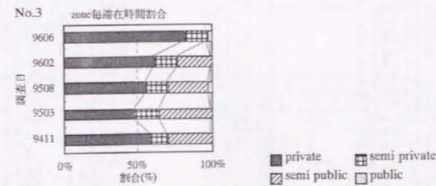
Katzスケールによる動作能力の変化



## 家具の持ち込み状況の変化

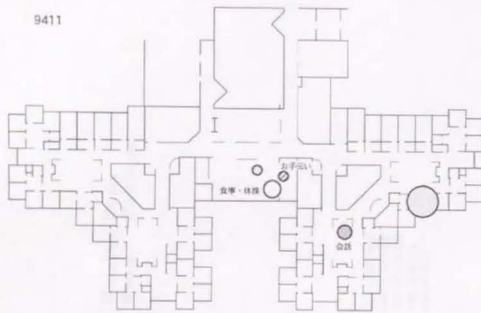


## zoneごと滞在時間割合の変化

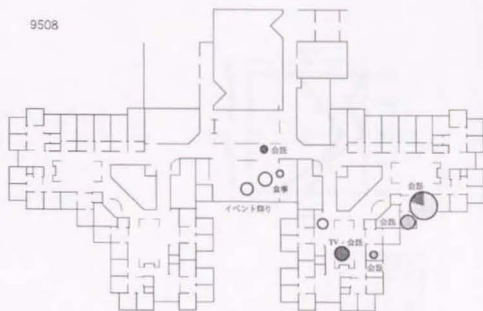




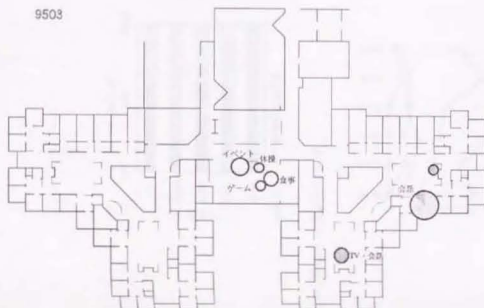
9411



9508



9503



9602



## 3 TK (74歳女性)

**心身状況** 軽度痴呆。はじめは自分のいる状況や人目の時期などについてかなり混乱が見られたが、施設で生活しているうちにかなり改善された。身体的にはほとんど自立している。足が痛いと言っているが、杖などを使用せず。

**これまでの生活** 自宅は母見地区。「お家は広かったよー。田舎も広いし」「昔は田舎いーばい。帰ってただけで、いままじ立派な二軒家あるくらい。私もちゃんなんだから。もうだめ。」ここに入る前は自宅近くの別の特養に居かっていた。「こっちは平穏けど、向こうは騒音でくらら。向こうにいたときは4人部屋。」その時の友達が今でも向こうには4人いる。

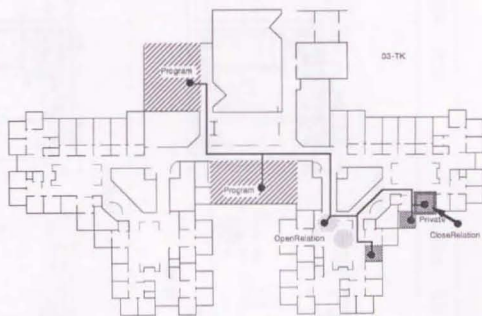
**自分のすること** 書院は無難にいることの方が多く、部屋ではTVを見たり、昔のアルバムを見たり、近くの部屋の人の顔が写ったお茶を飲みしりして過ごしている。時には共用空間の方に行ってTVを見ることもあるが、外は行かない。あんまり好きじゃないので、あまり長時間のことはない。居室の方から自宅に戻るときは大抵共用空間の重みのことかはいらない人、お茶を飲む。「自分の部屋はかっこよくなく、こいつらとこくくも気取るわー。」隣に誰か来たれば会話することもあるが、テーブルの重まりに積極的に加わることはない。朝の体操やゲーム、施設の行事など、施設の提供するプログラムには一通り参加する。

**社会的関係** はじめ隣の部屋にいた人は隣の村の人でときどき様子を見に行っていた。「(あちらから)いーっしょいと言っているが、なかなかいーっしょいな。病院でいーっしょいな。幸だし。」それから入居してきたお茶の人と仲良く。よくいーっしょいな。これ後々について何があったか覚えてきた。こっちら行くこともあった。とお互いに想いをやり取り来たたりしている。ただ、誰とでも気がつきあうわけではなく、ほとんどの人とお茶を飲んでいるようだ。「あんまり仲良くしなさんなん。いーっしょいあつては、むだわー。彼が広くの自宅に居るが、広くてあまりない。「子ども何十人も飼まれているから。」

**時間的関係** 過去のアルバムや写真などを見て過ごすことが多く、過去とのつながりは強い。とくに入居初期では、自分の時間的状況が認識できなくて「なにがだか覚悟したときの気ななの。」と過去の時間の中で過ごしていたようだ。今でもアルバムを見たり思い出に浸ることは多く、「これ私。これお茶さん。これお茶。なつかしいねえ。お茶さん死んだとき私に似てたねえ。」

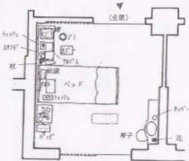
**自宅** 自宅にはお茶もいないが、今も残っている。「家はあつてだから。帰ってきてさーっと上がったとこここにあるよ。大きいうちなのよ。家には誰も居ませんよ。」

**施設に対する評価** 入居後4月の時点では「この施設」に来て1年くらい。入居後1年以上経った時点では、「ここはまだ3-4月の月しか経ってありません。冬はどうなんだろう。まだわかりません。」と、入居初期についてかなり混乱が見られた。ここに入る前のことはよく覚えていて、そこと比較した上で「入居前だと良いともない。向こうにいたときは人間。いーっしょいなを言うので、さっぱり人がくっついていねえ。」また、自宅と比較して「お家は広かったよー。こっちは狭いわ。建物なんか全部埋めてきた。」



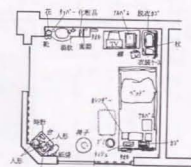
Zone	Where	What	Who	When	頻
Private	自室	思い出に残る 名画	一人	ふだん	present close
Private	他居室	話題・様子を見る	入居者TM 入居者YT	「よいっしょいな」と ときどき	頻子のような感じ close
S-PH	広間室	ちよと居る	一人、誰か	食事・体操の帰り道 9:30ころ	open program
S-PH	広間+TV	TV・会議 講義教室	家族の人 広間音痴の人 他特別入居者A	都合合わせたとき 不定期	open program
S-Pub	食堂	体操 食事	全員	10:00 7:30, 12:00, 17:00	program program
		イベント	全員	不定期	program

940808



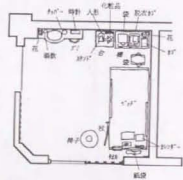
W18

950801



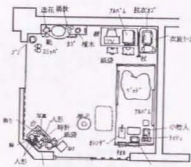
E16

941101



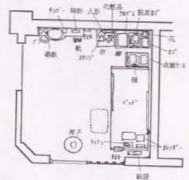
E16

960214



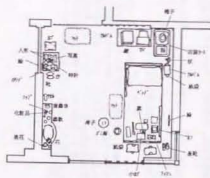
E16

950303



E16

960625

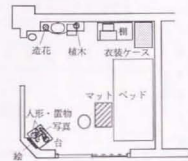


E10

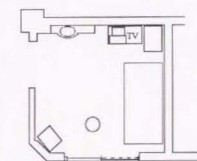
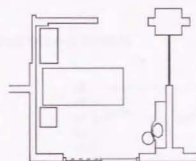
940808 W18



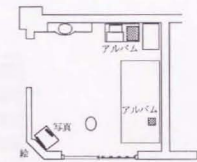
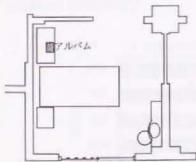
960214 E16



■居室の環境形成  
 入居当時は飾りが少しある程度でほとんど何の環境形成もなされていなかったが、次第に衣装ケースなどの収納が持ち込まれ、TVも持ち込まれ、また、家族の持って来た人形や花などが飾られるようになった。特に、いまだ入居してきてからの人形類は、床面の上にもちろん飾られており、自分の部屋であることの表示になっているとともに、家族とのつながりを示すものもなっている。家具の配置は、ベッドを端に寄せて部屋を広く使い、床雑居の状態に合わせて飾りなど、自分で決定している。



■自己の建設  
 入居当時は何もなかったが、TVが部屋に持ち込まれるようになり、自室好きな時間に好きな番組が見られるようになった。また、菓子箱が部屋に持ち込まれ、好きなときにちょっとした欲求を満たすことができる。居室で行う趣味活動などは特になし。



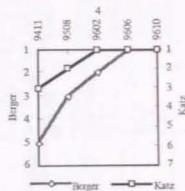
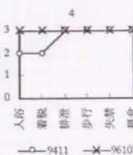
■社会的関係形成  
 居室の人が同じ村の出身で仲良くしており、よく顔見合に会う。そのときは本人はベッド上におり、訪問者が施設の見学に来る。

■関係性の表示  
 枕元にかつての家族の写真やアルバムなどを置き、ベッド上でそれらを見ながら過ごすことが多かった。入居当時は施設の関係者としてではなく、かつての家族とのつながりの中で自分を位置づけていたようである。その後は現在の家族の写真や名のついた絵も飾られるようになり、現在の社会関係の中で位置づけが明確になってきたと認められる。

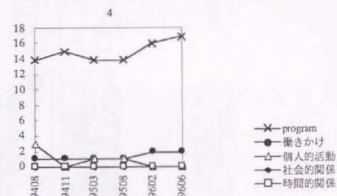
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W11	E18	E18	E18	E18	E17	E17
Katz		C		B	A	A	A
Berger		5		3	2	1	1

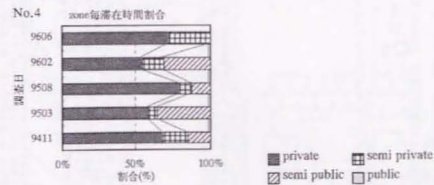
Katzスケールによる動作能力の変化



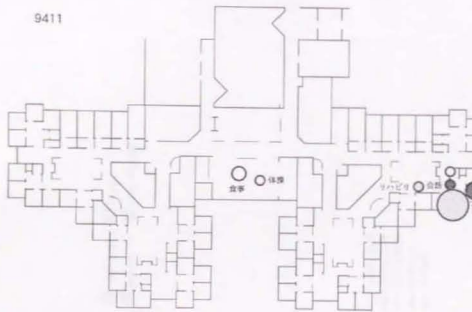
家具の持ち込み状況の変化



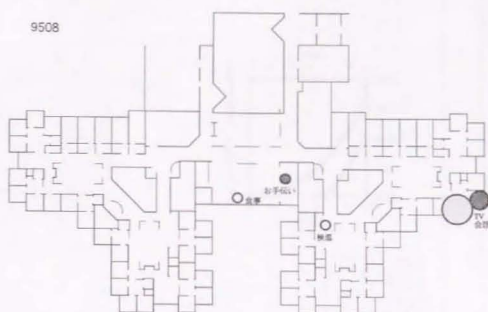
zoneごと滞在時間割合の変化



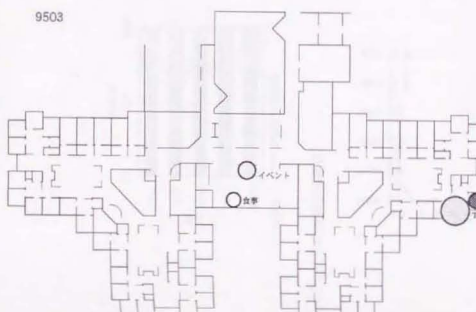
9411



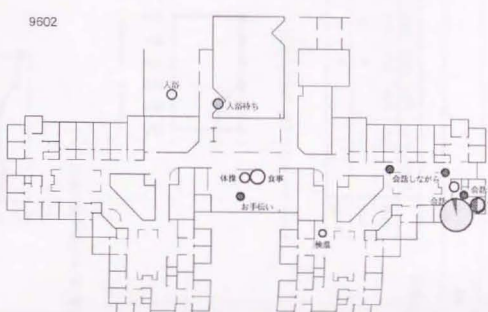
9508



9503



9602



## 4 HK (84歳女性)

**心身状況** 中度～軽度痴呆。はじめの頃は重症痴呆とみられていたが、改善に改善し、現在はやや痴呆が入っている程度にみられている。身体的にはほぼ介助なしで自立している。足が痛いので歩くときには杖をつけている。目が少し悪いほか、耳がかなり悪い。

**これまでの生活** 字彦月の出身で、家で農業をしていた。朝5時頃から農家で外出していた。若いときは婦人会などで活動していた。卒退てからは一人暮らし。自宅はまだ残っているが、お昼の時だけは行って閉け放して鍵を入れてやる。その後は地元の特産品に詳しい。

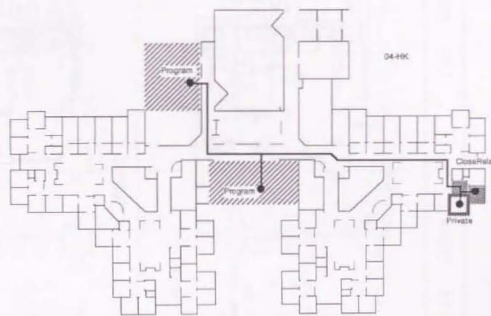
**自分のすること** 番組は自分の部屋にすることが多く、共用空間で過ごすことは少ない。たまにTVをみるくらい。施設のプログラムにはとやまらず参加しているが、それほど積極的ではない。「外で好きなところがない。運動のとかは使わない。洗濯ももしない。」仲のいい人と食堂などで洗濯物洗みのお手伝いなどをやるようになった。施設では留守をすることもなさっていることが多い。夕方時から7時まで、隣の人の部屋に行き、TVを見せてもらう。夜には日記を書きつけている。「自分でちよこら思い立って、去年から大学ノートに付けている。床には日記が落ちてくれない。」夜9時に寝る。朝は4時頃には目が覚める。

**社会的関係** 部屋の近い人たちと仲良くし人脈があり、食事の時や入浴の時など、互いに声掛け合って一緒に行くことが多い。話しながらいきてきて、部屋の前立ち出すこともある。隣の部屋の人は存在はいたときから気が近かった。昔から知っている。夜時から7時まで、毎晩TVを見せてもらっている。自分でTVを持っていないから、向こうから来ることは少ない。子供は大人なので、お昼だけでもあまり来ない。

**時間的關係** 居室には物がほとんどなく、過去の結びつきを示すものも、現在の活動や関係性を示すものも、何も残されていない。

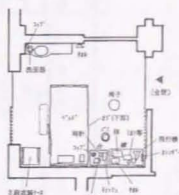
**自宅** 字彦月の出身で、家で農業をしていた。自宅はまだ残っているが、お昼の時だけは行って閉け放して鍵を入れてやる。

**施設に対する評価** 施設の中で、積極的に活動をしたり、人と交わったりということはほとんどなく、施設に対してよくにも要求も不満も聞かれない。それでも「これは、自分の家だな」と思う。



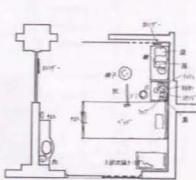
Zone	Where	What	Who	When	頻	
Private	自家	日記	一人	夜寝る前	personal	自分でちよこら思い
	他居室	TV	居室の人	毎日5-7時	case	TVを持っていない人
S-Pri	訪問	会話、一緒に移動	訪問看護の人	食事・排便などの行き来時 9:30-5	case	program
	広庭室	洗濯	東棟の人		program	外で好きなところ特に
S-Pub	食堂	食事	全員	10:00	program	
		食事	全員	7:30, 12:00, 17:00	program	
		イベント	全員	不定期	program	

940808



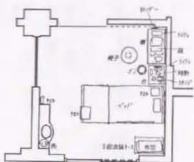
W12

950801



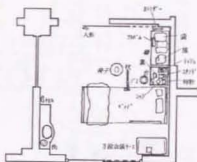
E18

941101



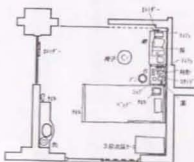
E18

960214



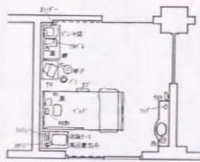
E18

950303



E18

960625

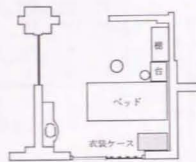


E17

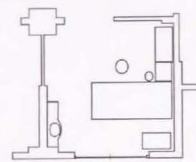
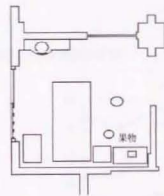
940808 W11



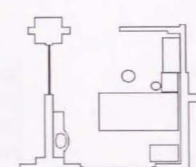
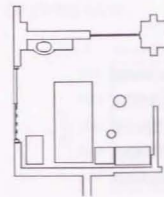
960214 E18



■居室の様態  
居室はかなり閑散としており、小物以外で持ち込まれたものは2段の衣装ケースのみである。衣類はビニール袋にはいったまま床の隙間の上に置かれている。その居室の様子は殆ど変わってもほとんど変化がない。



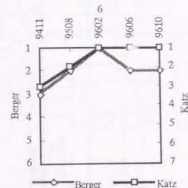
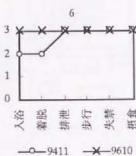
■自己の運具  
TV・ラジオはなく、お茶を持ち込むこともない。居室にいることが多いが、そのときはほとんどベッドに共用空間を置いて居て、半分だけ部屋から外を見ながら過ごしている。時にはお茶を淹れていることもある。TVは毎少時まで隣の人の部屋について見てもらっている。部屋での活動らしいことは、毎晩大学ノートに日記を付けていることである。ノートは床頭台に仕舞われている。



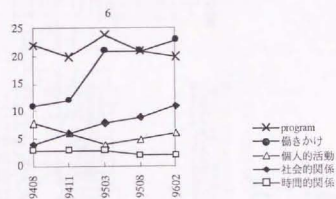
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W07	E09	E09	E09	E09	E02	E02
Katz		C		B	A	A	A
Berger		3		2	1	2	2

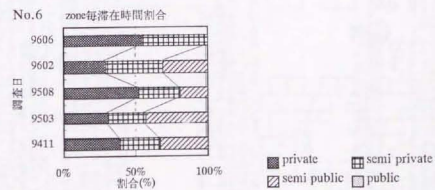
Katzスケールによる動作能力の変化



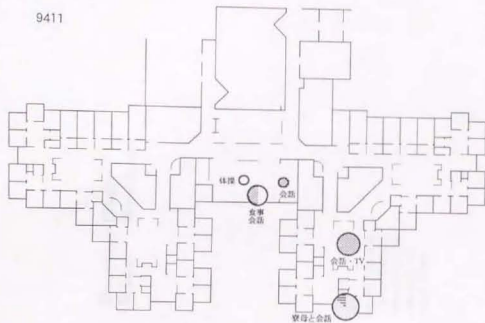
家具の持ち込み状況の変化



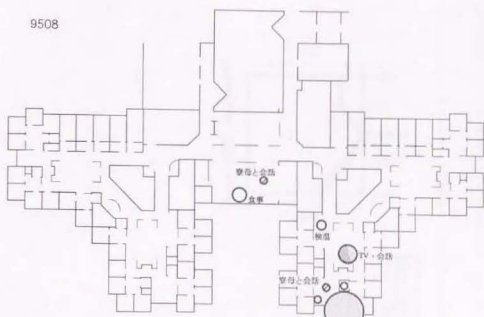
zoneごと滞在時間割合の変化



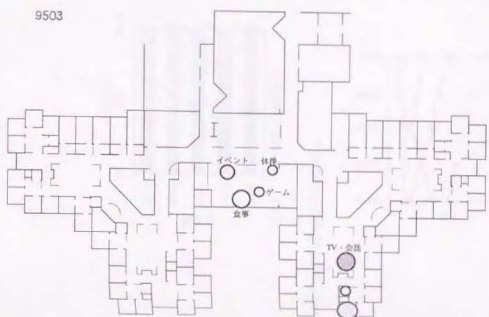
9411



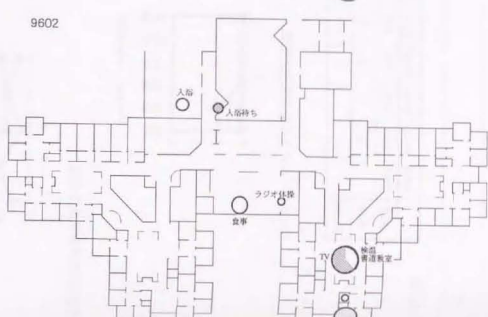
9508



9503



9602



## 6 SS (86歳 女性)

**心身状況** 痴呆はほとんどない。体はADLスケールでは満点で、自立度は高い。歩行の際に杖を使う程度。ただし、施設に来て病気がってから、やや元気がなくなった。

**これまでの生活** 出身は音羽地区で、今でもときどき来てくれる友達がいる。ここに来る前、他の特養で3年間入っており、そこでは仲良しが何人もいて食べ物などをお互いにやり取りするようだった。主に4人部屋だが、2人部屋に入っていた。同室の人もここに一緒に住ってきたが、亡くなってしまった。また施設からも何回の機会ごとにアルバムや花・色紙などいろいろ買ったが「ここでは何もしない。写真1枚、花1本くらい。」

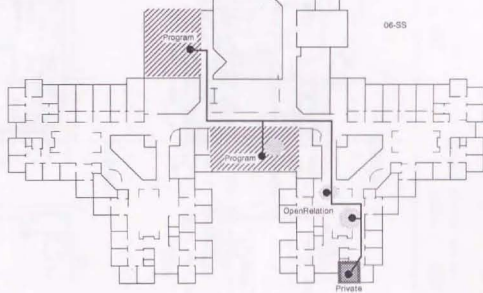
**自分のすること** 一日のうち、比較的長い時間を自分の居室前の共用空間で過ごしている。休職がすぐれなかったときは部屋にこもりがちだったが、元気がなるると共用空間で過ごす時間が長くなってきた。そこでは新聞を見たりTVを見たり、居合わせた人と話したりして過ごしている。朝の体操やゲーム、施設行事など、施設のプログラムにはなるべく積極的に参加しているが、洗濯物乾かすなどのお手伝いにはあまり加わっていない。自分のことに関しては出来る限り自分でしており、「小さいものとか、ちょこちょこと洗濯して。外に干すぞと干すぞ。」

**社会的関係** 他人の部屋には遊びに行くような付き合いはない。「はうすの中では友達はおらん。まだ大分大きい。」TV見ながら喋るような人は「2-3人はいるが。」居室前の共用空間に出たときに、新聞を盗んだりTVを見ながら居合わせた人と話程度の付き合い。それよりも地域の友達や以前にいた特養の友達との付き合いが強い。「村の人とかちよい」と来る。ほか友達が来てきてくれる。「名古屋・高山・音羽に施設がいて、最も近い音羽地区の頃は、ちよくちよく様子を見に来ていた。」

**時間的関係** 居室内私生活に、以前の特養にいたときにもあったアルバム・責状・色紙・人形などを多数作り付けており、以前の社会的関係を自分に対して表現するようである。「現在も残っている」ばかりを書き留めている。自宅から持ち込んだ人形や写すが、施設が移り変わっても過去からの連続性を保つ役割を担っている。

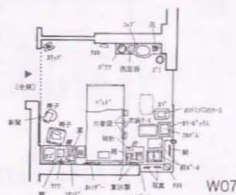
**自宅** 「家は音羽だぞ。」と正月くらいに家に帰る。通院程度。病室まで待っていてくれる。「家は電気が切らんとそのままにしてるぞ。音羽の線が風を入れたりしてくれるぞ。」「家にいるよりもここであつてもいい方がよい。いいとこへあつてももつて。」

**施設に対する評価** 入居して4か月目は、「(ここに来る前にいた特養では)いろんなものを買ったが、ここでは何もくれない。写真1枚、花1本くらい。食べ物もやりとりしたけど、ここではしない。」と転居前の施設と比較して、友達と離れたら扱われ方が変わったことでもあまりいい評価は聞かれなかった。「施設」に対して自分の行動が、どんなことをしているか。「洗濯物も洗濯する場所だ。自分の洗濯物を使って自分でしている」「家具は最初からこの位置に置いてあった。動かしてない!」この椅子は施設の人はちゃんと言ってくれて、ちゃんと手触きをして替わっている。いかなかったのか? というような「してはいけないこと」に対する意識が強く働いている。入居して増えたんだと思う。と、施設に対する評価が「ここはいい施設ぞ。みないい人だらけだから」とずいぶん肯定的に変化した。今では、家にいるよりもここであつてもいい方がよいと思っている。「いいとこへあつてももつて、ありがたいありがたい。ここはいいとこ。お食事もおいしいし!」



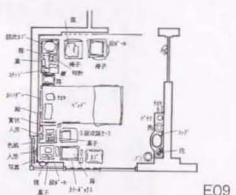
Zone	Where	What	Who	When	頻
Private	自宅	種別・洗濯	一人		自分でできることは自分
		面会	音羽の娘 村の友人	ちよくちよく ちよくちよく	村の人とかちよいち
S-Pri	広間室	検閲	東棟の人	9:30ころ	program
		集まっている	一人、誰か	雑談	
S-Pub	食堂	広間室のTV・会話	居合わせたとき 広間室側の人	居合わせたとき	TVみながら喋ってお
		会話	誰か	居合わせたとき	
		体操	全員	10:00	program
		食事	全員	7:30, 12:00, 17:00	program
		イベント	全員	不定期	program

940808



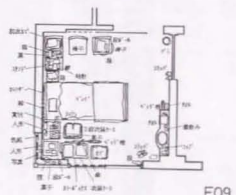
W07

941101



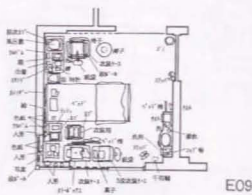
E09

950303



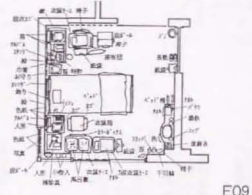
E09

950801



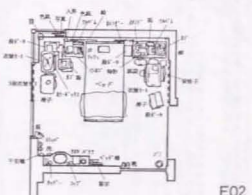
E09

960214



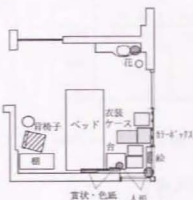
E09

950303



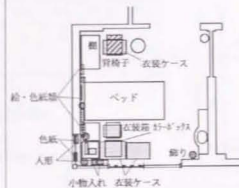
E02

940808 W07



賞状・色紙 人形

960214 E09

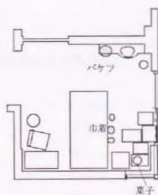


絵・色紙類

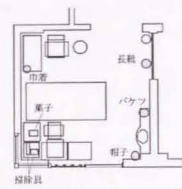
人形

小物入れ 衣装ケース

■居室の環境形成  
 段ボールや風呂敷包みのまま出しているものも目立つ。カウチやクッション衣装ケースなど、収納者の家具が増えている。ベッドの柱には以前の特撮の時にもらった色紙や賞状、アルバムなどを飾り付けたり、友達にもった花、葉から作ってきた狸の人形などを置き、居室が自分のスペースということを表示している。これらの飾り付けは、時間を送ることに増加しており、自分の居場所の意識を強めている。部屋には無造作の丸椅子の他、背の高い椅子を無造作に作り立てて、訪問者が来たときに座る椅子となっている。

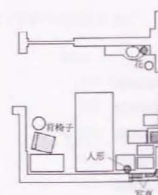


菓子

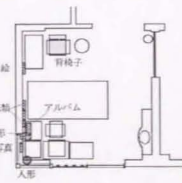


掃除具

■自己の達成  
 柱元に近いところに菓子類がいくつか置かれており、無造作のスクラブルとは異に、自分の好きなときによりと取られるようになっていて、自分の居場所の意識、自分の行動を自分で自分、外の事になりかけている。無造作に一枚のクワを入れたまま外に置いておくことが多い。居室での趣味・活動などは特になし。



写真



色紙類

人形

写真

人形

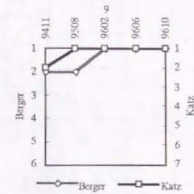
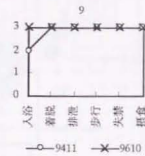
■社会的関係形成  
 近くに住んでいる親や友達がよく訪問する。無造作に飾りつけた椅子はその時の応対用として、訪問者が来たときに座る。  
 ■等身像の表示  
 以前の特撮にいたときにもったアルバムや賞状、色紙などを柱元に飾り付けてある。その当時、無造作の中で自分が一員として認められていたことを表示している物であろう。友人の持っているアルバムなどを見せたり、自分の社会的つながりや表現している。狸の人形は自宅にいたときから持っている物で、過去の思い出あるいは縁起物を示す物となっている。窓際に飾られた写真は若いときになった息子の写真である。



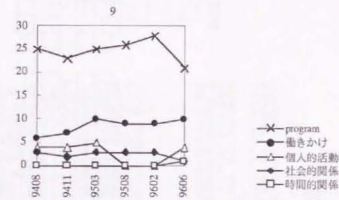
心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W22	E02	E02	E02	E02	W16	E16
Katz		B		A	A	A	A
Berger		2		2	1	1	1

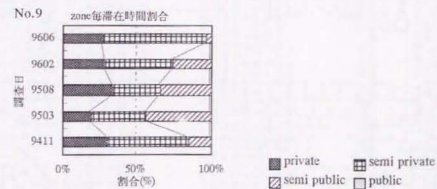
Katzスケールによる動作能力の変化



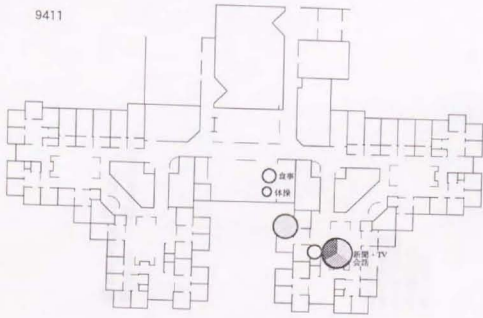
家具の持ち込み状況の変化



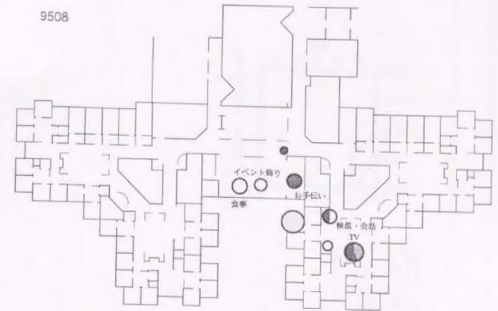
zoneごと滞在時間割合の変化



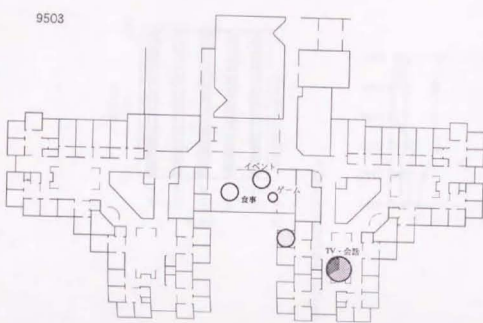
9411



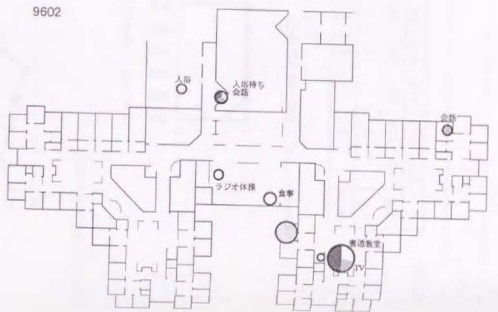
9508



9503



9602



9 YH (90歳女性)

**心身状況** 病氣はない。体も基本的には元気で、おしほり費みの時などは立ったまま仕事をすることもあるが、移動の時は手押し車を押していることが多い。耳がかなり遠く、耳元で怒鳴らないと聞こえない程度。

**これまでの生活** 自宅は施設からすぐ近くの内山地区にあり、生まれてからずっとここで暮らしている。内山の中でも中心街にいたことをちょっと自慢に思っているようだ。「ここは(内山の) 5区で端だけだ。家は5区で、一番中心。学校も近い。農協も近い。」家は農家で、家族と一緒に田圃で働いていた。「おぼへ一人なのであまり出来ませんわんが。」ここに来る前は、別の施設に2年3か月いた。「そこは4人部屋で、100人からおりました。」舟見では洗濯物やおしほり費みを専門でやっていた。

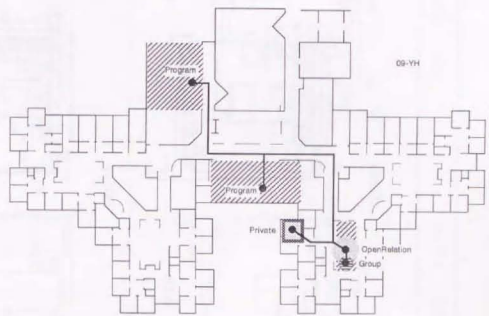
**自分のすること** 一日の時間のうち、比較的長い時間を経営者の共用空間で過ごしている。ここで新聞を読んだり朝があればテレビを見たり。町の公報を読むのも好き。はじめてうちはテーブルのところに座って、新聞や公報を読んだりテレビを見たり。また都合合わせた人たちとちょっと会議したりしていたが、次第にテレビの画面に椅子が並ぶようになり、そこに座ってテレビを見るようになった。画面のプログラムには必ずお茶やゲーム、朝間や昼間のイベントなどがあるときもある。前の施設では積極的に参加していた。貸立でおしほり費みや洗濯物も手伝ったこともある。前の施設では全員の洗濯物を並べ替えていたが、おしほり費みは担当のこととして受け取っており、「こちらでは30人分をみんなでするので、のんびりやっています。洗濯物が少ないので、休日は、太ってしまったり。」

**社会的関係** 入居者同士の交流としては、お互いの部屋を訪問するような密度の高、付き合いは全くない。居室前の共用空間で過ごす時間が多く、そこに集まる人と会話をしたり、洗濯物などのおしほり費みをしながら話したりする。共用空間でははじめテーブルについておぼへ、テーブルに付いている他の人より話す機会があったが、その後テレビの画面に座るようになってから、そこに座る人はいつも来た人だけなので会話の相手も限られていってしまった。おぼへの子供は、地元で農家をしている息子や息子の孫で住んでいる息子や孫、孫や孫を連れてときどき来てくれるので楽しみにしている。子供や孫が来てくれたお花や人形、手紙などを部屋に飾って置いている。ただ、若いのもっと来てほしいという気持ちの裏に、「苦悶しているの、日曜日に来るわけには行かない。」

**時間的関係** 昔から使っているような物や、過去の思い出を呼び起こすような物は持ち込まれていない。部屋に飾ってあるお花や手紙などは子供や孫からもらったものであり、現在の関係性を示す物となっている。

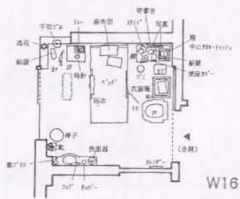
**自宅** 家は内山にあります。これも内山。内山は5区に分かれていて、ここは5区で端だけだ。家は5区で、一番中心。学校も近い。農協も近い。農家やっていた。ここへんの田圃。買いたいと欲する。だんだん農家もなくなってきてたので、ここ「病院」に入っている。今はここが自分の家。

**施設に対する評価** 施設に入るきっかけは、「だんだん足が弱くなってきたので、」特養のことを居住施設というよりも病院として入居している。「ここ「病院」に入ってます。」とはいえ、「今はここが自分の家」であると思っている。というの「家」にいると気楽なため、施設は「家が気楽な」という評価が大きいようだ。ここに入る前には4人部屋で100人の特養と比べ、「どちが良かったも悪いともいわれません。同じです。ただ、洗濯物のために楽になったという面から「ここは悪くない。休日は、のんびりやっています。」



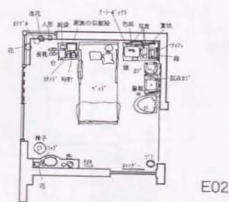
Zone	自室	When	What	Who	When	頻
Private	自室	常時	読書、テレビ、雑誌	息子、孫、曾孫	ときどき	毎週来るわけにも行かない
S-Pr	広間・TV	TV・会話	新聞、広報読み	広間側の人一人、建ち	居合合わせたとき	
		書斎	比較的年配の人	不定期	program (書け言わなかった)	
		TV	KI、KIN、WN、YI、			
S-Sub	洗濯室	おしほり費み	比較的年配の人	10:30ころ		のんびりやっています
		食事	全員	10:00		
		イベント	全員	7:30, 12:00, 17:00		program
				不定期		program

940808



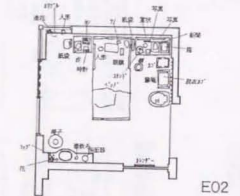
W16

950801



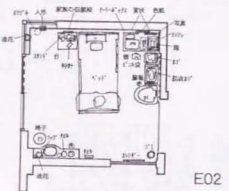
E02

941101



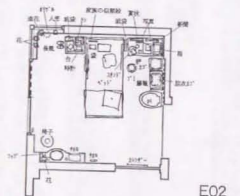
E02

960214



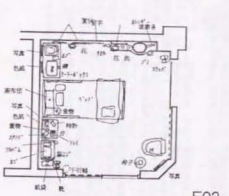
E02

950303



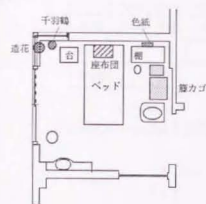
E02

950303

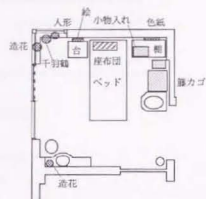


E02

940808 W22



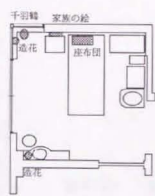
960214 E02



■居室の環境形成  
 筆致としては、窓から4段の壁かごを持ち込んでいくらしい。その後、とってのつづいた小物入れが持ち込まれた。子供の持つてきてくれた造花や人形、飾り、指のつづてくれた千羽鶴など、ちよっとしたものを飾り付けている。また、施設でもらった真珠や扇飾、写真、あるいはイベントの時にもらった手作りメダルなど、プログラムに預かる物も積極的に持ち込まれ、意味ある物となっているようである。セッティングとしては座布団を持ってきてきているらしい。普段は使っていないと思われる（あるいは使用し）ポータブルトイレが置かれている。



■自己の運成  
 新聞や町の公権を読むのが好きなので、ときおり新聞を持ち込んでいることがある。施設のお手紙として送る物をきょうだいにはずすが、自分のことを自分でするという気持ちはあまり見られない。自分から積極的に何かの活動をするこはあまりないが、施設のプログラムでもらった真珠やメダルなどを飾り付け、その詳細についても質問物を受けとめているので、施設プログラムに自分の活動の記録を置いていることが考えられる。

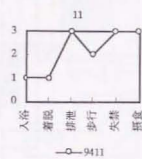


■社会的関係の形成  
 ■関係性の表示  
 息子が扉山について、器や器を運れてきてくれるのを楽しみにしている。孫の持つてくれた千羽鶴、息子の持つてきてくれた人形・造花・座布団など、身の回りにある物が家族との関わりを示している。以前も他の特養にいたためか、君から使い続けている物や、思い出を呼び起こすような物の持ち込みはあまり見られない。

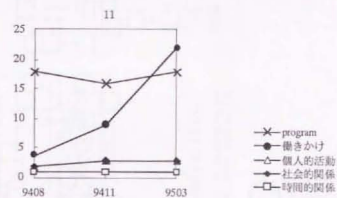
心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W08	E10	E10				
Katz		D					
Berger		3					

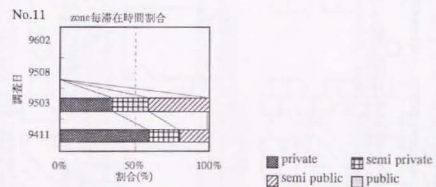
Katzスケールによる動作能力の変化



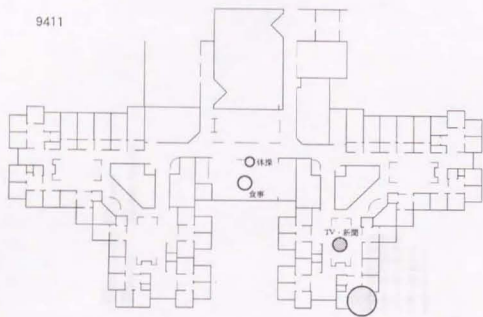
家具の持ち込み状況の変化



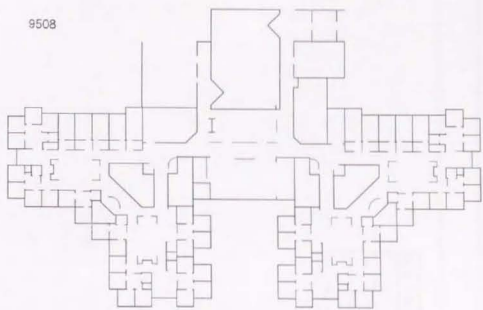
zoneごと滞在時間割合の変化



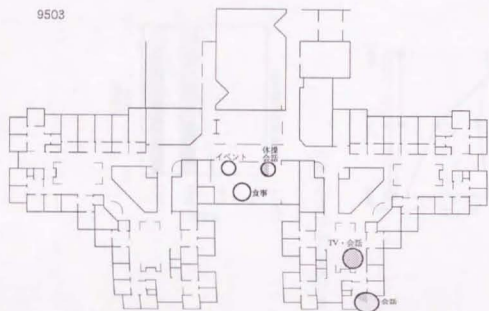
9411



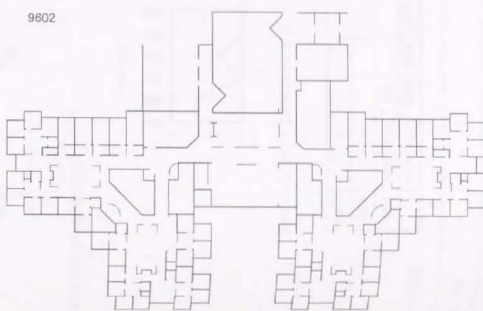
9508



9503



9802



## 11 SR (87歳 女性)

心身状況 健康程度。移動の難しさは車椅子だが自立度は高く、入浴・着脱衣以外は介助なしで可能である。

これまでの生活 自宅より入所。家は黒部にあって、家族と同居していた。85まで、毎日田舎に出ていた。高血圧の発作で黒部の桜井病院へ。黒部からは一人できたので、知り合いのいない。

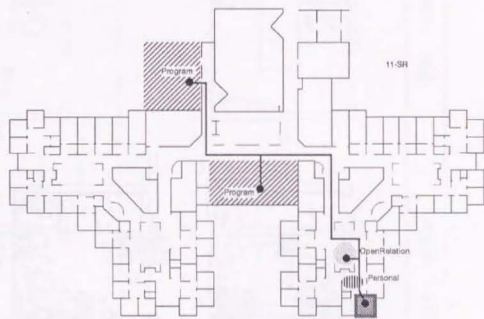
自分のすること 自分の部屋を出たところで立つ練習をしている。靴がかしいから、誰も見えないときにしている。孫や孫が遊びに来たら抱かないから歩かなくていいと言うが、「半年も寝つと、歩きたくてしょうがない。おなかを減らすことも使おう。ちっとでも手を動かして腰を柔らかくしようとしている。外のテニールにはちよいちよい行く。孫をしょに行く。居場所は、食堂とここくらしい。自宅でTV見たり寝たりしていることが多い。思いついたときに本を読む。本とかは持って外には出でない。

社会的関係 居場所の共用空間に出ている。居合わせた人と話をする。時には食堂で食をすることもある。「居場所は、食堂とここくらしい。子供や孫が遊びに来る。孫はいっぱいいる。くるときは1週間以上別でもくる。孫がお嫁さんをもって連れてきた。10月に結婚式もあるので出たいが、出られるかどうか。用があってもなくても週1回くらい電話をかける行。

時間的関係 自宅で長いこと使っていたような家具や、思い出深い物といった過去とのつながりを示す物はほとんど持ち込まれていない。また、居室で特にするような活動もない。唯一、靴にしまっている仏教の本は、過去そして現在の経緯を示す数少ない物の一つである。

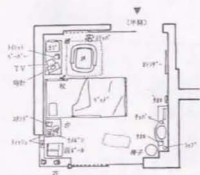
自宅 家は黒部で、家族と同居していた。「ここにいるのがはずかしい。早くここを出て、黒部の家に帰りたい。」

施設に対する評価 自宅には家族がみんないて、早くここを出て自宅に戻りたいと思っている。「ここにいるのははずかしい。黒部の家に帰りたい。」そのためもあってか、特に自宅から家などは持ち込まず、居室も狭いので環境形成はなされていらない。「家具の配置は、子供と孫たちが置いてくれた。みんなまかしてしまっている。この花は、孫でも持ってきたんだからね。」特に入居した当初はかなり自宅とつながりを感じたが、「最初ちょっと寂しかった。でもまわりはいい人ばかり。お孫さんをだれでも押してきてくれる。」時間が経つにつれて、人間関係を求めた施設の環境に慣れてきた。



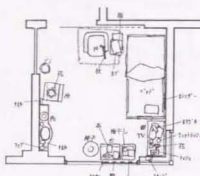
Zone	Where	What	Who	When	誰
Private	自室	TV・読書	一人		
S-Pri	居間	テレビ	一人		靴がかしいから誰も見えないとき
	広間+テラス	TV・食卓	広部黒部の人 一人、誰か	居合わせたとき 居合わせたとき	本を持って出てくること
S-Pub	食堂	新聞・広報紙	全員		program
		体操	全員	18:00	program
		食事	全員	7:30, 12:00, 17:00	program
	イベント	全員	不定期		program (居場所は広堂くらし)

940808



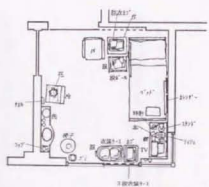
W08

941101



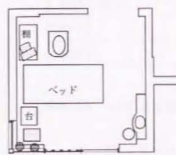
E10

950303

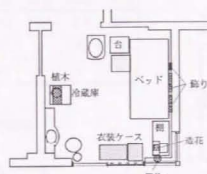


E10

940808 W08



950303 E10



## ■居室の環境形成

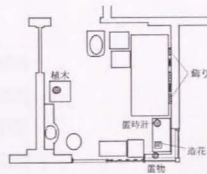
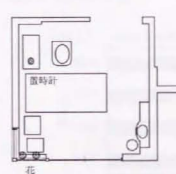
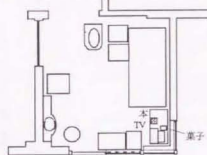
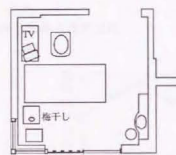
入居当初はあまりここに長居するつもりもなく、家に帰りたいと思っていたこともあり、物持ち込みはTV程度で十分な量でなかった。その後も自宅から家具や物を持ち込むということはしなかったが、衣袋ケースや小物入れを必要に応じて買った。冷蔵庫を持ち込んだりして居室の環境を整えようとしている。ディスプレイははじめの体験があるが、ベッドが、ベッド脇の壁に飾りを取り付けるようになった。セッティングとしては、当初真ん中にあつたベッドを端で寝て壁面を広く使ふようにし、TVは壁ながら見られる位置から床で見る位置に変更されているなど、自分で使いやすいようにレイアウトを決めている。

## ■自己の建築

部屋にテレビが置かれ、自分の見たいと喜ぶ好きな番組が見られる。お菓子の情報も手に入る。自分で、自分の好きな物を自分でコントロールしている。一人で居るというのは、自宅の外で、セリで歩く練習をしているほかはまだ見られなかったが、ここは自宅に帰るまでの一時的な場であり、そのための訓練はするが物に目もそれほど興味を持たなかったのかもしれない。仏教の本を枕元に持っていて、思いついたときに読んでいる。これは大事な本なので、机にしないように鞆の中に入れておく。

## ■居住性の表示

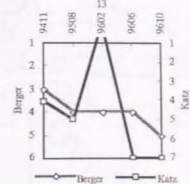
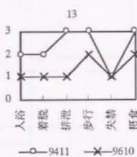
鉢植えの花などは時折来てくれる子供や孫が持って来てくれた物である。ここに長居するつもりはなかったから、昔からの家具や物はほとんど持ち込まれていない。枕元の形をした置き時計は、数少ない過去とのつながりを示している物と思われる。



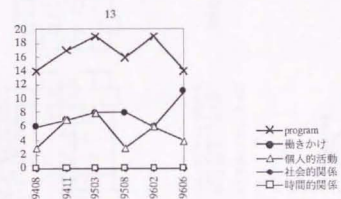
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W19	E15	E15	W01	W01	E26	E26
Katz		D		E	O	G	G
Berger		3		4	4	4	5

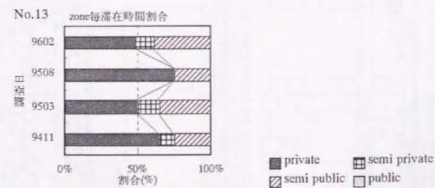
Katzスケールによる動作能力の変化



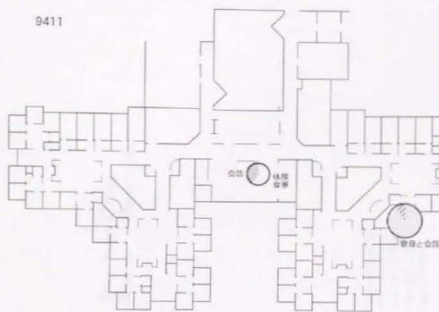
家具の持ち込み状況の変化



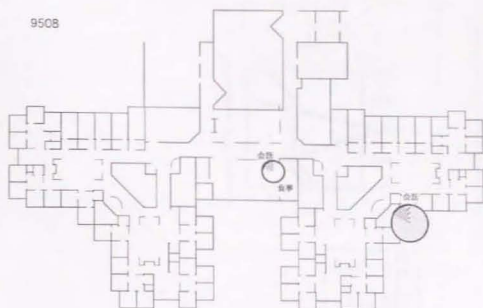
zoneごと滞在時間割合の変化



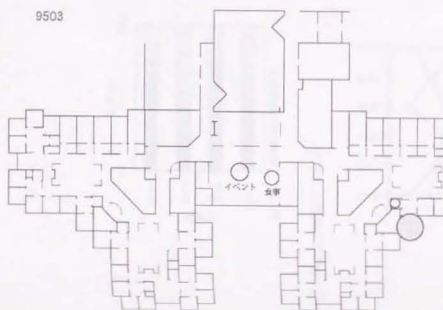
9411



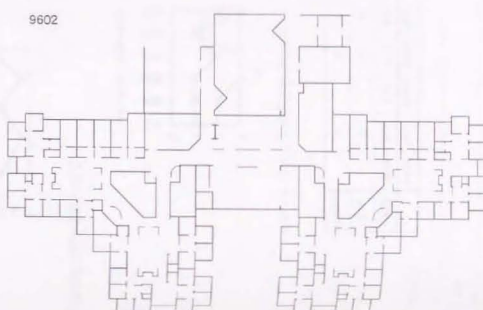
9508



9503



9602



## 13 YS ( 83 歳 女性 )

## 心身状況

入居当初は軽度痴呆と見られていたが、ベッドから落ちて車椅子になってから中度～重度の痴呆となってきた。身体動にもほじめは一部介助が必要だったものの、そこそこ自立度もあったが、ベッドから落ちて以来移動は車椅子となり、日常生活でも介助の必要度合いが高まった。

## これまでの生活

38のとき、おとろしい病気がかった。手術をして、それから次から次へと悪くなる。病状ばかり、目の数回になる、音が響く。17～8年前に夫を亡くして、一人暮らし。愛本の家は27～8年に建てた。家を建てたおかげで力がついて、働けるようになった。17～8年としたり、また病院に、病院に3回入院して、それから移ってきた。家にほたまに戻る。

## 自分のすること

一日のうち、食事や施設の行事の時以外は、ほとんど部屋に閉じこもって過ごしている。林講が思わしくないで、居室では遊んでいることが多い。車椅子になり、部屋も西棟へ移ってから、ますます元気がなくなり、食事の時も職員に連れてきてもらうような状態である。

## 社会的関係

食事の時以外にはほとんど部屋にいるため、いぶん人と話す機会はそのほど多くない。居室外の共同生活などはない。食事時間の分り前から居室に来て、そこで誰かお話を聞かせた人と話すことはある。隣の部屋の人は同じ林の出身だったので、その人がよく様子を見に来てくれたが、居室が西棟に移ってからは、そういうことはなくなってしまった。居室は名古屋にいらが、あまり来ない。おぎょうの方の一人いて、たまにま来てくれる。たまに孫が来る。

## 時間的関係

家で使っていた帽子掛けと衣袋ケースを持ち込んで来たが、過去との連続性・自分の経験などを映し出すような物にはなっていない。

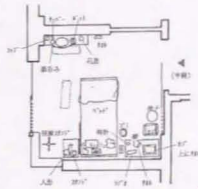
## 自宅

愛本の家は27～8年に建てた。17～8年前に夫を亡くして、一人暮らし。家にほたまに戻る。

施設に対する  
評価

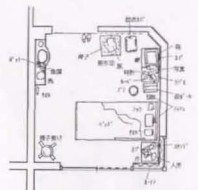


940808



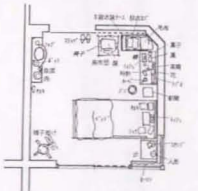
W19

941101



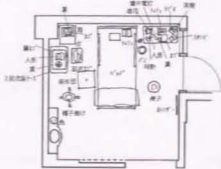
E15

950303



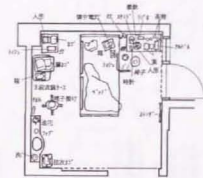
E15

950801



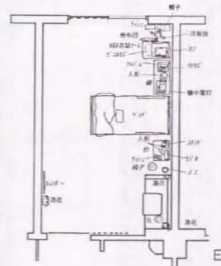
W01

960214



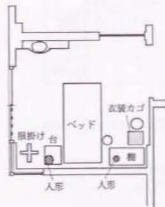
W01

960625

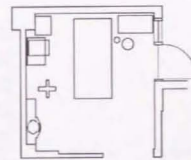
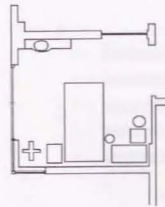
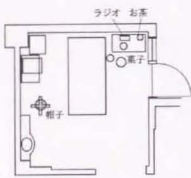
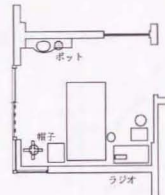
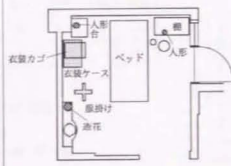


E26

940808 W19



960214 W01



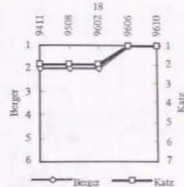
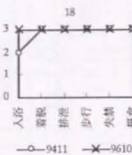
■部屋の構成形成  
 家から持ってきた物は、帽子掛けスタンドとビールの冷蔵庫がくわい。その後、3段の衣装ケースを購入した。飾られている物はアラの人影と天の人影。あと遊花くらいで、そのとくに増していることはない。

■自己の達成  
 居室にラジオが持ち込まれているほか、菓子や菓物とがあり、自分の部屋で好きなときに食べられるようになっている。茶室があり、自分で好きなお茶を入れて飲んでいる(ふりである)。もともと物がなかったが、ベッドから落ちて腰を痛めてしまい、居室で何か感動らしいことは特にしていない。

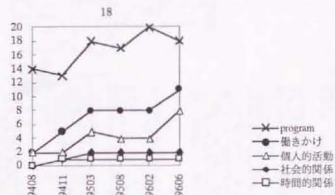
心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W10	E19	E19	E19	E19	E20	E20
Katz		B		B	B	A	A
Berger		2		2	2	1	1

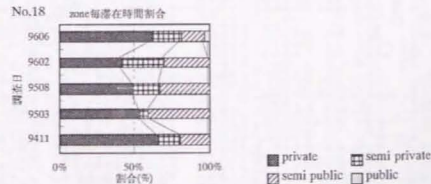
Katzスケールによる動作能力の変化



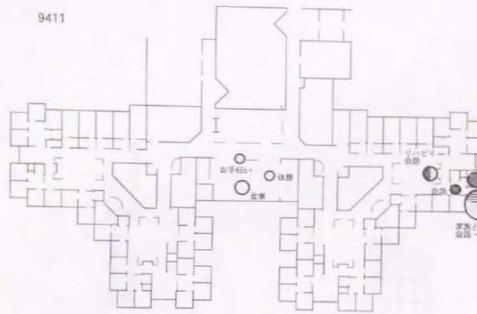
家具の持ち込み状況の変化



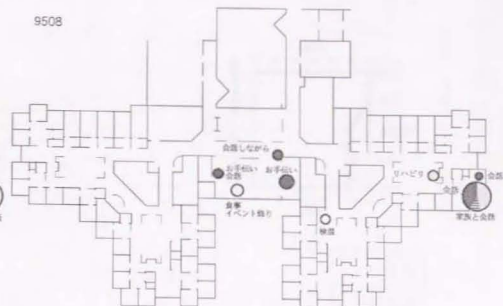
zoneごと滞在時間割合の変化



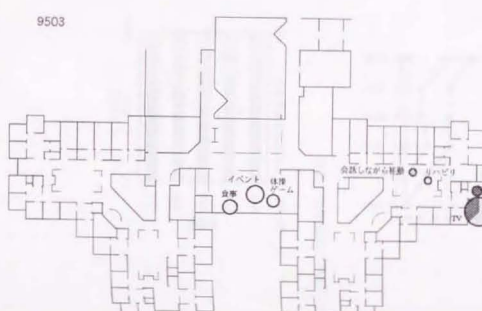
9411



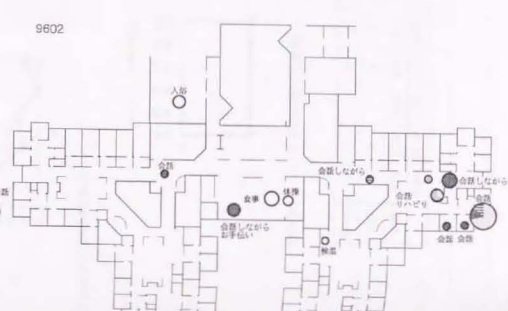
9508



9503



9602



## 18 TP ( 77 歳 女性 )

**心身状況** はじめは軽度痴呆と見られていたが、現在は痴呆はほとんどない。目が光を感じず程度でほとんど見えなくて、身体時はほぼ完全に自立している。毎日歩数を数歩したり、リハビリの器具で運動したしている。

**これまでの生活** 入院前は自宅で一人暮らし。目が見えなかったが、雪下ろししたり掃除したり、何でも自分でしていた。夏は早朝から畑に出た。TVは見えないけど音だけ聞いていた。水戸漬物とか、漬物物とか、1日見たところからイメージは分かる。入院の際に薬を処方して入ったから、帰るころには、自分の家に帰ってきたり、居てもよくなる。

**自分のすること** 自宅・リハビリ室・食堂など、施設のさまざまな空間を徘徊している。朝は廊下から廊下を向こうからこちまで行ったり来た。夏は朝から、往復30分ほど。これが1人でやることになる。それかお茶を飲んで、運動のあとトイレの掃除、それから廊下を歩いたりする。朝晩はリハビリ器具で運動。20分くらい。それから30分ほどお風呂を数回。お風呂さんと二人で、西洋の昼の所で、30分ほど歩く。「日本丸ちゃんの音楽を聴いて。」

廊下のリハビリ空間では、「運動になったリハビリのところで少し休む。ベンチに腰掛けて会話することもある。南側の人の集まる共用空間に対しては「熱いところ体温計はかるべきだけど行くのが、あまり向こうには行かない。」食堂では自分の出来ることをしようと思いついて、一人で歩いたりしてテーブルを囲んだり。みんなで話さなくてもおしゃべりもする。おしゃべりする。自分の部屋にはよく歩く人たちが来ておしゃべりする。夕方になるとかならず入院の人がTVを見に来る。目が見えないので、自分ではTVは見ない。

**社会的関係** もともと部屋の近くには家の若い人を集めておしゃべり、仲良く会話している。よく見えないのと近いの距離で行った家の方、食事の人の声なども声をかけて一緒にいる。目が見えないので、食事の席におかす位置なども教えてもらう。「あの人は耳も悪いし話も長い。ご飯のこともよく聞いてもらえる。」もう一人の人は少言葉になることとテレビを見る。それがど親しい感じでもなく、ここに来てからこの辺りで何人か、集まって遊ぶようになった。4人組で話せることもあまりなく、「みんな自分自分のTVを見るから、じまになるなと思って。」この話から、よく来て来ておしゃべりする人がいる。向こうの家には話に行かない。行かない方がいい話も聞かなくていい。何とかならなくてもいい。「部屋は広いな。いつもあそこ(リハビリの椅子)で話そうよ。あそこの方が静かで歩きやすい。」南側の共用空間には、挨拶やおしゃべりして、あまり行くことはないで(向こう側の人はあまりいへない)。食堂でのおしゃべりに参加はしていない。行きたいと思ったら2人「挨拶おしゃべりの時に話していいよ。」

**時間的関係** 自宅を処分して入院して来たときに、過去とのつながりが(物には)ほとんどなくなった。帰り際に二人とも名指しして、この近頃には話も聞かなくなって。電話はちよいといい。週5回は定期的に電話を打って来ていた。入院の際には来たから、ここより他に帰るといってほしい。

**自宅** 入院前は自宅で一人暮らし。目が見えなかったが、雪下ろししたり掃除したり、何でも自分でしていた。夏は早朝から畑に出た。TVは見えないけど音だけ聞いていた。水戸漬物とか、漬物物とか、1日見たところからイメージは分かる。入院の際に薬を処方して入ったから、帰るころには、自分の家に帰ってきたり、居てもよくなる。

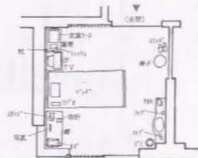
**施設に対する評価** 入院した当初は「心配で心配。はじめはどしようかと思ったが、だんだん慣れてきた。」自分の家は処分してきてしまったので、ここより他に帰るとかはない。「誰のところに帰るとか、おしゃべりから。」それは仕方のない。ここには何となく、おしゃべりしていい。「自分の家だから何でも自分でしていいけど、ここはいつでもしていい。」一人能力の喪失も評価され「家にいるときと比べても、能力が低下して、かなり肯定的に扱われている。施設に対する不満として、ここでの食事は多すぎる。もっといいお茶を飲んでもいい。」「管理さんは、昔よくておしゃべりしているし、目撃りなでええええええ。」



Zone	Where	What	Who	When	How	
Private	自主	飯食 TV 会話 会話	娘 入居者10人 入居者KIC、NS 隣の人KIC	月1回(日) 毎日5~7時	class class class	
	S-Pri	空室	会話、一緒に行動	施設管理者のNS	真面目・体面などへの対応 9:30	class class
		リハビリ	会話 運動 散歩	入居者KIC、NS 一人 一人	いつでもどこでも話す 運動は午 9:30~5	personal personal
S-Pub	空室	会話 イベント 食堂	全員 全員 全員	18:00 9:30、12:00、17:00 不定期	program program program	
	食堂	おしゃべり・会話	管理・少人数	食後・少人数	group	

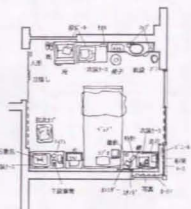
(南側に壁は)あま( )

940808



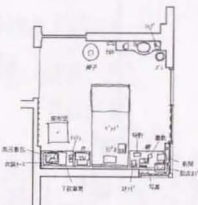
W10

950801



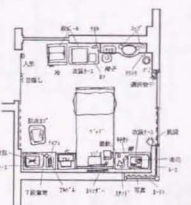
E19

941101



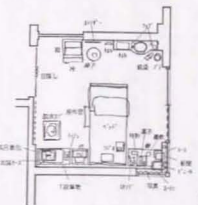
E19

960214



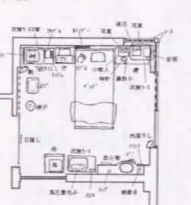
E19

950303



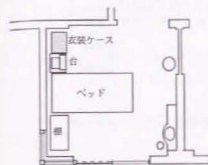
E19

960625

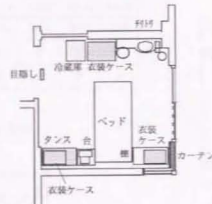


E20

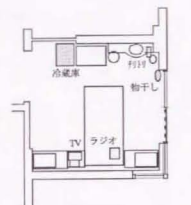
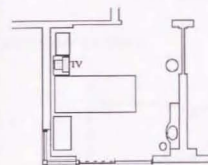
940808 W10



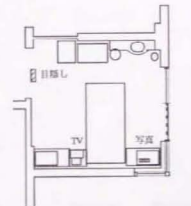
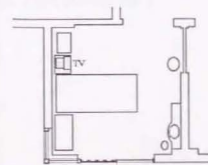
960214 E19



■自分の履物整理  
入居当初は収納に、T型のタンスと衣装ケースを持ち込んだ。T型のタンスと衣装ケースが増えたほか、風呂敷に包んで置いてある。衣装ケースもむき出しではなく、風呂敷に包まれて置かれている。入居後に、壁からの光がまぶしいので壁に言ってカーテンを付けてもらったが、かかっているものがいいやなので戸の窓に目隠しをつけたらして、窓の隙間を自分でコントロールしている。目が悪いこともあり、部屋の隅の隅に付けっかけてはほとんど読んでいないが、衣装ケースを風呂敷で包んで置いていたのは他人の目を気にしているのかもかもしれない。



■自分の遠慮  
部屋にテレビとラジオが持ち込まれている（TVは子供が買ってくれた物）。目が悪いのでテレビはあまり見ることはないが、風呂に置かれたラジオを好きな時間に聞いている。冷蔵庫は後から買った物だが、目薬が入られるので自己管理に役立っている。高層階は物だけ高層階が高い、部屋に干す。



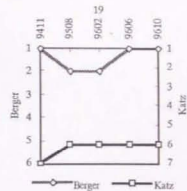
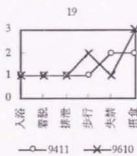
■社会的関係形成  
入りのガラスには、覗かれないように目隠しをすすようになった。目が悪いので実際に覗かれないのを気はくわけてはいないが、風呂に置かれたラジオを好きな時間に他人の侵入をコントロールしようとする意識の裏側である。訪問者は家族の機、通話の友達と話すこととあるが、その時は扉に覆ったベッドに包んで置かれたり、特にセッティングを求めているわけではない。毎日の生活の大半が7時半までTVを見ているので、TVはその人に見せるためのものようになっている。誰か来たときには、扉に扉を叩いて白まっていこうとする。

■関係性の表示  
これまで独りで住んでいたのは全部処分して入居してきたが、その時に衣類以外ほとんど物を持ち込まずに入ってきた。唯一の写真が飾られており、過去の思い出を呼び起こす物となっている。

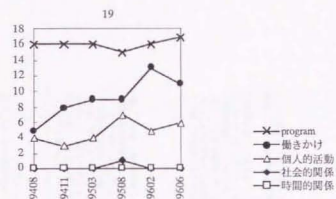
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W02	W07	W07	W06	W06	E03	E03
Katz		G			F	F	F
Berger		1		2	2	1	1

Katzスケールによる動作能力の変化



家具の持ち込み状況の変化



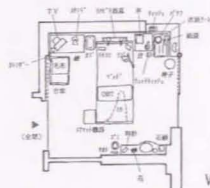
zoneごと滞在時間割合の変化



19 YK ( 64 歳 男性 )

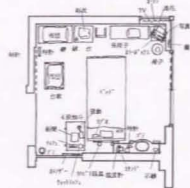
心身状況	筋力はない。体の方は、若いときにトロッコから落ちて半身不随となり、上半身しか動かせない。食事以外は介助が必要である。移動は一人では無理だが、手動式車椅子に載せてもらえば、自分で動かしてどこでも行くことが出来る。
これまでの生活	若いとき(20代)に仕事のトロッコから転落し、以来下半身不随となり、寝たきりに近い状態で過ごす。「こんな恰好で36年間も生きておって。」4年間病院にいた後、「36年間家におった。」自宅は施設と宇奈月温泉との中間くらいのところであり、母と娘が同居していた。
自分のすること	自分で体を起こせないので、午前中車椅子を漕いで運動する他は、自家のベッド上で過ごしている。朝晩2回に娘が来て車椅子に乗せてもらい、午前3時間ほど施設の外周を回る。「暑くなる前は3時間半で大体3、6回まわってたぜ。今は2回ほど回るとうあつうであつうで。」11時をすぎると家族たちと昼食の準備になって忙しくて動かないので、それまで止まって置く。朝の目には外に出られないので、施設内を回る。「4月に新しい車に乗ったや。前の車では1回4分だったが、今の車は1回5分くらいかかる。1回30回か31回でまわる。今の車では37回くらい。」施設でもへっこの路上に手回りのリハビリ装置を付け、手の運動もしている。「運動だけで3時間半やとった。40分やって5分休み、また25分やる。最近では10分くらいしか出来なくて」重りの砂を少し軽化した。「車でもまわるとる日はやらん。」
社会的関係	施設の入居者で仲がいいのは、男の人一人くらい。「まともに喋るのはその人だけだもん。話しかけても聞かなかったり、耳が聞かなかったり、大声出しているでこっちのびてしまふ。女とはあま〜ららん。」こちらからは行けないので、向こうから30くらい距離に来た。「たまーに遊びに来る。そんなにしょつち来んでも、外へ出たらしょつち中々〜とるから。」施設内がいかなる場所でもバツバツであるので、寝転がっているときも、必ずとどろくくらい喋る。その人に言われて自治会の副会長になった。「俺できん言ううとったけど、やってみて出来んと言う奴があるか言われて、うんと言ったわけではないが、やれ〜で。」 家族は、娘は毎日電話に行くとき朝と晩に話したい。娘が来るのは足音で分かる。毎日、食事と車椅子に要するの手伝ってもらう。娘にあまり負担を掛けないように、できるだけ太らないように気を付けている。「昨年こへ入ってから4年やせた。」
時間的關係	もう何十年も寝たきりに近い状態で、過去とのつながりを示すような物は全く置かれていない。柱元のリハビリ機器は、前から続け、今もしている施設ではあるが、日本のノルマとしての活動であり、将来に続く時間の連続性を示すような物ではない。
自宅	家は宇奈月温泉の温泉から1kmくらいのところ。ここから3km半だから、ここ20回回ったら車に行って帰ってこる位で回った。今は母がなんが、娘も、正月も帰らん。家行つたって寝とるだけだもん。車持たんでいってとって、寝とるだけだ。正月一晩だけ行つてきたが、寝とるだけ、山見とるだけだもん。
施設に対する評価	ほとんど一日中部屋で過ごすので、居室の環境、とくに音や温度に気を付けてあり、何回か部屋を替わった。「最初の部屋は窓が外側があるきくて、9月に好きなところに行きたいといわれて部屋に入ったが、暑うて暑うて3日寝らん。それでここに替った。ここは寒い。廊下の方が暖かい。」しかし、「もう引越したくない。あまりあっちこち行つたら、わがままになってしまふ。」 施設の行事には出たことない。休職にも行かない。記念写真も撮ったことない。

940808



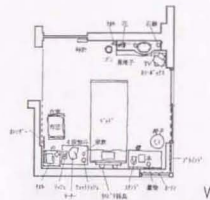
W02

950801



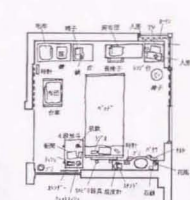
W06

941101



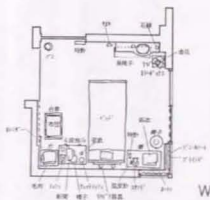
W07

960214



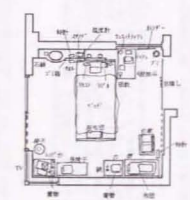
W06

950303



W07

960625

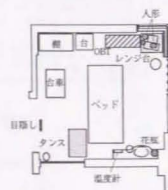


E03

940808 W02



960214 W06



#### ■家の環境形成

この家は窓ガラスが非常に大きかった。窓に当たってその暖射がタンスやカーペット、椅子込み、さらにレンジ台を暖くして、さらさらになり、部屋を暖くさせている。温度は自分で室温を感じとれないため、部屋の温度をコントロールするのには必要な物である。その際、窓からの冷気が来たので、窓にカーテンとビニールシートをつけて冷気を防ぐ工夫をしている。入居の目的は、元来と主人の健康、住むために目隠しをつけるなど、さまざまな環境コントロールの工夫がなされている。タンスは自分でというよりも誰か持ち込んだ物だが、花や置物が置かれるようになった。セッティングは自分の体の具合に合わせて、はじめは001だけだったが、暖射の強いタンスを持ち込んでベッドサイドに置き、テーブル代わりにしても利用している。

#### ■自己の運成

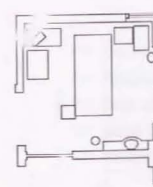
一日のうち長時間を部屋で寝たままで過ごすので、部屋のラジオやテレビ、本や新聞などは時間のコントロールという以前に情緒を導くために必要な物である。枕元に雑誌の置き方を手直ししようという目的のラビリ器具が設置してあり、時間を夜まで運動している。子供に与えられる身長の伸びが伸びると子供に目が届くため、徹底して自己管理を行い、朝食などは手配された量でもできるだけ稼働するようにしている。

#### ■社会的関係形成

部屋に居る時間が長いので、よつうに叩かれても居る側からそれをコントロールできるというはそれと別にならぬ。たまたま訪客があまり頻りに来ないので、自分の目隠しをつけるようになった。自分の体丈に合わせた入居の目的は、健康にいい、暖かいという目的を優先するようにしているよう。

#### ■関係性の表示

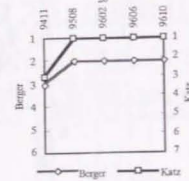
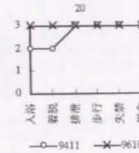
毎朝目覚めで顔を洗ったり環境を整えたりして、それによって、居る側から何を置かなくてもつながらず十分稼働している。それによって、居る側から何を置かなくてもつながらず十分稼働している。それによって、居る側から何を置かなくてもつながらず十分稼働している。



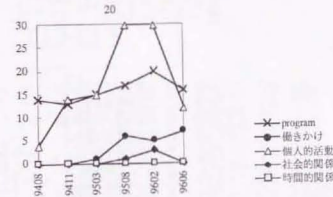
心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	W16	E14	E14	E14	E14	E12	E12
Katz		C		A	A	A	A
Berger		3		2	2	2	2

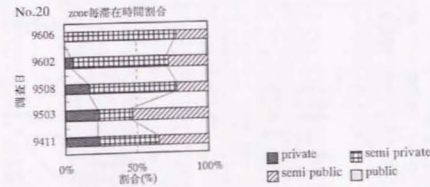
Katzスケールによる動作能力の変化



家具の持ち込み状況の変化

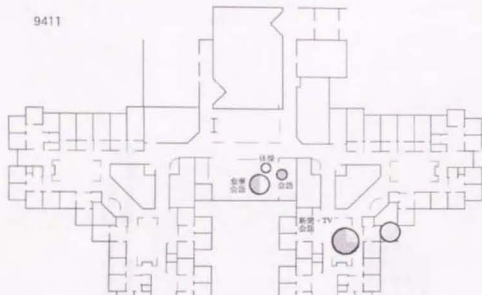


xxxeごと滞在時間割合の変化





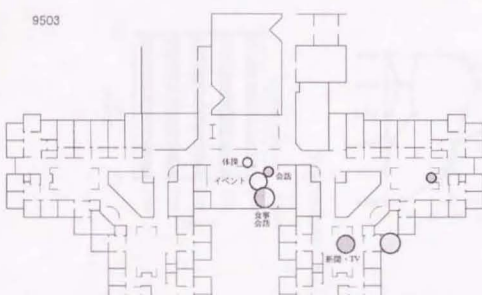
9411



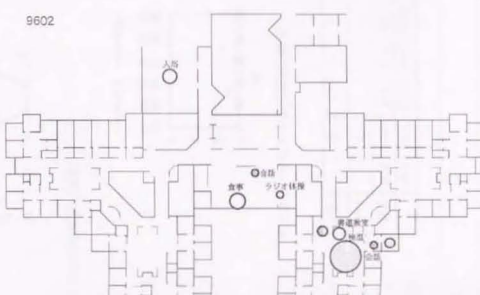
9508



9503



9602



20 YA (75歳女性)

心身状況 軽度の痴呆。ただし原時は中重度の痴呆だったが、入居後かなり改善された。話のつじつまも合うようになり、現在の自分の状況もきちんと把握できるようになった。体の方は自立しており、ほとんど介助なしで日常生活を送ることが出来る。

これまでの生活 自宅は下立地区にあり、家族と同居していた。家では自分の部屋をそのままにしてあり、いつでも帰れるようになっている。前は中学校の家庭科の先生で、裁縫・洋裁を教えていた。

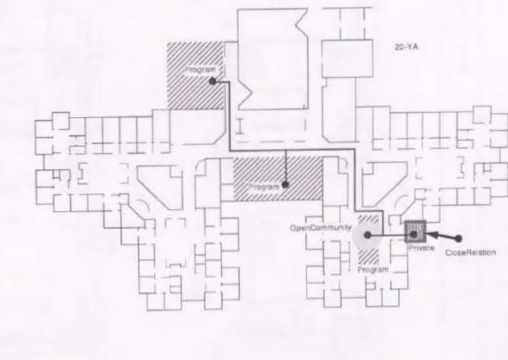
自分のすること 日中はほとんど図書館の奥用書庫などで過ごすことが多く、居室での滞在時間がかなり短い。共用空間では新聞を読んだりTVを見たり、時には自家用車を運転してきて読むこともある。誰か居合わせる機会があることも多い。誰もいなくても一人で居る。居室で過ごす時は他の人に比べて少ないが、家族が帰ってきてくれるのを喜んで、惣菜を買って惣菜店をつらつら、好きな紙で書かせる景色をのぞきながらと、さまざまな趣味活動を行っている。「最近では生け花。ちぎり紙は好きです。私、好きーはいんです。」本は始めの頃自分の上に雑誌に載っていた。雑誌から選んだ本を順番に読んでいっていった。『読みたいものだけだけ読む』という順序が出来てきた。また、ここに入居してから始めの頃は犬を犬舎に毎日一句一句書いている。「実業のあつてきた生活士のことを書いています。」「俳句は覚えていないもの、死のときの言葉。自分さゆゆらってお茶を立てていたことありません。あまら。

社会的関係 日中ほとんど図書館で過ごすので、近所の人との関係はよくない。特に人間関係の難しさを感じており、「本棚(カゴボックス)は壁際から奥まで全部が空になってしまったが、他の人から何であんだけ言われて、左のうちはいつまでたってもあまらしないんですわ。」「(自分の本を)読みさしめて置いて持って行きましたが、二週間も経たないで、もたもた本棚で邪魔になって言われました。はい、ありがたうって言ってあげたいの。もの言ひ方ひとつで人を傷つけないようには気を付けています。」

手には読む本はたくさんある。昔、雑誌に載っていた。雑誌の手紙にマスタグを付けて、それを伝えた友達に「昨日も4人ほどお礼のメールが来た。」「家が自立している息子の誕生日はと来て、「たびたびいんものを持ってきてくれるでが」。家が近くていい子孫継承して来てくれるので、定期的に帰ってくる。「帰るときは、みな必死で、息子とお嫁さんたちがみんな帰ってきてくれる。帰っているから安心していいと思うて。」

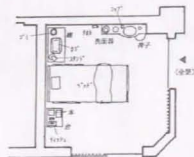
時間的関係 物はほとんど自宅に残してあり、その当時の生活をほうとつとさせるような物は置かずにない。また、切り除き置など、そのときどきの単発的な事は見られるが、時間的柔軟性を感ぜさせない。机に入っている本はノートだが、これからは自分で行くので、本を置くようにしている。冷蔵庫に置かれたお嫁さんの写真は、現在の自分の関係を示すように、次世代への連続性を表していると言われているようになっている。

施設に対する評価 施設を終極の家としてではなく、いつか自宅に帰ると思っており、家具も自宅に置いたままで居室への持ち込みは多くない。「家具は部屋についていた。お嫁さんが置いてくれた。それを必要ならだけ」「荷物持ちの者が来たときに入居して居る。うちには自分のダンスがあるもんだ。」「施設生活と言うことで自宅とは異なる気遣いをしており、「皆で住んでますので、様子のよいだけ移されるのわいやなので、マスタグをして分ります。」「ベッ」欄は自分で取って置いた。」「入居の時は(巾着)紙かに入れて持っていました。紙とかがかたか、株にいいようなものを持って。」「おいお茶がほしい。もったいのものをくわいれ。」



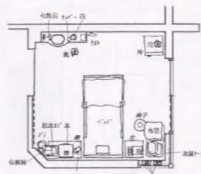
Zone	When	Activity	Who	When	Notes
Private	自室	読書・俳句・裁縫	一人	夜間	個人
		散歩	息子 村の友人	週に1回ほど 5:30~6:00	個人 村の様子に取る
S-Fit	広間・下ろ	新聞・読書	一人、誰か	日中かなりの時間	個人
		会議	広間集まりの人	居合わせたとき	open
		音楽教室	集まりの人 社会的な友人	9:30~10:00 不定期	program
S-Pub	食卓	食事	全員	10:00	program
		イベント	全員	7:30, 12:00, 17:00 不定期	program

940808



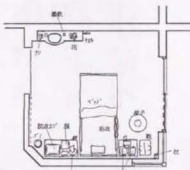
W16

950801



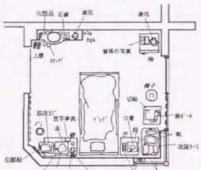
E14

941101



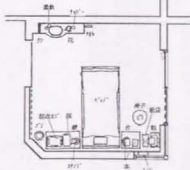
E14

960214



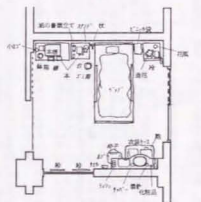
E14

950303



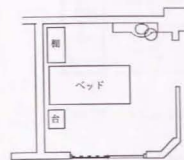
E14

960625



E12

940808 W16



960214 E14



#### ■居室の環境形成

自宅が近くに残っており、いつかは帰りたいという意識があるためか、居室へ自宅から家具を持ち込むという事は見られない。特に畳にも物が増えてきたため、衣装ケースを持ち込んだ他、職員から小さい本棚をもらい増えたきた本を整理できるようになった。冷蔵庫も持ち込まれ居室の機能を高めたり、花や観音など飾り付けもするようになり、自分の居場所としての意識が高まっていると思われる。

#### ■自己の達成

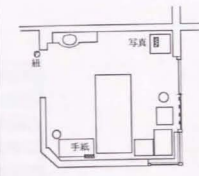
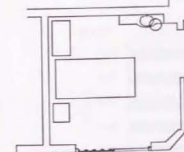
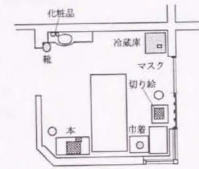
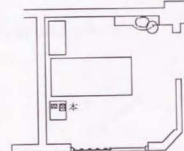
冷蔵庫が持ち込まれ、その中に自分の好きな物や飾りにもいのを入れている。それを食事の時にもっていたり、自己管理に役立っている。また周りの人から感謝などをうきさるようになり、職員に感謝する本を持ち込んだりするなど、自己の管理という意識が高くなってきている。本を読むのが趣味のため家族らに持って来てもらった本が増え、職員にももらった本棚に整理して置いている。(はじめはかなり乱雑に置いてあったが、次第に整えて置かれるようになった。) 自分よく読む本を手前に置くなど、意味付けもなされている。最近始めたちぎり絵とその道具が保に置かれ、居室での新たな活動となっている。床置台の引き出しにはノートがあり、毎日日記わりに辞句を作って書き留めている。自分と向き合う機会を与え、感動している自分を確認できる物となっている。

#### ■社会的関係形成

船夫のいで、他人の部屋に入ってイタズカするふいふという態度を聞いて、自分の部屋に入ってこれないよう、外に出るときには扉を締めて開かないようにする。訪問者は家族の地にも地域の友達がよく来てくれる。せつかく来たときにお茶の準備もできないことを残念に思っている。

#### ■関係性の表示

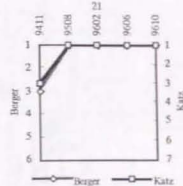
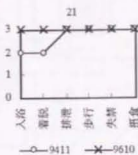
冷蔵庫の上に子供の写真を置かれるようになり、家族とのつながりを思い起こさせる物となっている。いつか自宅に帰りたいという意識の表れか、これまでの生活との連続性を示すような人形を入れたときに自宅から持ち込んだ物はほとんどない。ベッドのカーテンは自宅から持ち込んだ物であり、数少ない過去とのつながり示す物である。



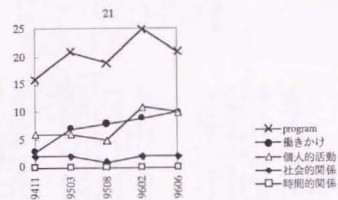
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋		E20	E20	E20	E20	E19	E19
Katz		C		A	A	A	A
Berger		3		1	1	1	1

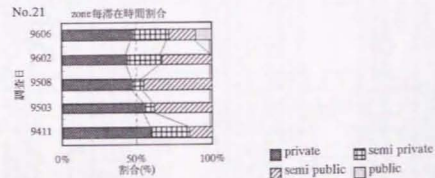
Katzスケールによる動作能力の変化



## 家具の持ち込み状況の変化

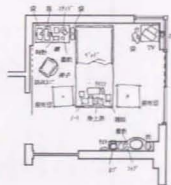


## zoneごと滞在時間割合の変化



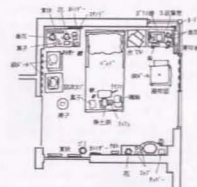


941101



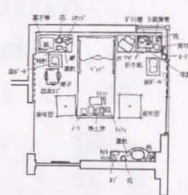
E20

960214



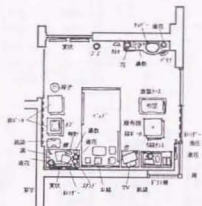
E20

950303



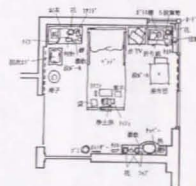
E20

960625



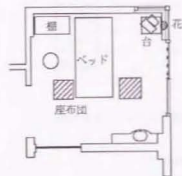
E19

950801

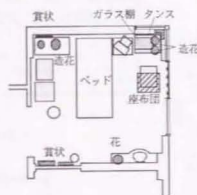


E20

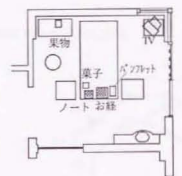
941101 E20



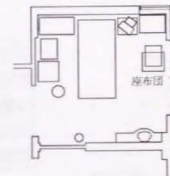
960214 E20



■居室の環境形成  
入居前は施設の家具以外に特に持ち込みはなかったが、その後、壁に壁タンスとガラス櫃を買ってきてもらった。それでもまだ余裕は、壁ボードに入れて部屋に飾られていた。お花などがたくさん飾られるようになったほか、施設の間接でもらった紙の飾りや賞状なども置かれている。部屋の掃除をたたくと、常に目隠しをすると言ふような環境のコントロールは行っていない。部屋の歪め方は自分で決めてもらったが、歪め方はあくまで自分ではない。居室を改修した人であり、訪問者が来たときにはベッドの両側に壁、反対側は反対側になっており、壁のまま入り口の窓から外の様子を見ることができたり、洗面で訪問者を応対できるようなになっている。



■自己の達成  
TVが持ち込まれ、他人に気を遣わずに自分の好きな時間好きな番組が見られる。枕元などにお菓子や薬物などが置かれ、チョコを食べたいときに要求を聞かすことができる。薬味、歯ブラシがないが、枕元に仏龕の本が置かれており、毎日それを返してお祈りしている。このベッドの枕元でいろいろなことができるような環境を形成している。自宅にあった仏壇も持ってきたが、夫きす着て持ってこれないので、その代わりに毎日の顔を替えることになっている。



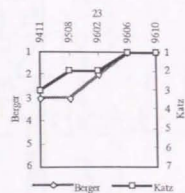
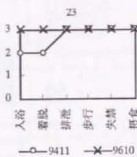
■社会的関係形成  
近くに子供や親戚がいて、よく来てくれる。また、施設内の友達も訪問して話をしたりしている。訪問者が来たときだけ、ベッドの枕元の両側に産布団を一枚ずつ敷いて、部屋の道具としている。お茶の道具がないので、誰か来てもお茶とはおきかない。

■親類性の表示  
家業は比較的良好で来てくれ、また施設内での社会的交流も高めに合わせている。早くに遊び付きを息子のような物は置かれていない。それよりも部屋には施設でもらった賞状や飾り、ボードなどが置かれており、施設の入居者の一員として自分を位置づけ、日々生活を送っているのかもしれない。

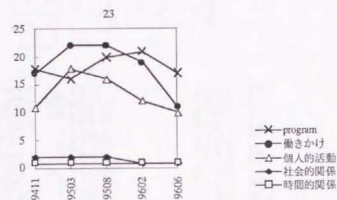
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋		E17	E17	E17	E17	E18	E18
Katz		C		B	B	A	A
Berger		3		3	2	1	1

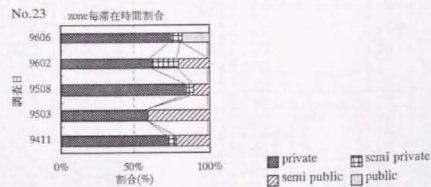
Katzスケールによる動作能力の変化



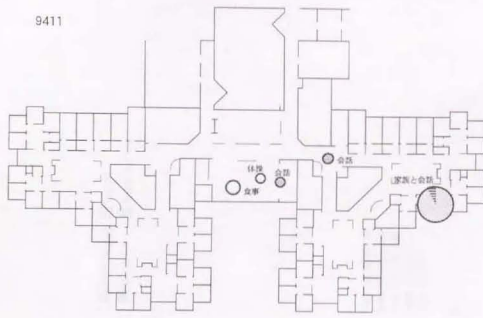
家具の持ち込み状況の変化



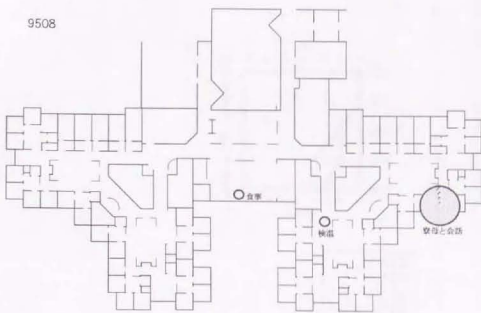
zoneごと滞在時間割合の変化



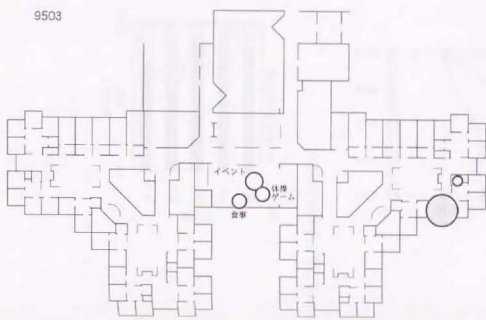
9411



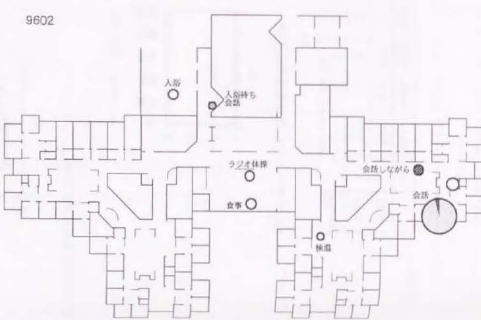
9508



9503



9602



## 23 NH (86歳 女性)

**心身状況** 高老はない。身体的にもほとんど自立している。腰が痛いので歩くときに杖をつく程度。一時体調を崩したことがあったが、また回復に向かっている。ただし、だんだん目が悪くなって見えなくなってきた。

**これまでの生活** 自宅は愛本地区で昔の地主。いまでも大きい屋敷がある。「ここへは身の回りのものだけ持ってきた。家にはまだいっぱいあります。一軒の家じゃけ。」ときどき息子に迎えに来てもらって暮らしている。「私といときは奥はやさんだとも、ほんとかと草だらけになってしまう。」ここに入る前は、魚津市のサナトリウム病院に入院していた。

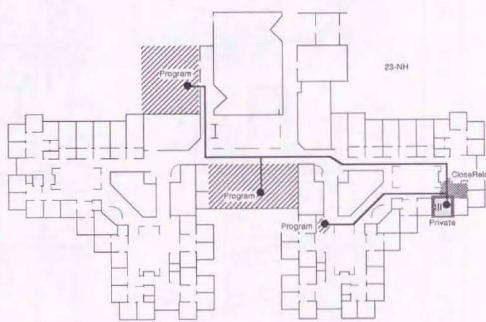
**自分のすること** 一日のうち、自宅で過ごす時間が多い。居室前の共用スペースですごすことはほとんどない。目が悪いのでTVはあまり長い時間見られない。「2〜3分でもやめちゃう。」元気なときは階段で紙の煙草づくりをしていた。「ここに来てから気兼ねせずにここで作っても良かった。作って掃除の手伝いもある。」その後階段が朽ちてしまったときは、食事のとき以外ほとんど部屋で伏せていた。体の方は回復してきたが、目がだんだん悪くなり、煙草もあまりつくれなくなってきた。「(4〜5日前から)歩くのがやっとなりました。あまり外にも出られません。」

**社会的関係** 部屋割りではなるべく近者が近くの人を集めており、仲良し4人組を形成しており、食事の時なども皆で酒を飲んだりおしゃべりする。目と腰が悪いので、誰かに手を貸してもらってもらう。毎週のプログラムで皆と一緒にいるときの指、ペンチとかでちょっと話したりはする。仲良し4人組ではあるが、お互いに部屋を行き来してお喋りするということはありません。西棟の人とは「この数の日だけ、あまり言葉も交わしません。」  
 家族は、3男が近所での良くなる。「ちっちゃかちゅんで世話好きのが好き。金魚の水や花の水を換えたり。後継者も4日に1度取り替えて来てくれる。」またこの息子が迎えに来てくれると、自宅に帰ることが出来る。

**時間的関係** 自宅での生活とのつながりを示すものとして、博多人形が持ち込まれていたが、その後自宅へ持って帰られてしまった。壁一面に貼られた折り紙の鶴は自分で毎日つくって飾ったものであり、自分の現在の活動を表すものとなっている。曾孫の写真は、現在の自分の人間関係のつながりや表すとともに、次世代につながる時間的連続性の中に自分を位置づける手段となっている。

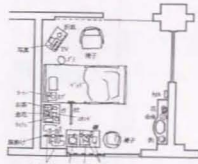
**自宅** 自宅は愛本地区で昔の地主。いまでも大きい屋敷がある。「ここへは身の回りのものだけ持ってきた。家にはまだいっぱいあります。一軒の家じゃけ。」正片には「家の方が悪い。ここは全部奥の部屋に入ります。家は大きいです。私はいくらでも入れたいんですけども、ここにはまだいじりたくもないです。不便。」

**施設に対する評価** 部屋の配置や持込物は、自分で都合のいいように、子供にやってもらった。低層には逆光のカーテンを付け、自分でつくった折り紙で飾り付けてあり、着つけた自分の関係も形成している。入浴前に洗濯機でユニットバスのような空間を覗き見たいが、ここにはそのような関係はなく、「ここには着物を着ています。」正片に家に帰って来たが、「家の方が悪い。ここは全部奥の部屋に入ります。家は大きいです。私はいくらでも入れたいんですけども、ここにはまだいじりたくもないです。不便。」また「隣で話しても話で聞き、イヤホンも使われません。ここにいた方が気楽です。食事も食べやすいですよ。」と、家に帰ることよりも施設にいることを評価している。今、家に対しては「行きたくもないです。不便。」



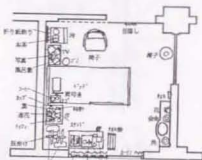
Zone	Where	What	Who	When	頻
Private	自家	折り紙	一人	いつでも	1日5〜6回、必ず作る。一件なくなるとまた
S-Pri	居間	会話・一緒に移動	民間関係の人	食事・休憩などの行き帰り	仲良し4人組
S-Pub	広間	絵画	見慣れた人	9:30ころ	program
	食堂	体操	全員	10:00	program
	共有	食事	全員	7:30, 12:00, 17:00	program
	イベント	イベント	全員	不定期	program

941101



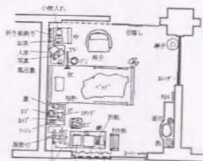
E17

950303



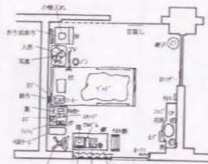
E17

950801



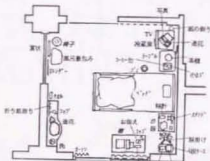
E17

960214



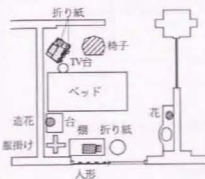
E17

960625

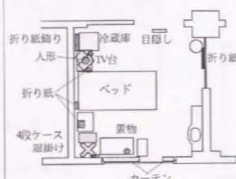


E18

941101 E17



941101 E17



## ■居室の環境形成

自宅から持ち込んだ置物やスタンドに加え、新たに吸の置物ケースを買って持ち込んでいる。目が悪く外の光がまぶしいので、置物ケースにカーテンをつけたり入り口に障子をして居室の環境をコントロールしている。障子もきつと埃を払う程置物は、居室の障子を存在することが出来た。障子もきれいな折り紙が壁や引き出し、テレビの上などにいろいろな色で貼られている。また置物ケースの子猫も自分で買って貼りに付けた。これらは自分で手を入れたディスプレイであり、自分の居室のオリジナリティを出している。自分が置物ケースが得意な部屋として自由に部屋の模様をなっていると思われる。自宅から持ち込んだ置物やスタンドは、結構調を崩した部屋に感じて居られたようである。モディフィングとして自宅から置物の椅子を持ってきており、自分で置物ケースの置物の置き場所として置物を持ってきていたが、子供が持ち帰ってしまい残念に思っている。

## ■自己の環境

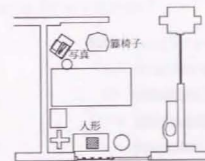
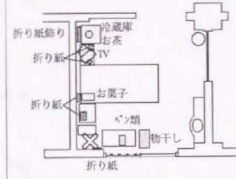
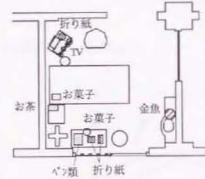
自宅から持ち込んだ置物やスタンドがどれも好きではないが、目が悪いためそれほとは見られない。机にはケースやコーヒーの由にお菓子を入れており、自分の好きなときにちょっと食べられるように置いている。机には多くていろいろも部屋の中で折り紙で壁を作るが、これは親戚などで他人に気兼ねせず自由につけるようになった。作った置物は部屋にいくつも置く。置物があるほか、機に入れて置物の子猫たちもあがることを楽しみにもしている。他に一人分の置物しただけではなく、外の社会とのつながりもなっていた。最近ではだんだん自分で置物も作って置けるようになったので、目の置物も作りたいほどとできなくなってしまった。

## ■社会的関係形成

入り口の目の置物は他人の置物を控えて入り口の目の置物。置物からの光をコントロールする。居室に持ち込んだ置物の置物ケースは、自分で置物ケースが得意な部屋として自由に部屋の模様をなっている。自分が置物ケースが得意な部屋として自由に部屋の模様をなっている。自分が置物ケースが得意な部屋として自由に部屋の模様をなっている。

## ■置物の表示

テレビの上には置物の写真が貼ってあり、居室との置物がある。居室に持ち込んだ置物の置物ケースは、自分で置物ケースが得意な部屋として自由に部屋の模様をなっている。自分が置物ケースが得意な部屋として自由に部屋の模様をなっている。

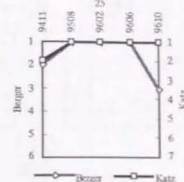
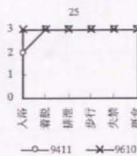




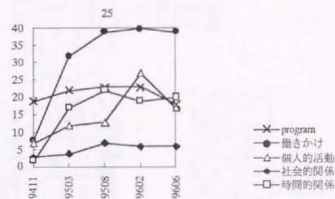
心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	E26	E26	E26	E26	E26	W15	E24
Katz	B		A	A	A	A	A
Berger	2		1	1	1	1	3

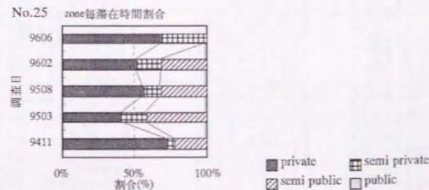
Katzスケールによる動作能力の変化



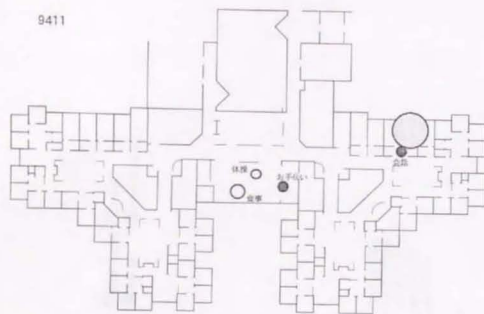
家具の持ち込み状況の変化



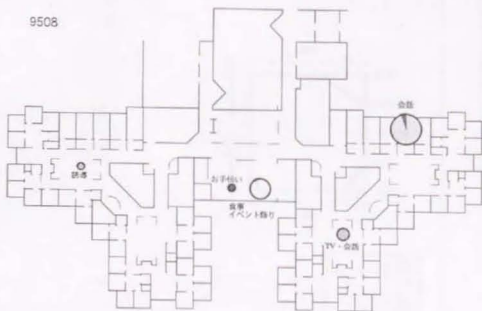
zoneごと滞在時間割合の変化



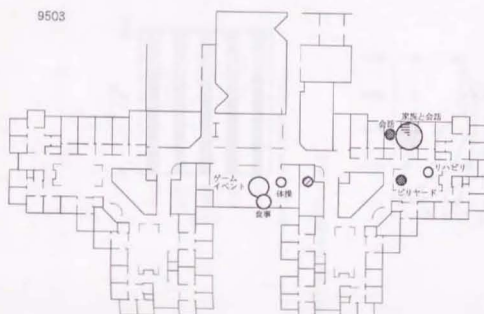
9411



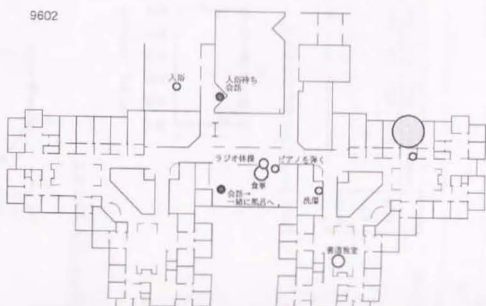
9508



9503



9602



## 25 UY (85歳女性)

**心身状況** 痴呆はほとんどない。身体的にもかなり元気で、自立度は高い。杖など使わず一人で歩いて歩く。耳もよくない。喋るの特性があるほか、心臓・肝臓が悪い。

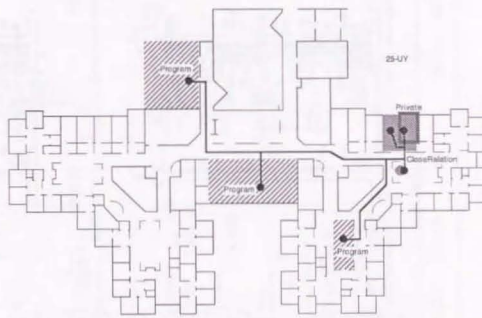
**これまでの生活** 自宅は部屋でしばらく一人暮らしをしていた。「畑で分家のおばあちゃんと花を作って楽しんでいた。」自宅はまだ残っていて、何度か連れていってもらった。畑が1日1日行けて、メンテナンスしている。喋るの発作が出て市民病院へ入院。その後、介護用の老健施設に移って1年過ごす。

**自分のすること** どちらかと言えば自宅が過ごすことが多い。テニールのある共用空間には、用がない限りあまり行かない。食卓でタオル着みなどのお手伝いをすることもある。朝の体操・ゲームや施設行事など。施設のアダプトは積極的に参加している。10月からは習得して昔の思い出も持っている。隣人と仲が良く、向こうの部屋に行っておしゃべりもすることがある。部屋では編み物をちょっとなら、新聞も取っていて、部屋まで届けてもらえる。部屋の使しとかやとか、お掃除の人が来ておしゃべりしないように話している。自分の決断は自分です。できる間は自分でやる。みなのおもてなしもする。

**社会的関係** 隣の部屋の人とは、ここに入居する以前の老健施設で一緒で仲良かった。部屋を行ったり来たりしているが、こちらの部屋では来てもらって座るところがないので、向こうの部屋に行くことが多い。食事や人前の時など、声を掛け合っ一緒に行く。部屋の戸を出たところでも立ち座ることも多い。もう一人、老健施設で仲良かった人がいて、少し距離は見たりしている。たまに来るともある。「何だかんだ、すぐくるよ。」隣の人と言葉は交わすけど、部屋まで入る人はない。「喋ってすぐでも、難しい感じがしないわ。」(隣の会に参加しているのは「最初は何もなかったけど、一歩ずつ、練習したりしますけど、慣れてきたら、練習をやります。TVの見る共用空間にはあまり行かないので、施設のプログラムの参加の時の他に居合わせた人と話す。デイの人と交流はない。「あの人は何をしているのか」と思う。）」施設が閉じて、そこで毎日練習を見に来てくれる。その間に持っている自宅のメンテナンスもしてくれる。ときどき遊ばに来てもらって、自宅の方へ帰ることが出来る。

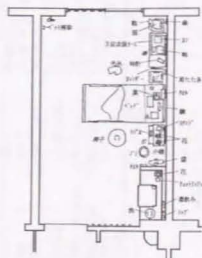
**時間的関係** 入居後しばらくして、自宅で使っていたTV台・食器棚などを持ち込み、以前の生活との連続性を示すだけでなく、普通に行ったり買ったという思いを出し替わったものもなっている。新たに購入したガラス棚には、以前に旅行した時の思い出や、人からもらった物を数多く陳列しており、達成感のつながり、過去の社会的関係のつながりが表れている。

**施設に対する評価** 老健施設で1年過ごしていたので、比較して「老健施設と時間制がにている。行事も多い。何となく楽しくてよい」「ここはもう少し、看護婦の出入りがない。家だ」「4人部屋より気が楽」など、さまざまな面で肯定的に評価している。「最初は何もなかったけど、一歩ずつ、練習をやります。TVの見る共用空間にはあまり行かないので、施設のプログラムの参加の時の他に居合わせた人と話す。デイの人と交流はない。」などの評価は、外から見られるのがいやだから。痴呆の人でどこでも楽な人はいる。」などのコメントが聞かれた。



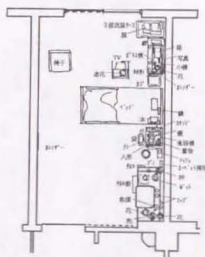
Zone	Where	What	Who	When	頻
Private	居室	編み物	一人	ちょと	
	居室	植木の世話	一人	毎日時間制でいる	
S-Pri	居間	会話、編み物	隣の人TN	ちょとちょと	老健で教しなくなった
	広間	会話、一緒に移動	隣の人TN	食事・体操などへの行き帰り	いつも誘いあっていく
S-Pub	食堂	体操	比較的元気な人	不定期	定期的にあまり行かない
		食事	全員	10:00	program
		イベント	全員	7:30, 12:00, 17:00	program
			全員	不定期	program

941101



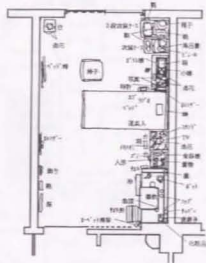
E26

950303



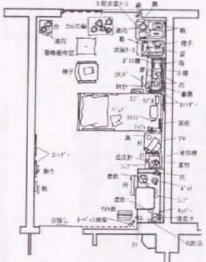
E26

950801



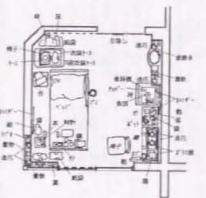
E26

960214



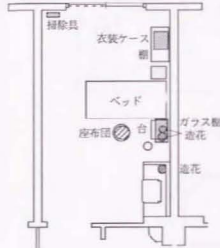
E26

960625

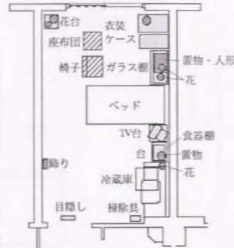


W15

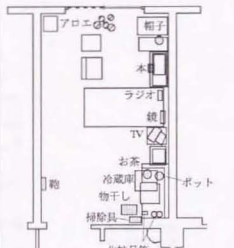
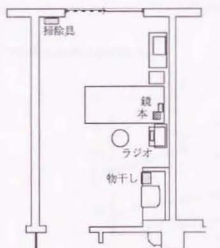
941101 E26



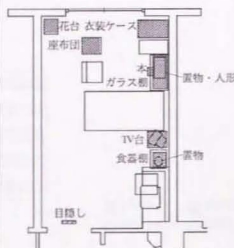
950801 E26



■居室の環境形成  
入居後、隣の人の部屋で使っているのを見て、同じ衣装ケースとガラス棚を買ってきた。その後さらに買い足したほか、昔から使っている食器棚や自宅から持ってきたものになる。部屋の隅は自分で掃除機を買って行い、また入り口の扉に目隠しを貼って外の明かりを控えるなど、居室の環境のコントロールを行っている。ディスプレイも、はじめは造花が飾られている程度であったが、自覚からこれまでにいんな人のものも少しずつ購入してきている。これまでには何もなかったところにある書棚や子供の部屋の家具が買ってきたことに加え、部屋のオリジナルリネイを高く買っている。椅子に座る生活のため、無印の丸椅子に加え、背の高い椅子を持ち込んでいる。



■自分の運成  
TV、ラジオを持ち込んで、自分の好きな時間には好きな番組を見ることができ、本物も持ち込まれ、ちゃんと調べた電波を届かすことができる。新聞は自分で取っており、他人に気兼ねなく好きなときに読むことができる。洗濯、掃除などは自分でやることはなるべく自分でできるようにしている。電気の連絡がしづかさを保持し込んで、自分の生活は自分で好きなものを元入れて飲めるようになっている。部屋ではちょっと本を読んだり雑誌をしたりしていたが、最近では読む気がない。部屋のアロエの鉢を持ち込んできて、毎日世話をしながらアロエの成長を観ている。



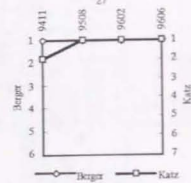
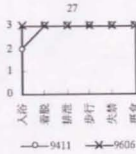
■住居の環境形成  
入り口の窓には、向流の人などに覗かれるのがいやなので、目隠しをつけた。窓の上部は親戚を覗くことがなく、向流の光をコントロールするためにつけている。子供はちょっと大膽を出す。隣の人の友達も、家でも触ることがないので、世界の部屋に行ってしまうことが多い。また隣のおばさんの目を気にして、見られても恥ずかしくないように部屋の扉をきちんと拭いておく。

■購買性の表示  
部屋に持ち込んでいた衣装ケースとガラス棚は、隣の人が使っているのを見てお譲りで買って来たもの。手押りのごみ箱も、隣の人の持ってきたもの。このほかにもお隣のメソはほほきみを買ったりと、二人の結びつきを示すものがいくつも見受けられる。家が準備しはじまって行ったため、初期は普通にいき、その時に持ってきた家具や置物、座布団などが、これまでの生活の連続性を象徴すると同時に、各個人が行って来たという思い出を呼び起こし、またその時の縁との関係性をも示すものとなっている。ガラス棚には数多くの置物や人形などは、思い出の品として、これまでの経験や人とのつながりを呼び起こすことに役立つ。

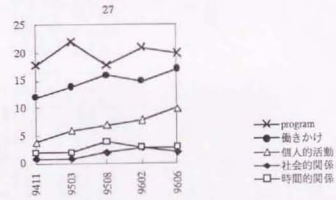
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋		E03	E03	E03	E03	W07	
Katz		B		A	A	A	
Berger		1		1	1	1	

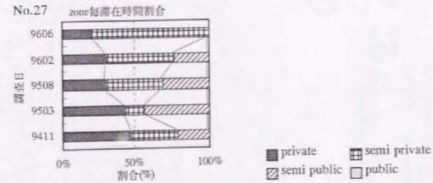
Katzスケールによる動作能力の変化



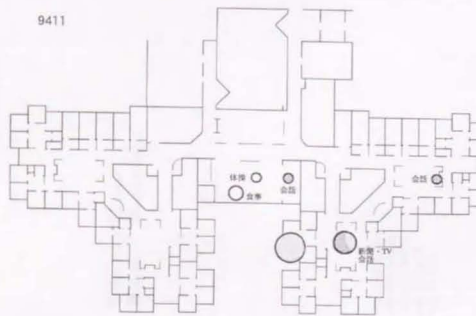
家具の持ち込み状況の変化



zoneごと滞在時間割合の変化



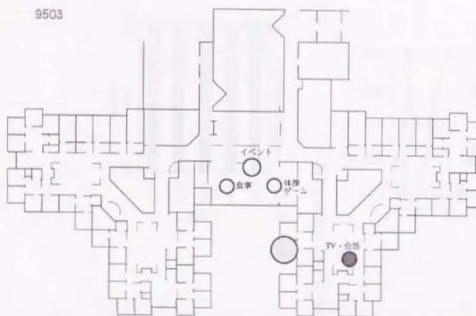
9411



9508



9503



9602



27 KI ( 85 歳 女性 )

**心身状況** 病状はない。体も基本的に完成だが、足が痛く曲がっているため、運動の時には手押し車を使っている。それでも一人で外出できる。週に掃除をするぐらいはしている。耳は補聴器を使えば聞ける。

**これまでの生活** 結婚して主人が建てた大きな家で暮らしてきた。主人が死んでから20年ずっと一人暮らし。夫を使っていたので、5年前に風呂も炊事も全部電気にした。一人の時の生活は、下着半浴びに換気、12時起床、1時夕食、3時晩飯に寝る生活。自分の決めるだけ、20日ほど借金を取ったり、1日1日ほど株の本を眺めたり、車いしをしたりとか。運動にもなるし、習作のような生活だった。今も車が残っている。息子が来たときにメンテナンスしてくる程度なので、時には帰って風呂入る。

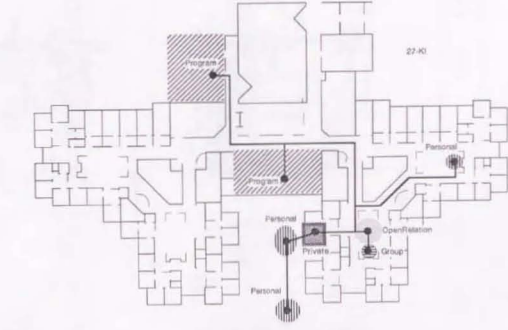
**自分のすること** 一日のうち、比較的長い時間を居部屋の共用空間で過ごしている。組間は真ん中で新聞見たり、TV見たりしている。「新聞は3紙あるし、TVも見るし、部屋になくてはいい」TVは毎週買ってきて見ている。「新聞は早くおぼえたいから」その時に原付を乗って来たか会社する。食事などで過ごすことは少なく、「食事にはお行きという感じ、アトラクションは特別のことという感じ」、外の観覧車から乗り回れるという仕組みがある。「前にも来たので東京のジョイイややらになったの。おなじみやおなじみになって、みんなおなじみになった。夏は朝倉に遊びやったり、外のプランターの鉢、私、全部世話してる。」「無理せよようにせず休養かして。後は文化から。畑は全部一人で。取むしりとか、ちょっとうちこんで見てはいい。他人にしてくれと頼んでも、自分一人できるとして。」「一人でリハビリ器具のところを要するところ運動を毎日必ずしている。「屋の運動、腰が悪いもんだから。」「TVは朝のテレビの放送を毎日必ず見ている。趣味は読書、こまごまとした。

**社会的関係** 他人の居るのと同じには遊びに行かない。「人と話すときにはその居るのところに遊びに行けば、誰かいる」ので、個室がなくて寂しいことばっかり。結構楽しく過ごしている。この人たちは特別に仲良くしているわけはないが、皆で夜道を歩かぬから仲良くして、夜道になつてくる。共用空間ではほかのグループに話しかけていたが、その後のテレビの最新情報に響かなくなった。子供は、息子が東京と都立。娘は黒部と宇奈月にいる。ここに入る手続きは決まっていた。息子の店舎が年功から、月々何回も入れ替わっている。息子が来るのは3月5日から。来たときには家のメンテナンスも、娘は時々来てくれる。子供が来てもらえるように、電気も水道も付けたままにしてある。「いい水ばかり飲んで家作ったが僕も入ってないが」。夏になったら娘が家に帰って、お前りしようと言ってくれる。子供たちが帰って来たのは感動を大事にしている。

**時間的関係** 自宅でしていた農業を止めて、施設のプランターを借したり、小さい畑で作物を作ったりと、以前との生活の連続性がかなり残っている。自宅にはTV、小さい畑や、青果採りなどが残っており、自宅との連続性を残している。

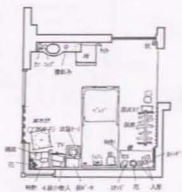
**自宅** 一人で30年暮らしてきた。父ちゃん死んで25年。全部電気にしたが、万が一のことを考えて、いい風呂ができたら、入れても良かった。娘と正月に子どもが家に来てくれる。僕がいつても来られるように、電気も水道も付けたままにしてある。いい水ばかり飲んで家作ったが僕も入ってないが。

**施設に対する評価** 施設の共同生活ではあるが、「うちにも今まで一人で来たから、ここで一人で居ても寂しくない。家にいるのと同じくらいはいい。何もないから、こまごま」。と、一人で居ることが強さされている。個室であることの影響も大きく、「自分一人の部屋だから、通達することもないし、自由に出来る。」「一方共同生活にしても、そこには何かがあるから、結構楽しく過ごしている」と肯定的に投入している。自分のペースを守りながらの生活と、誰かと話したいときには気軽にコミュニケーションできる関係が確立している。このプライベートと、プライベート空間に対する評価は同じ。セパレート空間に対しては「食費もよす行きという感じ、アトラクションは特別のことという感じ」。ただし、以前は職員の人とボール遊びなどしていたが、「人数が増えて職員の人が入ってきていて、やらなくなってしまった」と残念がっている。施設のプログラムに対して期待している様子もあがかる。



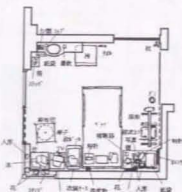
Zone	When	What	Who	When	What	誰
Private	自宅	TV	一人	朝と夜寝るまで		新しい心
S-Pr	テレビ	読書	一人	午前月全		
	広間	TV・新聞	広間利用の一人	毎日必ず	居合わせたとき	誰か聞いて
	広間	TV・新聞	一人、誰か	居合わせたとき	後は7時頃まで	新聞は読まるとしては真ん中に居てくれれば
S-Pub	食堂	比較的近所の人	比較的近所の人	居合わせたとき		
	食堂	比較的近所の人	一人	10:30-10:40		program
	食堂	比較的近所の人	一人	17:30, 18:00, 19:00		program
Public	イベント	イベント	全員	不定期		program
	イベント	イベント	一人	職員は職員から		全部一人で見てもいい

941101



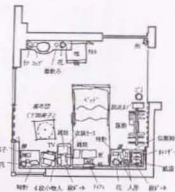
E03

960214



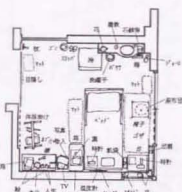
E03

950303



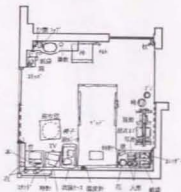
E03

960625



W07

950801



E03

941101 E03

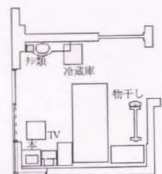
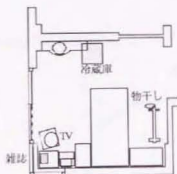


960214 E03



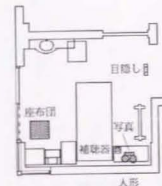
## ■居室の構築形式

自宅から居間スペース・洋服掛け・小物抽斗・冷蔵庫などを移してきた。その後は直体ケースが一増えたが、部屋の大きな変化はない。人形も自宅から譲、飾ろうと思っただけで飾り込んだ。これまでは人形らしき、人形の観点で自分で自宅からの持ち込みを整理して、居室の環境を整えた。居室の環境も植物を移してきたことで自分であるというように、居室の構築をコントロールしている。入り口の窓に、目隠しが付けられるようになった。部屋では床に植物を飾り、子供の遊んでくれた座布団を椅子に置いて座っている。



## ■自己の達成

TVは最初から自宅から持ちこんでいる。雑誌は共有空間で皆と一緒に見ているが、夜寝る前や朝は自家で一人で見るというように、使い分けている。雑誌・映画は基本的に雑誌でやってくれるが、こまごまとしたところの雑誌の小物の洗濯など、自分でやることはなるべく自分でできるようにしている。自家は椅子座の生活であるが、これは自身の生活スタイルに合わせてという意味もあるが、床やベッドに寝ると布団が汚れると思って、自分の生活をコントロールしている意味もあるようである。雑誌・目隠しはどっからかという意外の物件を手配して取り、部屋で何かをするというこれはあまりない。



## ■社会的関係形成

入り口の窓に目隠しが付けられるようになった。とくにコマンドはなかったが、外の物や風景はやはり他人に覗かれることに対する意識と変わる。子供の家の家族は時々覗いてくるが、雑誌で仕事はやはり共有空間に関わり、お互いの距離を歩き来るとはしない。

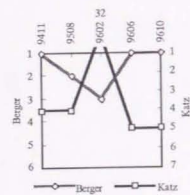
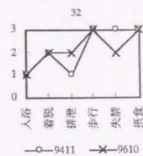
## ■居室の表示

つつも座っている座布団はこまごまと買ってきたもの。またこのあいだの誕生日に、子供が母に、いい雑誌をプレゼントしてくれた。居室には自分で選んで持ってきたTVや小物抽斗、人形など。以前から譲り渡されたものがある。ある程度単純性の高さを定めた環境となっている。抽斗の上には30年前になくなった夫の写真が置かれ、妻の思い出とつながりを呼び起こすものとなっている。

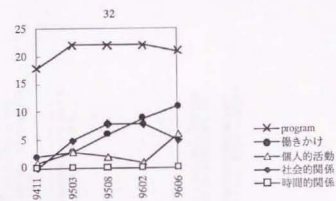
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋		W15	W15	W15	W15	E15	E15
Katz		D		D	O	E	E
Berger		1		2	3	1	1

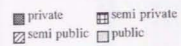
## Katzスケールによる動作能力の変化



## 家具の持ち込み状況の変化



## zoneごと滞在時間割合の変化

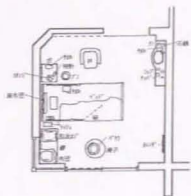


32 UF ( 92歳 女性 )

心身状況	体は右片脚痺で車椅子を利用している。身体的な自立度は決して高くないが、痴呆は全くない。「私はおかげ様で元気。右片方面のためなので、人のお世話ばかり。」
これまでの生活	家は黒部の石田。駅のすぐ前で、便利なんよ。市民病院に1年くらい居てった。それからカリエールに1年か2年。そこで奥谷さんと高島さんと一緒。その後歩けるようになったから、家に帰ってしばらくいた。ベッドから降りるときに腰まわりをこねてベッドから落ちた。それから歩かれないようになった。家に居たけれどもここが出来ましたから入れてもらったの。
自分のすること	日中はほとんど居家で過ごしていることが多く、食事や体操などの全員参加するプログラムのときに食堂へ行く以外は共用空間に出ることが少ない。「寝てばかりいる。食べて寝てばかり。」
社会的関係	魚津の老健施設で一緒だった人が入居して、かなり親しい。車椅子を押してもらったり、何かと面倒を見てくれたりする。こちらから行くことは少ないが、向こうからはときどき部屋に来てくれて、話したりする。 家族との結び付きをかなり強く持っており、部屋には子供や孫からの手紙や写真を壁に貼ったりしている。「手紙いっぱい来るんよ。林来られんから、手紙と写真よく来る。ばあちゃん読みやすいように大きな字で。」
時間的關係	孫や曾孫からの手紙や写真をとっておき、また壁に貼ったりすることによって、次世代につながる未来への時間的連続性の中に自分を位置づけることが出来る。
自宅	家は黒部の石田。駅のすぐ前で、便利なんよ。うちにおったら、黒居入るがとおしこあるでしよ。それが面倒なの。着換人が一人だけでは倒れたらとそればかり心配して。お父さん一生懸命やってくれたけど。ここにいらしたら毎日感謝してる。心から喜んで嬉しいが。
施設に対する評価	「うちにおったら、黒居入るがとおしこあるでしよ。それが面倒なの。着換人が一人だけでは倒れたらとそればかり心配して。お父さん一生懸命やってくれたけど。」と、もともと在宅でのケアの限界を感じて入ってきたので、「ここにいらしたら毎日感謝してる。心から喜んで嬉しいが。ここはいいんばっかり。」 一人部屋については「大勢の部屋だと気遣いせんならん。一人だと気楽。家の人が来ようと何してようと気遣いがない。」「寂しいか聞かれども、なに寂しいことない。寝てばかりいる。食べて寝てばかり。外にいけば誰かいるし。」

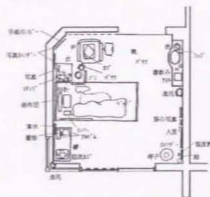


941101



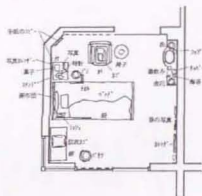
W15

960214



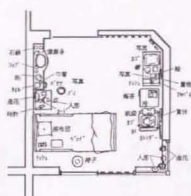
W15

950303



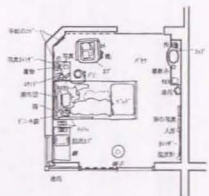
W15

960625



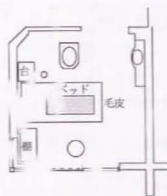
E15

950801

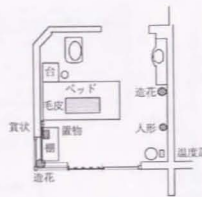


W15

9-1101 W15



941101 W15



■居室の活用等  
 入居当初は高級の家具だけでほとんど持ち込みのない空間だった。その後家具類は持ち込まれたいが、途中で人形などが置かれるようになったり、子供や孫の写真や手紙、孫の描いた絵などが数多く壁に貼られるようになった。物の入とは異なる自分だけのつなぎが、次第で壁の環境が構築されてきた。先述した毛皮が、温度のコントロールと、もに自分の部屋という距離感を高めていると思われる。

■自己の達成  
 休みたいと願ってきたため、居室で何か出来る事はないかと考えて、先述に親戚の子の魚が置かれ、好きな時間にちよと食べることが出来る。

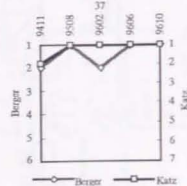
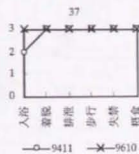
■社会的関係形成  
 ■孫の成長

子供や孫から来た手紙や写真、写真で残ったカレンダーなど、いくつも壁に貼られており、また孫のアルバムも置かれ、家族とつながりながら費費に示され、子供や孫たちとの結び付きの中で自分な達成感を感じることが出来る。同時に、写真に写る時間の中で自分の自分を位置づけることができると思われる。

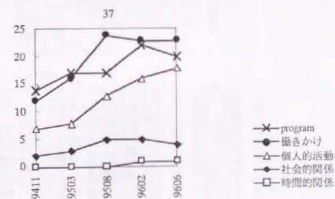
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	E27	E27	E25	E25	W18	W18	
Katz	B		A	A	A	A	A
Berger		2		1	2	1	1

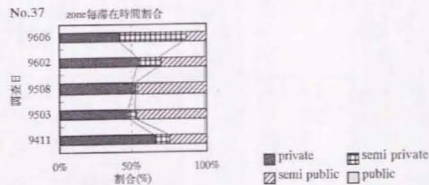
Katzスケールによる動作能力の変化



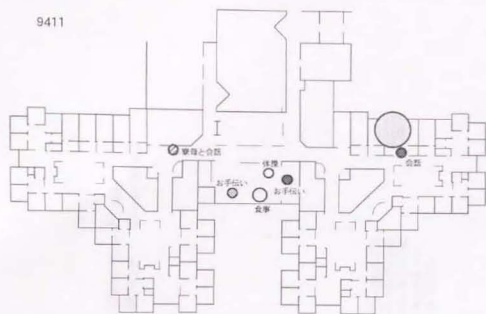
家具の持ち込み状況の変化



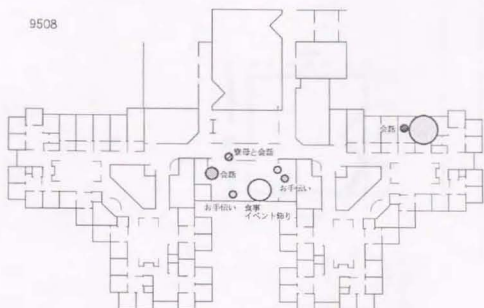
zoneごと滞在時間割合の変化



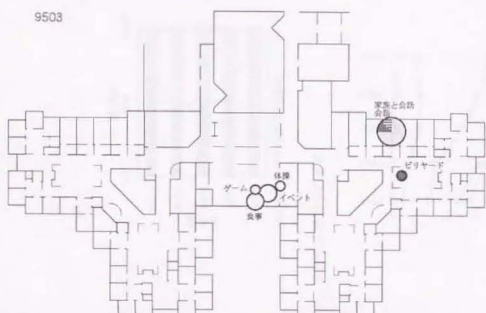
9411



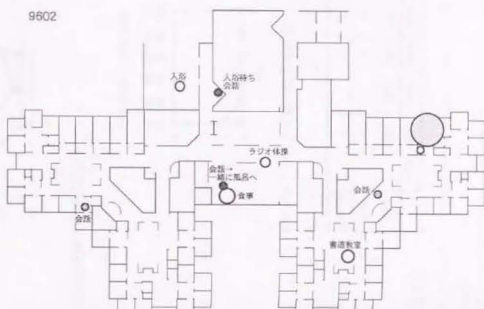
9508



9503



9502



## 37 TN (80歳女性)

## 心身状況

病後はほとんどない。身体的にもほぼ介助なしで、自立度が高い。薬を指しているので、歩行の際には歩行器を使用している。

## これまでの生活

自宅は入居前でも一人暮らしをしていた。薬を指して病院に入院。ここに入居する前は毎日の老健施設に3か月ほどいた。「入居施設」を施設設計では楽しみや喜びと入れを紙で作りつけていた。一人でそればかりやっていたので、編み物をする時間はなかった。

## 自分のすること

居室で過ごすことが比較的多い。居室外の共用空間で過ごすことは、施設のプロگرام（映画・おやつ・音楽鑑賞など）以外にはほとんどない。施設のプロگرامに似たような趣味、おしぼり着きのなどのお手伝いにも、積極的に参加している。今朝は早寝早起きで廊下を歩く。他にも歩いている人がある。夫の写実は壁が掛ってきつてきた。10年くらい前の写真。結婚写真である。家にあるときは仏壇がかった。居室では、「何をやる時間もないので、存分なな」と思って、編み物を始めた。編み物はベッドに座って、「椅子のカバーや座なども編んでいる。ただ、「最近具合が悪くて、手もやがてない。指が何分編みかといって毛糸を持って来たが、編み物がなくて、買物にも行かない」。以前に老健施設でもつくっていたので、ほうすの人に毛糸を借って、紙で型紙を作ってもらっていた。居家の時は自分ではしない。「型紙だから何かしなくちゃならぬ。」と型紙は色紙で買ってきている。他に使う人は知らない。その後、編み物は買ってきてやめた。居室のお手伝いも、「このごろ音が強がりでいらいしてが

## 社会的関係

隣の部屋の人はおなじやうだが、老健施設で一緒だったので友達になった。部屋に来たときには、ソファに並んで腰掛ける。だいたい毎日来る。一緒にちゃんちゃんこを編みだす。もう一人老健施設で一緒だったとも「おなじやうだから、おなじやう」。隣の部屋の廊下へ行ってちゃんこ腰掛を見たという。他の部屋に行くことはあまりない。「新しく入ってきた人はいるけど、付き合ったらんらんらん」。お手伝いをする人はだいたい1人で来ているので、後で物を持ちながら来たりする。娘は、部屋についている。週に1回くらい来る。夕食の時と、お風呂の時は娘から来る。夜勤の時は無理。お菓子を持ってきてくれるので、隣の人さんと分けて食べる。

## 時間的関係

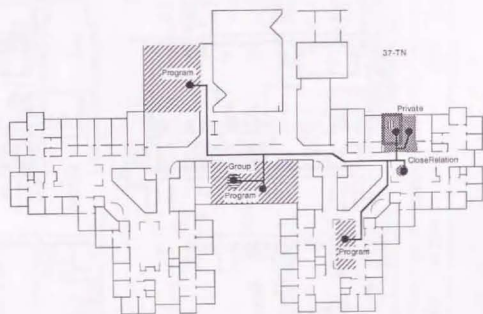
部屋のソファに子供に持ってきてもらった物だが、以前の床屋との連続性というよりも、現在の自分のに合わせたセティングである。ソファや椅子に掛けられた編み物は、自分の現在の活動軌跡を表す物となっている。入居後しばらくして、子供が夫の写しを持ってきてくれたので、過去の思い出を呼び起こす。衣袋ケースやガラスの箱など子供の人とおなじであり、今現在の社会的結び付き

## 自宅

自宅は入居前でも一人暮らし。「お宝には自宅に行ってきたが、その後はいつとられませんでした。お宝に息子をなくして、その時は騒音分たがりますが、騒音にばかりいて、何でともないし出たりして騒音もなんだと。このうさぎのものも楽しんが。

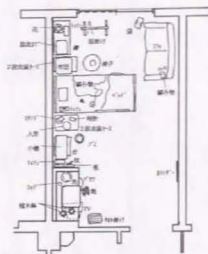
## 施設に対する評価

施設生活のものに対しての要望や不満はさほど聞かれなかった。あえて言えば「こちらでは、夕食の時間が早いので、まだおなかが空かない」という程度。施設のさまざまな行事・プログラムは楽しみにしている。「すっきり履いて正月早々に帰らない。帰ってもいい」と、自宅の一人暮らしよりも施設での生活の方が自分の自分に合ったようである。



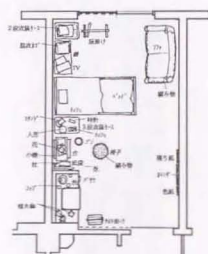
Zone	Where	What	Who	When	How
Private	自宅	編み物 会食 会食 会食	一人、UVと一緒に 誰のUV 誰のUV 誰のUV	いつでも 朝 夜 夜	何をやる時間もないのうかなー →最近具合が悪くて嫌しい ワに並んで腰掛けるでいい
S-Pri	居間 廊下 広間	会食、一緒に移動 散歩 清潔教室	誰のUV 一人 比較的年配の人	食事、体操などへの行 易い 毎朝 不定期	いつも黙っていて 他にも何の歌もして program
S-Pub	食堂	食事 イベント	全員 全員 全員	10:00 7:30、12:00、17:00 不定期	program program program
	食堂材料	お手伝い・会食	子供・仲間	昼食、夕食後	お預りしながら仕事

941101



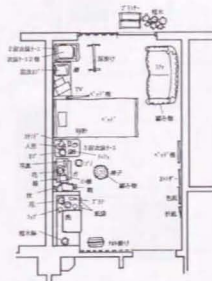
E27

950303



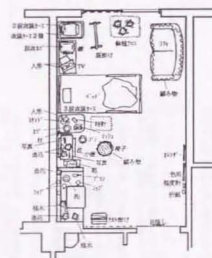
E27

950801



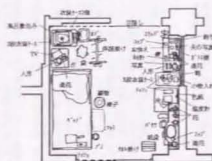
E25

960214



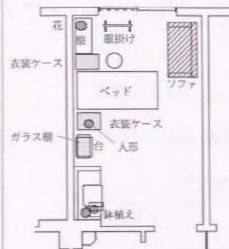
E25

960625

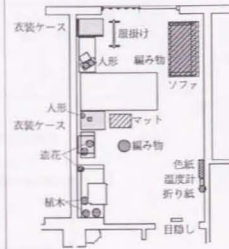


W18

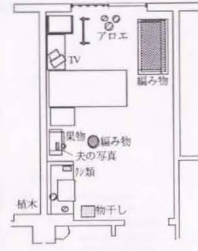
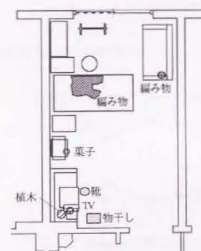
941101 E27



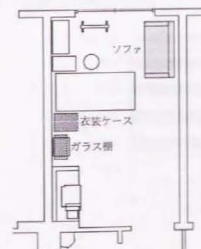
960214 E25



■居室の環境形成  
自分の持ち込んだというよりも、衣装ケースや洋服箱が、ガラス棚など、ここに人形の箱（人形してから）買って持ち込んだ。人形自体ははじめからに買わなかったと言っていたが、周りで目隠しをする人が増えてくるとともに、目隠しを手子するようになった。植木や観葉、人形などの飾り付けは当初からなされていたが、次第に増えてきている。子供が持ってきてくれたものもあるが、自分で買った持ち込んだものも多く、自分や種別別に整理に働きかけをしている。丸椅子やソファには、自分で編み物や編み物をしてきて、セッティングとしては子供に持ってきてもらった人形のソファが特徴的で、自分で作るほか、隣の仲良しが買ってきてきたときに一緒に買った。



■自己の達成  
TVは持ち込んできたばかりの時は特に見ることもなかったが、次第にソファの壁に置かれ自分の好きなときに好きな番組を見るようになった。洗濯物は自分でできるで、洗濯の洗濯機を使って自分でしている。趣味は、ここに人形してから紙で遊ぶのを作ったり、編み物をしたりしている。時には隣の仲良しの人と一緒に編み物をしたりすることもあり、また部屋の丸椅子やソファに自分で編み物だけを動かす、自分の手の届く範囲とされている。ただ、最近は見合が悪くて、編み物はしていない。線を持ってきてくれた仲良しはこれらの趣味は、自分で決まらずに決まっている。



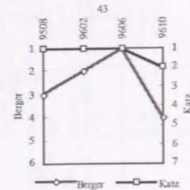
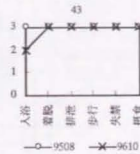
■社会的関係形成  
人形自体ははじめと気にしないと言っていたが、自分で部屋を飾りつけたら居室で活動をするようになったり、また他の人たちがガラスに目隠しをするようになったり、また周りを目隠しをするようになった。居室における他者への意識の度合いの表れと思える。隣の仲良しは、ここに人形の産婦施設で一緒だった人で近くになった。その人がよく遊んで来て、部屋の中で一緒に遊ぶという関係も生まれている。その時はソファに二人並んで座る。

■関係性の表示  
衣装ケースやガラス棚は（隣の人が取って来たものではない）隣の人の手でお揃いであり、またその飾りつけは自分自身の手で買ったもの、つながりやを示すものとなっている。人形はしばらくして子供が先の居室を持ってきてくれたので、人形は先の子供の手に持って飾り付けられている。

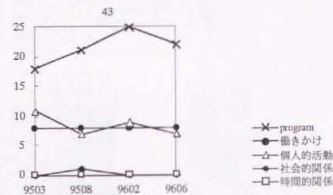
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋			E07	E07	E07	W13	W13
Katz				A	A	A	B
Berger				3	2	1	4

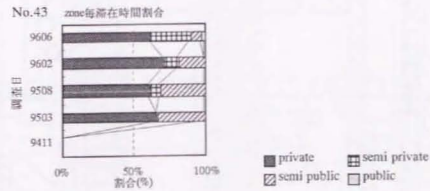
Katzスケールによる動作能力の変化



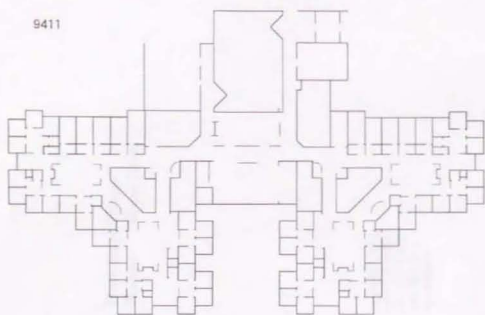
家具の持ち込み状況の変化



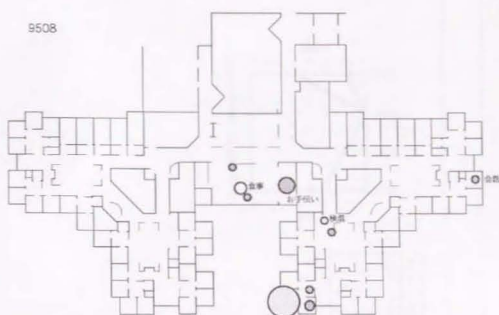
zoneごと滞在時間割合の変化



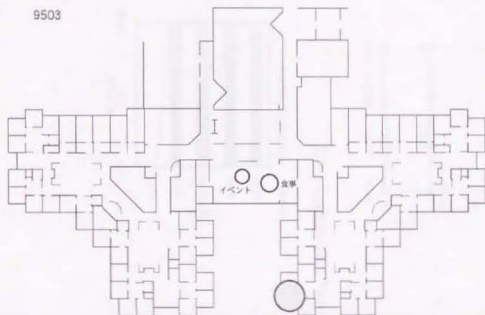
9411



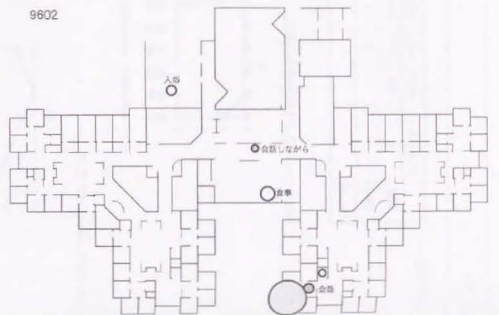
9508



9503



9602



## 43 TT (87歳 女性)

心身状況 病後はほとんどない。身体的にも自立度は高く、普段の生活を上ではさほどの介助を必要としない。

これまでの生活 高齢の家族に家があり、息子の家族と同居していた。「お母さん(私のお孫さん)の家。」若いときは農業していた。

自分のすること 一日のうち、普段は主に自分の部屋にいる。イベントなどにも積極的に参加しない。家で読書をするときにはお孫さんに促されることもある。食卓の片づけには毎朝お孫りしておつとめる。部屋で寝たり起きたり、思ったことを書き留めたり。目が悪くないこともあって「外をぶらぶら歩くのは好きじゃないです。もう年ですから。」部屋には自分でサポテンを持ち込んであり、自分で本を買っている。「目とんと世話をしないでいいです。」サポテンを見ながらぼーっと過ごすことも多い。入浴当時は、掃除機のかさいを持ってきていたので、自分でも掃除していたが、今はしない。洗濯は、孫子のいいときば洗濯機を使う。「たまーに。」

社会的関係 施設のプログラム以外で共用空間で過ごす時間は少なく、どちらかと言えば、部屋の隣室主の人と話す機会が多い。居室すべの外スペースで世話をしたり、隣の孫子の人の部屋に行き詰りたり。食事入浴の時に、お孫子をお孫りしてあげることが多い。「特に仲良しはいません。仲良くしないようにしています。他の部屋に行ったり来たりすることはありません。」家族は高齢に息子がいるので、よく話せてくれる。毎日の時は息子が頻りに連れて来てくれた。家族や交際の準備、部屋のカーテンなどは、お孫さんにやってもらった。「慣れないうちはよく来てくれましたが、慣れてからはあまり来なくなりました。」

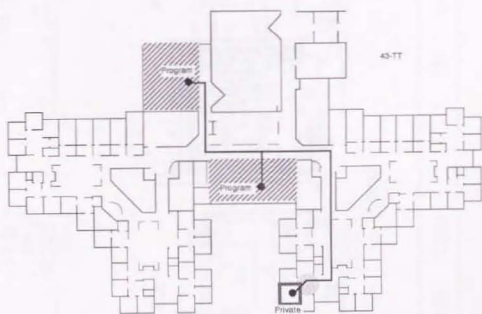
時間的関係 過去からの連続性や過去とのつながりを確認するような物は持ち込まれておらず、以前の生活とは異なる環境で生活しているようである。だからといって現在から未来につながるような活動が行われているわけではない。

自宅

頻りにありませんが、年に2-3回は自宅に帰ります。歳と正月とお孫りの帰りの時くらい。子どもがいて孫がいてはさまであります。家にある仏壇はもっと大きいです。家も大きいです。

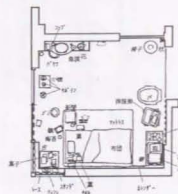
施設に対する評価

施設での生活には「もう大分経ちますから、慣れてきました。お友達もおります。」「結構な生活をさせてもらっています。(これ以上)希望したいことなんて考えたこともありません。」



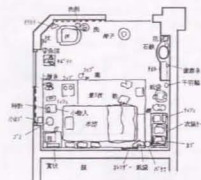
Zone	When	What	Who	When	Where
Private	自宅	思ったことを書き留める サポテン	一人 一人		personal personal close
	他家	読書、会話	隣の人間	夜眠れないときとか	サポテン見ながら読書 宗教の話したり
S-PH	居間	会話、一緒に移動	隣の人間	読書・読書などの行 き帰り	temporary 押し合っている 外をぶらぶら歩くの はなし。
S-PH	食卓	食事	全員	10:00	program
	食卓	食事	全員	7:30, 12:00, 17:00	program
	イベント	イベント	全員	不定期	program

950303



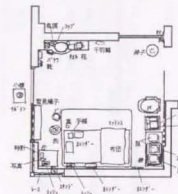
E07

960625



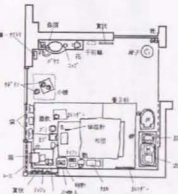
W13

950801



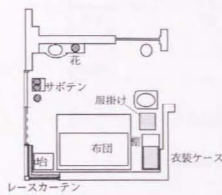
E07

960214



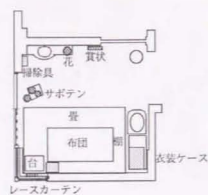
E07

950303 E07



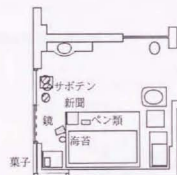
レースカーテン

960214 E07

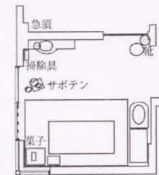


レースカーテン

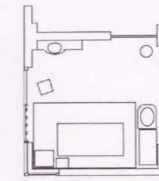
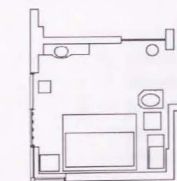
■居室の環境形成  
家具は、入居時に衣装ケースと洋服掛けを子供に新しく購入してもらって持ち込んだ。最近になり、洋服掛けは子供が壊って壊った子供によって窓にレースカーテンをつけてもらった。掃除機の小さいのを持ち込んで部屋の中を掃除したりと、自分の居室の環境をコントロールしている。今は掃除機もなくなった。ディスプレイとして、サポテンと造花を持ち込んでいる。はじめはベッドで寝ていたが、前後が狭かったので、マットレスを敷いて布団で寝るようにした。入り口のところに椅子を置き、階段への出入りの際にちょっと座れるようになっている。



菓子



■自己の建設  
机には菓子や単物が置かれ、自分の好きなきにちょっと置かれるようになっていく。洗面は体調のいいときに洗濯機を回して自分ですることもある。また居室の掃除も以前は自分で掃除機でやっていたが、今はほとんどしていない。普段は外にいるよりも部屋の中で過ごすことが多いが、目が悪くなってきたこともあって、特に趣味や活動をしているわけではない。自分から持ってきたサポテンを部屋に置いており、あまり言葉を話さなくてもいい自分でも水をやっている。サポテンを眺めながら過ごすこともある。

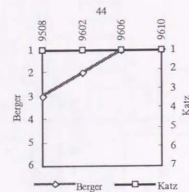
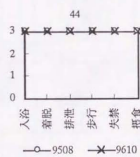


■社会的関係形成  
部屋は掃除機が壊って居室に広がるわけではないが、階段の入り口のところに椅子を置いておき、人と一緒に風呂や家事に行きながら、ちょっと置かれて持っている。共用空間でのコミュニケーションの一部が居室内に少し侵入している。

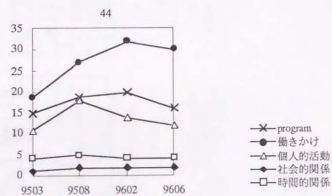
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋			E24	E24	E24	W16	W16
Katz			A	A	A	A	A
Berger				3	2	1	1

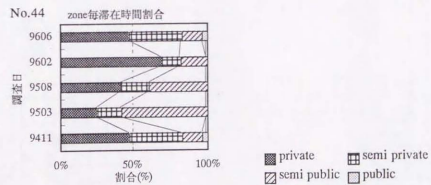
Katzスケールによる動作能力の変化



家具の持ち込み状況の変化

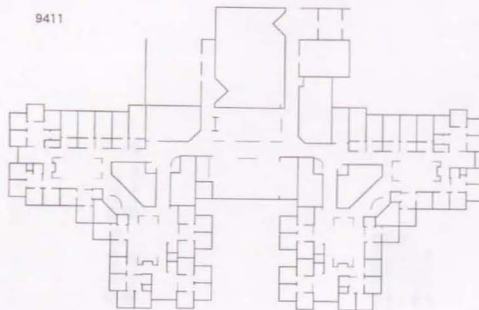


zoneごと滞在時間割合の変化

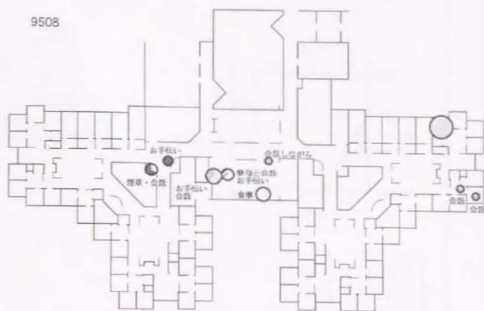




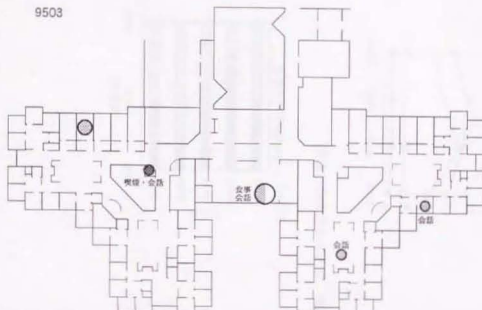
9411



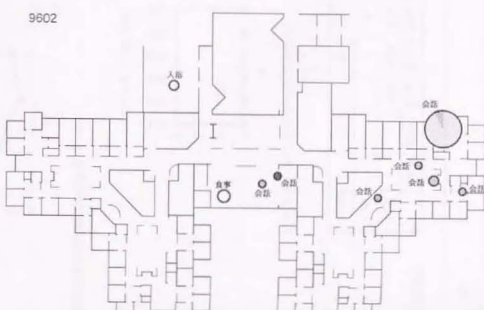
9508



9503



9602



## 44 NS ( 79 歳 女性 )

**心身状況** 病状はそれほど強くない。日常生活には支障はないが、弱っているとややつづまが合わなかったり。身振りが自立度が高く、ほとんど介能して生活が送れる。はじめは軽微の腰に杖をついていたが、みんな歩いているのを見て自分も歩くようになった。同時に腰痛がちでもあり、とこれまでの生活

生まれは宇都宮。和歌山で育ち、23年豊島区移住して、「水産売っててよし、神楽さんのみなさん。仕事は初めにも人に負けない。」夫が約40年前に亡くなって、それ以降一人暮らし。「一人で暮らして楽だった。」入所前は、浦山地区の自宅マンション。

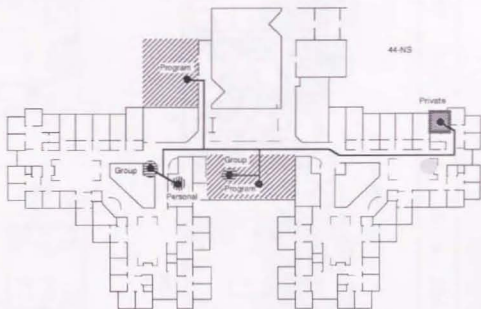
**自分のすること** 昼間は自宅より外出することが多い。「働くのが好きだから」庭から、おしぼり・牛乳配り・おやつ配り・お茶配り・お掃除など、お手伝いを通して生活している時間が多い。「きちんとするのが好き。ちゃんちあんとな仕事する。みんなには負けない。」いつも一線のお手伝い仲間がいる。部屋ではベッドの隅に布団を敷いている。「畳も雑草も一緒にいじやだから、雑草と分けている。雑草はここで。」ごろごろしたり、テレビみたり。TVは「たまに、運動とか打かないでみて。」興味深くては好き。たいてい「自家で見る。」「物代金がする。雑草は石がすき。一人でテレビで必死している。」「自分の洗濯や部屋の掃除は自分でする。ときどき身体の調子が悪くなるので、そんなときには無理で休ませてもらうことがある。」「外に出るにいくときは杖も荷物を持って自分なりに歩いている。」「自分で髪をカット。染めている。」「掃除は、用毛を書くときに使う。」

**社会的関係** 毎朝自炊から夕まで一緒にお手伝いをしていて仲間が一人いて、その人ともっとも仲がいい。食事で仕事をしながら話したり、洗面の合間に雑草を覗きながら話したりしている。自分の部屋に実母が住むこともある。本人は若い頃団地の上に住んでいた。この人のために丸椅子を用意してある。「足が痛くて歩けないから。」このほかにも食事で一緒におしぼりや配りを行ったり、リハビリコーナーの中心で集って話したり、風呂に行きながら話すこともある。家族は来ない。話してくる人はいない。

**時間的関係** もう何十年も使っているタンスは、籠屋より十年真面目に働いたためにもらった物であり、使い続けているという愛着性とともに、当時の思い出を呼び起こす物でもある。用いられた布団は、これまでの生活のスタイルを維持しようという愛着を。現在の自分の活動や社会的つながりなどを示す物にはならない。

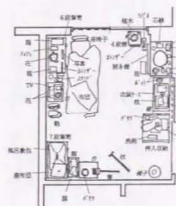
**自宅** 入所前は、浦山地区の自宅マンション。

**施設に対する評価** 部屋には何十年も使っているタンスを持ち込んだり、自分の趣味の人形やギスターを飾ったりと、調整できれば出来ない、自分の足踏らししつらさをしていく。性格的に中々きつことろがあり、遠慮すべしもの言ふから、人間関係でも不協和なところがある。「仕事は何しても人に負けない。これまでずっと正直に生きてきたから、なにやってもなんでもんだ。」この辺りにはまだ苦労が足りない。これまでいろいろな環境で生活したり仕事をしてきたので、とりわけ「施設」に入ったということに対する特別な意識は少ないのかもしれない。



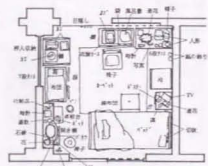
Zone	When	What	Who	When	How
Private	自費	TV	一人	たまに運動と歩行が広いで見たり	用紙は一人でテレビしている
		化粧、身だしなみ 会費	一人 入居者TM	外に出ていくときはいつも	自分で髪をカット 丸椅子を用意しては
S-Priv	リハビリ	会費	入居者、TC		
S-Pub	食費	体操	全員	10:00	program
	食費	体操	全員	7:30, 12:00, 17:00	program
	食費	おしゃべり、会費 雑草	半日・中費 半日・中費TM	昼食・夕食後	おしゃべりしながら仕事 雑草持ち込み

950303



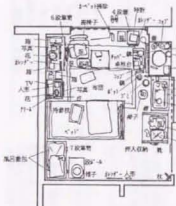
E24

950303



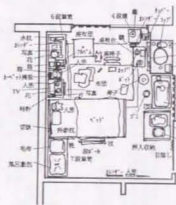
W17

950801



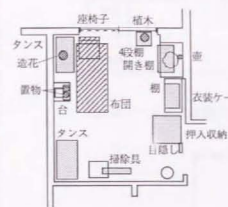
E24

960214



E24

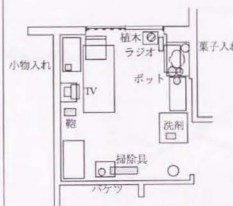
950303 E24



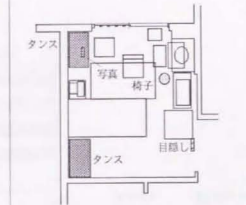
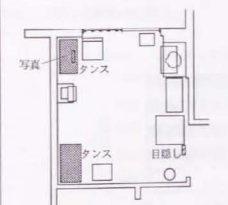
960214 E24



■居室の環境形成  
自宅よりタンス・収納ケース・棚・衣袋ケースなど、多くの家具を持ち込み、自宅との連続性のある環境を形成している。床には布製の目隠しをつけ、また自分で掃除機を持ち込んで掃除をするなど、居室を自分の空間として居残のコントロールを積極的にやっている。入居当初から造花や置物などを持ち込んで飾り付けをしていたが、自分の好きな大人形や目隠し、応じている貴竹のポスターなど、多くの小物が持ち込まれるようになり、自分の好きなものをディスプレイすることによって自分の息吹のいい空間を形成している。鏡写はベッドであるが、自分の造革スタイルに合わせ、床はカーペットを敷いた上で布団を敷き、床は座椅子や布団の上で過ごしている。



■自己の居残  
TVをはじめから自宅から持ち込んでおり、長期間で皆と一緒に見るよりも、自分で好きな番組を見る。自分の時間のコントロールとしては、録音のプログラムを追加せずに居残で見ていることもある。菓子を持ち込んで、自分の好きなものにちょっと食べられるように心がけており、部屋の掃除も自分の気配を全部やっている。着替えや化粧品など、身だしなみに気を使っている。居室内で何か趣味や活動をするようなことはほとんどない。



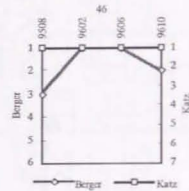
■社会的環境形成  
自分で居室の空間を形成し自分の空間という意識が高く、他者から覗かれないよう入り口の扉にはじめから和紙で目隠しをしていて、物に、密かに目隠しが施されており、外にに対してコントロールしようという意識が強くなっている。入居者の友達が多く居残する中で、施設丸椅子をその脚の悪い友達のために用意している。

■関係性の表示  
居室の空間は、他者との結び付きを示すものはほとんどなく、自分の好きなものや自分の昔から使ってきたものによって、自己居残の強い自分だけの環境が形成されているようである。昔から何十年も使っているタンスは置いていたときにもらったものであり、その時の経験と記憶に結びついている。TVや衣袋ケース、棚、押入収納、座椅子なども自宅から使ってきたものであり、これまで生活の連続性を保つ上で重要な働きをしている。タンスの上には夫の写真が飾られており、妻の人間関係のつながりを呼び起こすものとなっている。

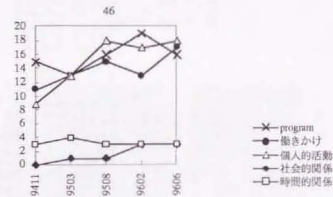
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋		E23	E11	E10	E10	W20	W20
Katz				A	A	A	A
Berger				3	1	1	2

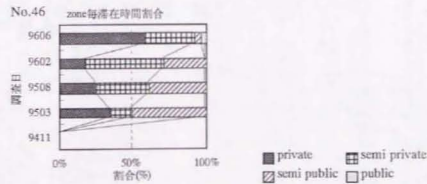
Katzスケールによる動作能力の変化



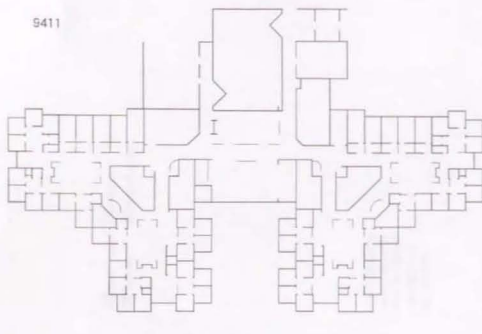
## 家具の持ち込み状況の変化



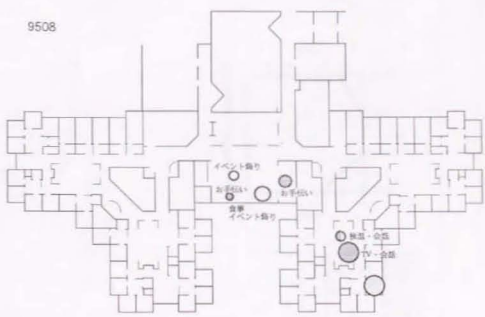
## zoneごと滞在時間割合の変化



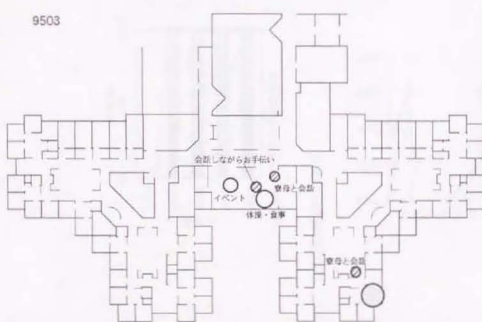
9411



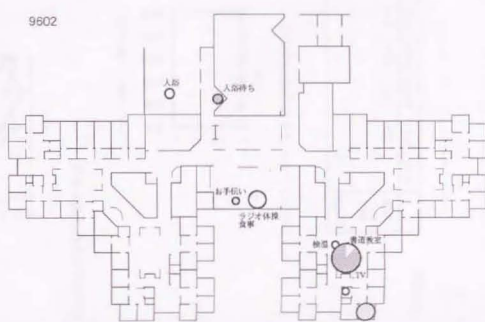
9508



9503



9602



46 日 (75歳 女性)

心身状況 病気がない。身体的にはまったく元気、会話が必要なく一人で自立度が高い。それでも「年寄りだからそこらで苦しくなるよ。」

これまでの生活 宇治市の町営住宅に一人暮らしをしていた。「孤独やから、兄弟も頼もいないし、一人」施設に入居する直前まで、温泉の旅館で働いていた。町営住宅は丘の上であり、先になる道が険しくて降りやすく、大変危険。おかしな死んで背を折って寝たままを入れていたこともあり、まだ体の動かないうちに施設に入れてもらった。

自分のすること はじめは居室にもこもりがちだったが、次第に居室外の共用空間で過ごす時間が かなり長くなった。共用空間では日中はほとんどTVの最新型の椅子に座って、隣の人と話をしながらTVを見ていた。「一人でTV見てたら結構やから、何とよ衆の人の集まってるご様子。こっち側は誰も見とらん(から付かない)」。居室での洗濯物も今は参加している。「体の動く人はやらなくていいし、自分のことは自分でせよ」。居室での過ごし方は、「施設ではTVを見ていたり、特に趣味はない」。居室のものをこまめに掃除している。弁当も少しだけ買ってきて一食まで行くし、風呂の掃除や洗濯は自分でやる。「洗濯は楽に入れたらいいんだけど、少しはかかないから、自分で洗う方がいい」。施設では自宅にいたときの金魚を飼っている。水槽には酸素を送るキータをつけたが、水槽自体もなかなか買えないから(施設が壊れて元の金魚を飼っているが) という言い訳をしている。「これもなかなかいいですよ。生きものも飼ってるからね。今までいろいろ飼って来たが、金魚が一番だ」「もう一人入れた方がいいかな。」

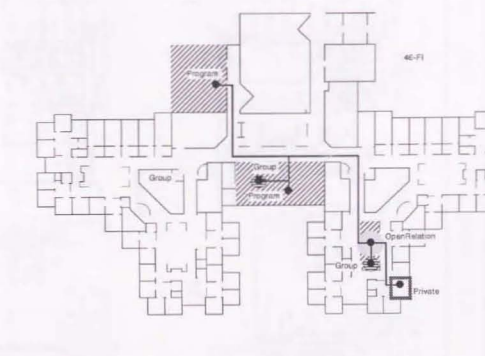
社会的関係 部屋に行き来するようになり会話は少ない。居室になっているので、他の人の声を聞いて良いやら悪いやら。「それが好きな人もいるが、お友達になるのは難しい。一人だけきーとしていたものから、おまのが好きなんだから。私はあまり詳しくするのは好きでない」。入居当初は、自室にいたとよく親しくしていた人の中級グループと一緒に行動し、夜更の時間なども歩いていた。でもいろいろとあったりしたが、次第にそのグループの関係から遠のいていった。「(その人)とは近くには行かないが、プーッと音、前は付き合い合ってたけど、今はない」。他の入居者と話しているより、職員と、とくに担当職員と話していることが多いので、話すことが多い。在宅介護センターで時間を過ごすこともある。「ここにばかりでは退屈してしまう。そのうちだんだんと下の共有共用空間で過ごす時間が長くなり、共用空間にいつも集まる人との話も多くなってきた。そこで特別の人間関係もできあがった。集まってくる人たちの顔つきが覚えていられる。」「寂しいことは少しもない。本来一人やまん。特に仲良しはいるん。理らん方が一番いいだ。」

時間的関係 入居前は一人で平日で暮らしており、家族は誰もいない。「孤独やから、兄弟も頼もいないし、一人、私にも何か来てくれたらどれだけ嬉しいかなと思うが・・・」

自宅 これまでに住んでいた住宅から持ち込んだ物は、仏壇・鏡台・卓袱台くらいで、後はすべて処分した。この時分である程度金銭とのつながりが断ち切られた。家族・親類等がおらず、以前の住居での社会的関係も断ち切られた。

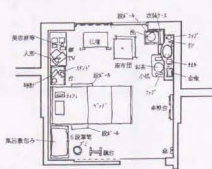
施設に対する評価 入居自体は自分の意思だが、入居過程は「思わぬ人にも、導かれていけるほど荷物を持ってくもんではないけれど、あーからーたがたで連れてきて、皆で来た人におけり」(家は向こうの人のしたるようにして)、自分の意志が反映されなくなっている。その結果、生活がかなり分断されたようだ。「持ち物は半分は自分で持ってきた。いんがはあったから、でもそこで(物)を入れるところがなかったし、新しい服を買ったが、自分の洗濯で洗に分けられるのがあったし、持てれば良かった。」「(こけし人形)は以前に障子に引っ掛けていたが、これ(こけし)だけとって、後全期間で。前はずっつと引っ掛けてあったよ。」

備であることについては、「ここは個人部屋ではないから。これですって一人で来たから」と評価している。施設にいてのことに対しては、「どこも行くこと無いから、廊下中にばらばらるので、(人に)話しかかろうと、それだけ待たせている」。入居して一週間たつた。もちもかなり自立度の高い人が施設に入ることによって感じるキョウフやプレッシャーを表現しているコメントが多く見られ、「外には自由に歩かれない。施設ですから。風呂もって、は、かん。」「買い物もかかんちゅ。行くと思えばどこでもいけるが、なかなか自由に歩かんとて、風呂もちゅ



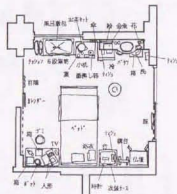
Zone	When	What	Who	When	場
Private	自室	TV、月づけの物	一人	何となく	特に趣味はない 金魚でも見てないよ なる 私にも何か来てく れたいが
		金魚の世話	一人		
S-Pub	広間-TV	TV・金魚 掃除 洗濯 費の支払い	広間直前の人 裏側の人 比較的元気な人	居合わせたとき 9:30ころ	program program
	TV前	TV	KI, KN, WN, YH,	不定期	
	食堂	食事	全員	16:00 7:30, 12:00, 17:00	program program
食堂お手洗い	お手洗い・金魚	手洗い・金魚	全員 手洗い・金魚	不定期 たまに	

941101



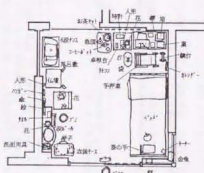
E23

950303



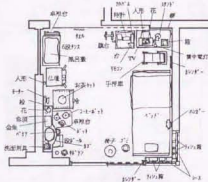
E11

950801



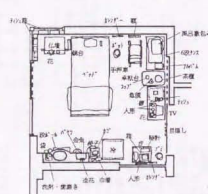
E10

960214



E10

960625

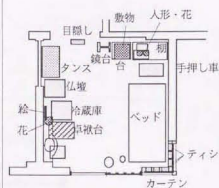


W20

941101 E23

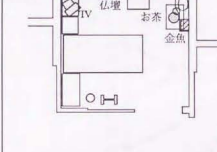


960214 E10

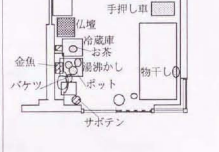


■居室の環境形成  
入居に当たり、周りに施設にはあまりものを持ち込むものではないと決め、自宅の家具はほとんど処分してしまい、新しい頃のタンスと衣装ケースを購入して持ち込んだ。入り口の窓には目隠しをいかにタテが目隠しをしたり、窓にレースのカーテンをつけたりという形で環境に手を加えるようになった。部屋の掃除は自分でやる。入居は目隠しを持ってきたものがあるが、その他に植木や花が飾られるようになってきた。部屋のレイアウトは部屋全体の敷き目を変え、ベッドを壁に寄せて部屋を広く使えるようにした。冷蔵庫も購入で購入した。冷蔵庫は自宅にいたときから使っていたものを持ってきた。

941101 E23

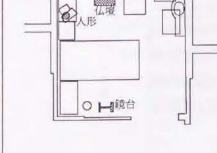


960214 E10

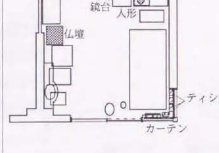


■自己の達成  
TVは番組から持ち込んできた。昼間は共用空間でTVを見ることが多いが、夜などは人に気兼ねせずに自分だけ見ることができると、冷蔵庫は入居後に取り寄せたものを買った。自分でできることは自分でしようとして、部屋の掃除や片づけは自分でしている。掃除機は自分で買った。自分で好きなお茶を自分で入れて飲むことができる。また、現在は何もないが、手押し車いり物を持って部屋に持ち込んでおり、後のことに備えていると思われる。靴、洗濯機などは物がない、小さい洗濯機を持ち込んでおり、お茶セットなどを持っている。前から刺っていた金魚を買って、モーターをつけて、水槽を買って、お茶セットなどを持ってきている。いろいろ世話をしている。

941101 E23



960214 E10



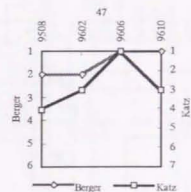
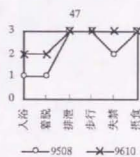
■社会的関係形成  
入居後、周りの人が入り口に目隠しをしているのを見て、自分でタテで目隠しをするようになった。部屋を覗かれないように、部屋の隅にレースのカーテンをつけるだけでなく、ティッシュの箱を下から目の高さくらいまで積み上げて、外からも覗かれないようにしている。部屋の隅から隅から掃除された自分だけの空間を形成しようとしているように思われる。家具などの身元は、職員以外の訪問者はほとんどない。

■関係性の表示  
家具などの身元はほとんど置かれていない。仏壇と鏡を自分で持ち込んでおり、鏡は扉の裏で使っているというが、これらのものが以前の生活との連続性を示すものになっている。飾っているこけしの人形は、入居前に買ったと覚えていないけれども持っていたのを自分と知って中に入れておいておいたものであり、数少ない思い出を呼び起こす物となっている。

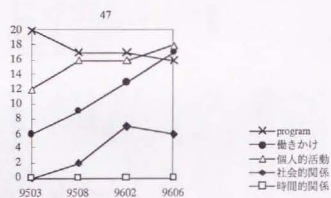
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋			E12	E12	E12	W10	W10
Katz				D	C	A	C
Berger				2	2	1	1

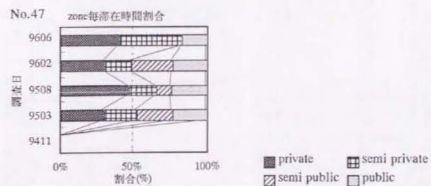
Katzスケールによる動作能力の変化



家具の持ち込み状況の変化

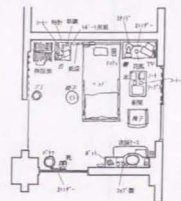


zoneごと滞在時間割合の変化



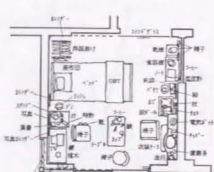


950303



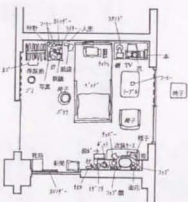
E12

960625



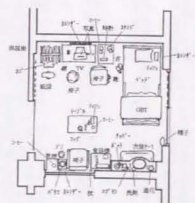
W10

950801



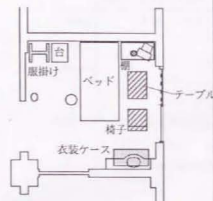
E12

960214

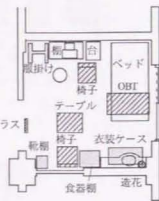


E12

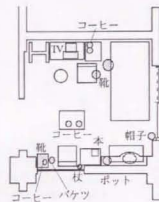
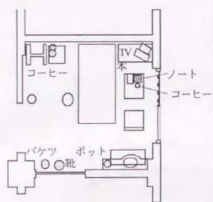
950303 E12



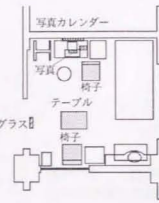
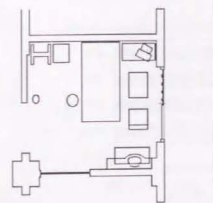
960214 E12



■居室の環境形成  
服が結構あり、洋服掛けの他、衣装ケースを一つ持ち込んでいた。その後、靴をいれる箱と衣箱を子供が買って持ち込んだ。部屋の飾り付けもはじめはほとんどされていなかったが、これもおそろく子供の人の夢の希望などを持ち込んだり、また窓にステンドグラスシールを貼り、外からの視線のコントロールとともに居室内外に好きなディスプレイもなっている。自分のスタイルに合わせてセッティングがかなり随分的にされてきた。部屋がもともと洋室なこともあり、テーブルと椅子を持ち込んだ洋室セッティングとし、部屋の中心もスリッパのまま入るようにしている。はじめは窓にあたるベッドを置く必要は、入り口に近い方にテーブルを配置し、障害可能な環境を実現している。またベッドの手すりからちょうど合う高さの（オーバーヘッドテーブル）を買い余りに作らせて作業用のスペースを確保するなど、環境を積極的に自分に合わせて手を加えている。



■自己の構成  
TVは非常空間で昼と一緒に見るようなことはせず、はじめから持ち込んだTVを自室で見ると、コーヒーが好きなので、調音かしポットとコーヒー、カップなどを作り込んで、自分で入れて飲んでいる。毎日テレビで建物の外景を、自分でルックを決めて何層も見ている。そのため靴を履いても買い、新しく持ち込んだ靴に置いてある。また、杖も歩くときの必需品であり、今使っている杖は部品、これまでに使っていたかなり短くなってしまった杖も、自分の活動の記録として置いてある。



■社会的関係形成  
入り口の意には、ステンドグラスのシールを貼り、部屋の中心に床のすき込みがないが、完全に遮断されないような居室内外の関係を作り出している。はじめテーブルと椅子はベッドの裏に置かれていたが、レイアウトを変更して手前側に置かれるようになり、もう一脚の椅子を持ち込んで、読書や呼び込みで対応できるセッティングとした。それに伴い、それまでは家族が来ても食事などの共用空間であっていただけの、アイシーに欠て来る地域の友人たちも部屋に呼び込むようになった。

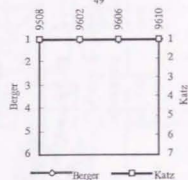
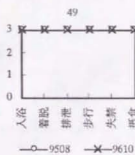
■居住性の表示  
入居当初は築家との関係を示すようなものは特に置かれていなかったが、家族で撮った写真や飾の写真で作ったカレンダーなどが貼られるようになった。家族とつながりが確認できる。日常につながる時間の中で自分を位置づけることができる。



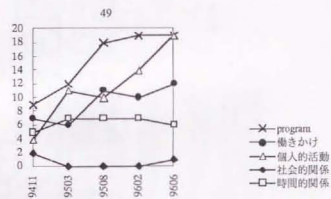
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋	E06	E06	E06	E06	E06	E05	E05
Katz				A	A	A	A
Berger				1	1	1	1

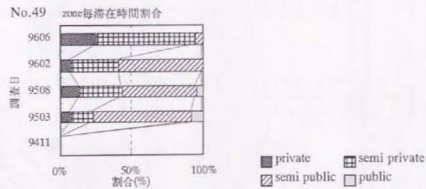
Katzスケールによる動作能力の変化



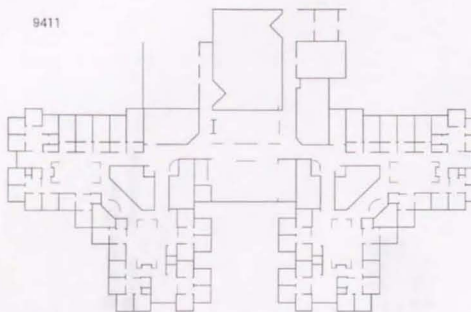
家具の持ち込み状況の変化



zoneごと滞在時間割合の変化



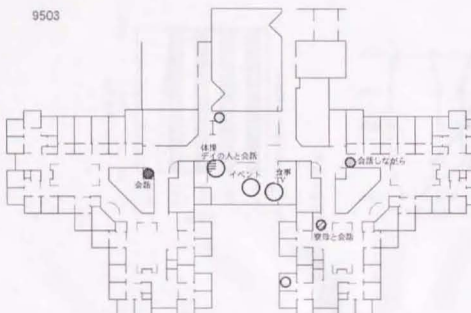
9411



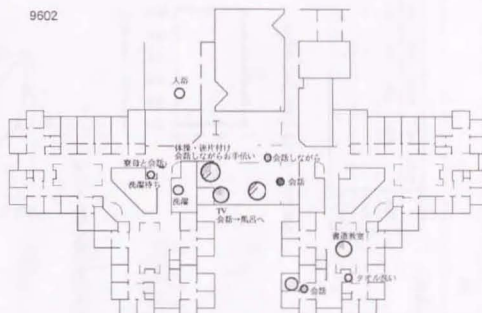
9508



9503



9602



## 49 TM (71歳女性)

心身状況 飽食はまたくない、身体的にもかなり元気で、自由度は高い。家が悪いので、歩くときには杖を使っている。次第に寂しさを覚えるようになった。1日半働きのお手伝いで立ち仕事が多い。

これまでの生活 宇奈月の町で一人暮らし。

## 自分のすること

自分の部屋にいることは少なく、食卓での滞在時間が多くなっている。朝から食事の準備が中心で、洗濯の掃除、あなごの洗濯、洗濯物取り、掃除もほとんど全部のお手伝いをしてもらっている。あまり自由になる時間はない。「ぼーっとしてられない。ぼーっとしてたら、本当は部屋の家具とか磨きたいんですけど。部屋の掃除したりとか。」「はじめのうちはかなり寂れており「寂れたこともありますが、できることは何でもやります。」洗濯コーナーの脇で「こうして洗濯機が映るのを持っていて、一番のんびり出来る。」時間が経って次第に寂れていくなじんでくると、「ここへ来て、大分元気になりました。慣れたせい、元気がなってきたし。」

## 社会的関係

いつも一緒にお手伝いをしていて人と話す機会が多い。洗濯を持つ間に隣の電話コーナーで話したり、洗濯物を積みながら話したりする。このほかにも、お手伝いをするメンバーはある程度決まっており、食卓のワッシャーのところをしばしば来る者も少なからず話している。居室外の共用空間の集まりに促されて話をすることもありますが、それと機嫌のいい、全体的に他の人関係とほぼ同じとした関わり方をしている。「部屋に行き詰まっていますが、でも深入りはない。あまり聞かなくていい、聞いて、大抵は自然発生的に話します。互いに一つでもも同じ持っている人もいろいろ、話聞いてすええ。」「あんまり他の人のところへ遊びに行くのは好きじゃないです。」

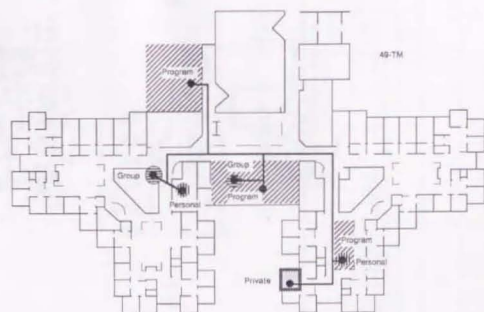
## 時間的関係

自宅からタクシー・車・人形・縁台・椅子などが持ち込まれ、(居室内では)以前の自宅での生活との連続性を感じようという意識が窺われる。過去になした子供の写真と信牌も持ち込まれ、思い出を呼び起こす物となっている。

## 日記

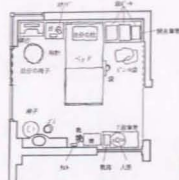
## 施設に対する評価

「最初は何が何だか全然分からなかった。入ってきたときは、これが結構いいな、きびしいよな。これで自分も最後かいな、と思いましたが。今ではもう慣れてそんなこと思いませんけど。まあいい人たちがいる。居室には何かあったら家具を数多く持ち込んで、種の間は居室にはほとんど戻る暇がないほど仕事をしてくれて、「本当は部屋の家具とか磨きたいんですけど、部屋の掃除したりとか。」と、もっと居室内の関わりを深めたいという思いがある。はじめのうちはかなり寂れていったが、次第になれてくると、それでは自分の部屋のように感じます。お茶くみ、3度3度の食事の準備で、休む暇もなく忙し。慣れてきました。最初は毎日居室にお手伝い、汗ばむ、洗濯、たたくのも、ずいぶん慣れてきたが、慣れてきました。部屋にはほとんど持ちません。こうして洗濯機が映るのを持っていて、一番のんびり出来る。」



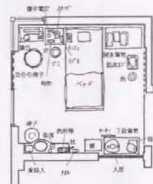
Zone	Where	What	Who	When	誰
Private	居室	TV	一人		日が暮れたら観たい
S-Priv	広間・TV	佛壇	一人	仕舞の終わった後	personal
		佛壇	宗教的人	19:30ころ	program
S-Pub	食卓	佛壇	宗教的人	不定期	program
		佛壇	宗教的人	16:00	program
S-Pub	食卓	佛壇	全員	7:30, 12:00, 17:00	personal
		佛壇	全員	食前食後	group
S-Pub	食卓・TV	佛壇	手伝い・仲間	昼食・夕食後	お喋りしながら仕事
		佛壇	手伝い・仲間	昼食・夕食後	一人でこなしている時
S-Pub	電話コーナー	佛壇	手伝い・仲間	昼食・夕食後	お喋りしながら仕事
		佛壇	手伝い・仲間	昼食・夕食後	一人でこなしている時

941101



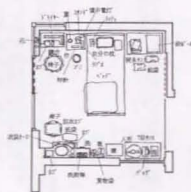
E06

950303



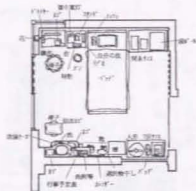
E06

950801



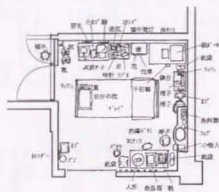
E06

960214



E06

960625

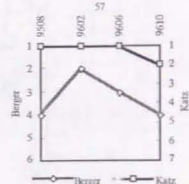
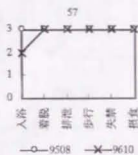


E05

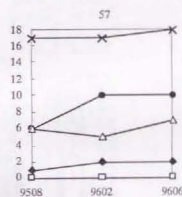
## 心身状況

	9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610
部屋				E13	E13	E09	E09
Katz				A	A	A	B
Berger				4	2	3	4

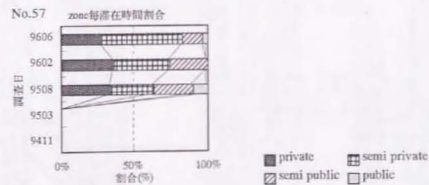
## Katzスケールによる動作能力の変化



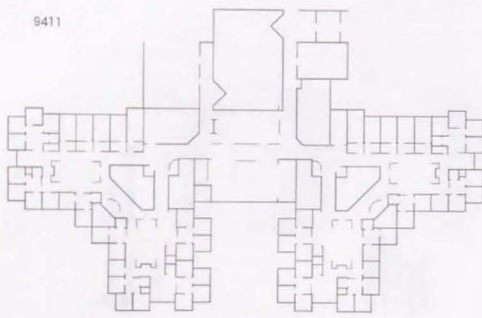
## 家具の持ち込み状況の変化



## zoneごと滞在時間割合の変化



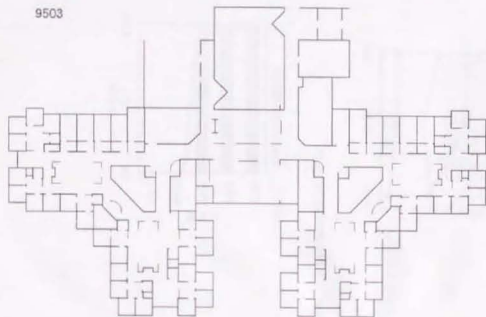
9411



9508



9503



9602



## 57 TY (89歳女性)

**心身状況** 痴呆ははじめ中度とみられていたが、その後は軽度とみられるようになった。身体的にはかなり元気で、自立度が高い。ほとんど介助なしで生活をおくることができる。「これまでほとんど医者知らず。足が痛かったことはある。」

**これまでの生活** 家は受本地区。樺の向こう側。農業をやっていた。家族と同居していた。「(女でも)そこに家族が安心する。子供やら孫がいっぱい。」「借りたところは家に帰る方がよい。」「家もいいよー。隣の家もその隣の家もあるし。」「入居前からデザイナーズでこの施設を利用していた。」

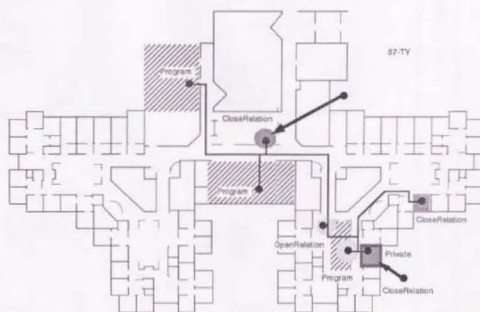
**自分のすること** 一日のうち、比較的時間の外で過ごす時間が多い方である。自然の活用範囲について、「TVを反たり観合われた人と会話したりする。ただ、ずっと外に出たいというよりも、ちょくちょく庭園に降りながら、という行動である。朝の体操や読書など、自身のプログラムにはなるべく参加する。同様の人がもう一人より、その人の部屋へ行って話を聞いて過ごすこともある。」「生きたまま寝て逝るのだから、あつち行った方がいいですよ。外はあまり行きませんですけど、私はおばあさんだから死んでもいいけど、ここの人に迷惑かけないんよ。」

**社会的関係** 部屋の隣の人、同様の人は、同じ村の出身同士なので仲がいい。「行ったり来たりしてますよ。」「隣の部屋の人は部屋で外のスペースを共有しているから「同じ家にいるようにみえたら好きよ。」「自身の利用範囲を越えることが多いので、いつかうちに来るメンバーとは、TV観ながら、新聞読みながら会話したりする。親子のような感じで非常に仲がいい。日に何度も部屋を覗いたり遊びに行ったりしている。「ここでは知っているのは隣の人だけだもんねー。他の人はわからない。あつちの方からこっちの方から来りますよ。」「もともとデザイナーズを利用してか入居したので、今もデザイナーズで来る村の人には知り合いが多い。デザイナーズの方へ加わって一緒に話したりする。子どもは女の子1人、男の子1人。「1カ月前くらいのことはいないねえ。そばにいない形ならもともとよく来る人だよ。」

**時間的関係** 過去の連続性や過去とのつながりを確認するような物は持ち込まれておらず、以前の生活とはある程度切り離されているようである。朝子をかかえて外で取取りなどの作業をするのがあり、生活行動の上での連続性がある程度現れている。

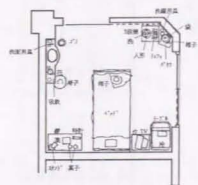
**自宅** 家は受本地区。樺の向こう側。今でも家族はみんな残っている。子供やら孫がいっぱい。「借りたところには家に帰ろうかな。」「家もいいよー。隣の家もその隣の家もあるし。」

**施設に対する評価** 「(施設には)1ヶ月くらい前に入った。何となく慣れた。何となく慣れた。「ここもいいかなー」と思ってたけど、どこいでも一緒よ。どこかに行くと、家いいともあれは楽しいこともある。ここは死ぬまでおられる方がいいですよ。」「そのために何かは付帯に居ることを見直してきており、そのときのために自宅の環境を変えたりしている。「家にいかにゃならん。部屋もその部屋もある。いままでもおられてましたよ。やどりやす。そうしよ。」「家もいいよー。隣の家もその隣の家もあるし。ここは知っているのは隣の人だけだもんねー。他の人はわからない。あつちの方からこっちの方から来りますよ。」



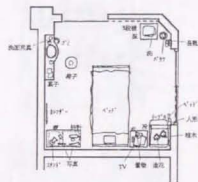
Zone	Where	What	Who	When	頻
Private	居室	会話、会話	家族	1ヶ月来んというこはなし	
Private	居室	読書、会話	隣の人1人	頻繁	子どものような感じ
S-Pri	広間等	会話	広間着席の人	観合おむたとき	
S-Pri	広間等	読書	菓種の人	9:30ころ	program
S-Pri	食堂等	読書	読書好きな人	不定期	program
S-Pri	食堂	体操	全員	10:30	program
S-Pri	食堂	食事	全員	7:30, 12:00, 17:00	program
Public	廊下	散歩	一人		

950808



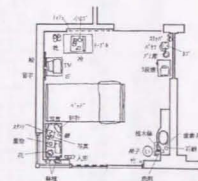
E13

960214



E13

960625

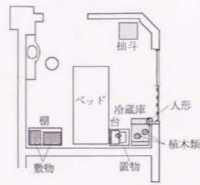


E09

950808 E-13

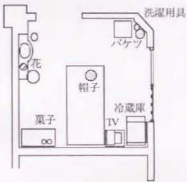


960214 E-13

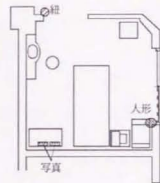
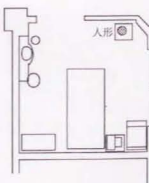


■居室の環境形成  
持ち込まれた家具は3段の棚と冷蔵庫の  
買ったテーブルくらいで、その後も変化は  
ない。飾り付けとしては、子供の作った人  
形と植木が一つ持ち込まれた。その  
後、遊びがもう一つ持ち込まれた。また床  
裏物の上に敷物が敷かれるようになった。  
全体として、持ち込みの少ないシンプルな  
部屋環境である。

■自己の達成  
TVははじめからの持ち込みで、寝ながら  
見られるようになっている。自分の好きな  
ときにちょっと見られるよう、お菓子も  
持ち込まれている。バケツに洗濯用具が  
入っており、自分でできるものは自分で洗  
濯している。子供の持ってきた植木は自分  
で世話をし、毎日本をやっている。



■自己の達成  
TVははじめからの持ち込みで、寝ながら  
見られるようになっている。自分の好きな  
ときにちょっと見られるよう、お菓子も  
持ち込まれている。バケツに洗濯用具が  
入っており、自分でできるものは自分で洗  
濯している。子供の持ってきた植木は自分  
で世話をし、毎日本をやっている。



■社会的関係形成  
入り口の外部に貼っている紙は、船来の  
人がどこまで関係して来るかという事を懸  
念しているから、用心のために貼っている。隣の  
人がつけているのを見て、隣の部屋の人が  
同じ材料から人形を作った人形と行儀をしてい  
る。

■関係性の表示  
貼ってある人形は子供たちが作ってくれ  
たもの、それほど可愛いとは思っていないが、  
つながりを示すものとして置いてある。

